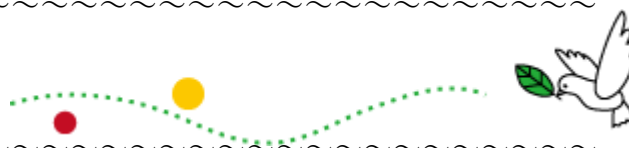


「近代」というシナプス

～連鎖する「近代革命」～

シンキング・バーズ

歴史科学研究班



目次

第3章 海洋のコスモロジー

◆海洋の教徒たちと東アジアの海賊たち

・「ヒト」と「動物」	48
【コラム】「本性」への眼差し	49
・ポルトガルのアフリカ航路開拓	50
【コラム】黄金伝説	52
【コラム】「法王」と「教皇」	53
・東アジア海域の秩序崩壊	54
【コラム】海と神	54
【コラム】倭寇をめぐる「国籍」	56
・ポルトガル人と東アジア人	57

◆海洋を渡る技術とモノたちのミッション

・大航海を支えた造船技術	68
【コラム】コロンブスの評価	69
【コラム】木材で栄え、木材で衰退する	70
・地球上の経度と「教皇子午線」	74
【コラム】時計の精度	77
・火薬の時代への序章	78
【コラム】人工硝石	80
・海を渡る鉄砲	82
・メディカル・ミステリー・ツアー	89

第3章 海洋のコスモロジー

海洋の教徒たちと

東アジアの海賊たち

●「ヒト」と「動物」

生

物学上の分類で「ヒト (Homo)」は、「動物 (Animal)」に属し、脊椎動物門・哺乳綱・霊長目・ヒト科・ホモ属の生き物とされています。一般的にはホモ・サピエンス (Homo Sapiens) と呼ばれ、ほぼ共通のDNAを持っています。

もちろんこの定義は、「近代」の産物です。分類学 (Taxonomy) とダーウィン (Charles Robert Darwin 1809–1882) 以降の生物の「進化 (evolution)」を唱える学説から、「特徴の顕著になった永続的な変種」として位置づけられたものです。

「動物」に属している「ヒト」が、「動物」と「ヒト」を区別する意識は、いつから生まれたのでしょうか。「ヒト」に対して、「ケダモノ」「ブタ」「イヌ」「畜生」などと呼ぶことがある反面、「ネズミ」「キツネ」「ウサギ」「ネコ」などを、「ヒト」と同じように二本足で歩かせてことばを使わせる物語は、「ヒト」と「動物」との線引きを曖昧なものにします。「ヒト」には「動物」と同じものが宿り、「動物」にもまた、「ヒト」と同じものが宿っているという認識がなければ、混同と思える物語は、生まれなかったでしょう。

◆「動物」を見る眼差し

「ヒト」と「動物」の社会的関係は、食用をはじめとする「ヒト」にとっての有用性で区分できます。

有用な「動物」には、狩猟漁労の対象となる野生状態の「動物」、飼育して肉や乳を食用にするための「家畜動物 (ニワトリや牛な

ど)」、食用頻度は少ないものの労働力に活用する「飼育動物 (馬など)」、愛玩用として飼う「動物 (ペット)」があります。それ以外の「動物」は、「ヒト」に危害を及ぼす可能性がある場合、「ヒト」の生活空間に入り込まないように防御策を講じたり、駆除を目的に殺害するなどの方策を講じて来ました。

ヨーロッパでは、「ヒト」と「動物」との社会的関係に、もう一つの要素がありました。古くはローマ帝国時代に、動物同士や奴隷と動物を格闘させたり、飼育動物による芸妓などを行わせ、娯楽と鑑賞の対象にしました。中世に入ると、神聖ローマ皇帝などの王侯が、珍獣の蒐集に努め、近隣諸国との友好関係を誇示するツールとして、動物園 (Zoo) が生まれました。最初の大規模な動物園 (First great menagerie) は、神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世 (Friedrich II 1194–1250) が、1235 年にイタリア南部に造ったとされています。彼は、宮廷を移転する際に、多くの動物を従え、行列をなして移動したと伝えられています。多様な「動物」は、権力者の力量を示す道具として、人々の好奇心を煽りながら、鑑賞されるようになったのです。

また、「ヒト」と「動物」の同一化は、ヨーロッパの場合は神の下で起こりました。ある意味で「動物」は「ヒト」でした。「動物」が何らかの危害行為に及んだ場合、被告になるのは加害動物で、飼い主などの「ヒト」ではありませんでした。13 世紀に始まったとされる動物裁判 (Animal trial) は、17 世紀まで続き、世俗裁判では主に家畜、宗教裁判では害虫などが法廷に出て、実刑や破門などの判決を受けました。大量に発生したバッタを法廷で破門にしてみても、バッタが「罪」を悔いる訳はないのですが、神の下で「動物」

歴史研究

「近代」というシナプス

は、「ヒト」と同じ基準で裁かれたのです。ここには、日本の『鳥獣戯画』にみられるような、「動物」の擬人化がありました。

ちなみに、日本での愛玩動物（ペット）の飼育は、徳川綱吉（1646－1709）による「生類憐みの令（1685年）」で一般化しました。かつての「天下の悪法」という評価は、生命倫理の観点から見直されています。

◆「異なるヒト」を見る眼差し

「ヒト」と「動物」との曖昧な境界線は、「ヒト」同士の同種性も曖昧にしていました。いわゆる「人種（race）」への眼差しです。肌の色や容貌のちがひ、言語、思考、風習などのちがひによる異質性は、相互に相手を「動物」とみなすと同時に、一定の同質性を持つ生き物とみなしていたと考えられます。「ちがうけど、同じ」、あるいは「同じだけど、ちがう」という認識の仕方です。「大航海時代（Age of Discovery）」は、その「異なるヒト」同士の出会いを、一気に増加させたことは確かです。

ヨーロッパの“Barbarian（野蛮人）”は、ギリシャ・ローマの地中海世界の視点で形成されました。ラテン語の“babarus（ギリシャ語 barabario）”は、ギリシャ・ローマ人以外の人々を指すことばです。古くはフェニキア人が、エジプト以西のアフリカ北西部に暮らす人々を、「ベルベル人（bar-bar と意味不明なことばを話す人々）」と呼んだことに由来すると言われます。また、3世紀頃から始まったゲルマン民族大移動で、ローマ世界から見たゲルマン諸族が“barbarus”とされました。いずれも、ある地域文化から見た時の「異界（人）」を表しています。

一方、現在の東ヨーロッパ地域に暮らす人々が自称した“Slav（栄光）”は、ギリシャ・ローマ時代に「奴隷（Slave）」層を形成し、自称尊称を他称蔑視する用語になりました。中世以降の西ヨーロッパでは、東ヨーロ

「本性」への眼差し

■ヒトの本来の姿は「悪」なのか？

「本性」という日本語は、「ほんせい」または「ほんしょう」と読みます。共に「本来の性質」という意味です。「ほんせい」は、物質の本来の性質などを含めて使われるのに対し、「ほんしょう」は、ヒトが仮面を外した時の「正体」のような、「真の姿」の意味で使われる傾向があります。英語では共に“nature”に相当する概念です。

“nature”の一般的な日本語訳は、「自然」です。しかし、「本性（生まれながらの自然）」の意味に対応するのは、「野生」「本能」「天性」などが挙げられます。この「生まれながらの自然」に対してキリスト教は、世界観として否定的です。それは、この宗教の立脚点がそもそも、ヒトの存在を「罪＝悪」とする性悪説に依っているためと言われます。「自然状態（natural state）＝罪＝悪」となるのです。そのため、いわゆる「未開（primitive）」の人々や非キリスト教徒は、“nature（野生）”とみなされ、「野蛮」のレッテルが貼られました。

このキリスト教的諦念の克服は、18世紀まで待たなければなりません。16世紀段階では、例えば生まれたての赤ちゃんは、自然状態に最も近いから「悪」なのか？ 衣を脱ぎ捨てた裸体の女性は、自然な姿だから「罪」なのか？ その女性に恋愛感情を抱くことは、自然に起こった心理だから「罪悪」なのか？ と、まだ思念的です。

■「科学的」見解への道

キリスト教的性悪説に対して、自然状態を「善」とするような、性善説的見解が台頭します。「神」に代わるものとして「理性（Reason）」を打ち出しながら、科学的（唯物的）に事柄を説明しようとする風潮が高まって行くのです。ダーウィンも、その一人と言えます。唯物的思考は、自然科学の基本中の基本ですが、脱唯心に賛同した生物学者たちは、“Naturalist（自然主義者）”と呼ばれました。詳細は、18世紀の章であらためて取り上げます。

歴史研究

「近代」というシナプス

ツパ圏の人々を、労働力として使役するケースが多く、下層を形成する傾向にありました。英語の“Slave”は、その歴史的背景から生まれたとされています。

これに対して“Savage（野蛮な）”は、「森林」を意味するラテン語“silva”が語源とされています。スペイン語の“silvano”には「森の神」の意義があり、英語の“sylvan（森の精）”が、その系統語と言えます。必ずしも蔑視語とは言えず、「森の中で生きる人々」のイメージが、「未開の、野蛮な」に繋がりました。フランス語の“sauvage（森の）”には、ケルト的価値観（Celtic value）として「神聖な」が含まれていると言えます。ちなみに、現代英語の“Savage”には、「すごい」を意味する用法があるようです。

一方、イスラム圏のヨーロッパ人の呼称は、総じて「フランク（キ）」でした。中国では、王朝の支配が及ばない地域の人々を、「北匈奴」「南蛮」「西戎」「東夷」などと呼んで区別しました。日本にも、「蝦夷（えぞ/えみし）」や「南蛮」などの蔑称がありました。

◆新たな出会いへの船出

異族との出会いは、有史以来、各地で起こっていたことです。また、その異族を「野蛮」として脅威と差別の対象とする風習も、「近代」に固有の現象とは言えません。

しかし、「近代」以降、ユーラシアとアフリカ北部に限られていた出会いの枠組みが、地球規模にまで拡大しました。ヨーロッパ人が「発見（discovery）」と呼ぶ多様な人々との出会いによって、「世界（world）」が拡張し、新たな段階を迎えました。

「ヒト」の動物生態学は、ある意味では歴史を無用の長物にします。ホモ属の動物行動としての歩みは、まさに動物じみて、歴史を踏みにじるのです。しかし、「ヒト」は「ヒト」である。海洋への16世紀の人類の船出は、「ヒト≡動物」が交錯する旅路でした。

●ポルトガルのアフリカ航路開拓

海

洋を渡った人類は、ポルトガル人やスペイン人が最初ではありません。BC 450年頃、カルタゴのハンノ（Hanno the Navigator）なる人物が、アフリカ西海岸を探検したとする記録が残っています。太平洋の島々を渡ったポリネシアの人々（Polynesians）は、3世紀頃にはハワイ諸島（Hawaiian Islands）にたどり着いたと推測されています。8世紀頃から海洋航海を始めたノルマン人（Normans）は、アイスランド（Iceland）やグリーンランド（Greenland）に移住し、北アメリカ（Labrador）に達したと言われています。南太平洋上のイースター島（Easter Island）への移住は、13世紀頃と考えられています。明朝期の中国で、鄭和が、越国（ヴェトナム）からインドを経て、アラビア半島、アフリカ東海岸に至ったのも、先行事例の一つです。

その意味では、ポルトガル人とスペイン人による海洋航海の時代を、「大航海時代（Age of Discovery）」なることばで特筆するのは、歴史記述としては、適正とは言えません。

しかし、「近代」という枠組みで考えると、その後の世界に与えた影響という点で、その差は歴然としています。南北アメリカのみならず、アジア、アフリカ地域の歴史にも大きな影響を与えた功罪は、計り知れないものがあるのです。良く言えば、物流や人の交流のグローバルな世界史は、ポルトガルとスペインの動きから始まりました。悪く言えば、ユーラシア史を超えた侵略の世界史が、両国によって始まったのです。

◆辺境の攻防

前章でも述べたように、15世紀の西ヨーロッパは、東からの圧力を受け、ドン詰まり状態でした。その西端にあるポルトガルは、地中海世界にとっては辺境（Marginal Land）に位置し、イベリア半島南部のイスラム勢力

歴史研究

「近代」というシナプス

と対峙していました。ポルトガルは、イスラム勢力圏から一足早く脱していたとはいえ、脅威が払拭されてはいませんでした。そんな中、東からの圧力に、ところてん式に押し出されるように、ポルトガルの海洋進出は始まりました。

ポルトガルの海洋進出は、北西アフリカのイスラム勢力の拠点に対して、イベリア半島への支援を断つ、軍事戦略として始まったことはほぼ確実です。いわゆる「ベルベル人」が居住するその地域は、イスラム勢力にとっても「辺境」で、辺境同士の勢力争いという性格を帯びていました。そのため、キリスト教勢力とイスラム教勢力は、モザイク模様の攻防を繰り返しました。イベリア半島南部に

はイスラム勢力のグレナダ王国 (Reino de Granada 1232-1492) がある一方、アフリカ側の西サハラでは、ベルベル人系のマリーン朝 (Sultanato benimerín 1196-1467) が、内紛続きで、キリスト教勢力の侵攻を受けるといった状態でした。また、キリスト教勢力も一枚岩ではなく、ポルトガルとカスティーリャ (Castilla) の間には、利権対立がくすぶっていました。キリスト教勢力が、明確に攻勢に転じるのは、15世紀以降のことです。ポルトガルのエンリケ航海王子 (Infante Dom Henrique 1394-1460) が、野心的な戦略を展開した時代に対応します。

◆エンリケ航海王子

地図に示したように、エンリケ時代のポルトガルは、たびたび

西サハラに侵攻し、その拠点を占領しています。1415年にジブラルタル海峡に面したセウタ (Ceuta) を占領、南部のアズミール (Azamor) 付近などにも、侵攻を繰り返しました。この侵攻と内紛によってマリーン朝は弱体化し、1470年に滅亡します。続くフェズ王国 (Reino de Fez 1472-1550) の時代になると、ポルトガルによる西サハラ侵攻は、さらに加速しました。

エンリケ時代のポルトガル人は、マリーン朝下で世界を旅したイブン・バトゥ



歴史研究

「近代」というシナプス

ータ (Ibn Baṭṭūṭah 1304 - 77 頃) が残した知見やサハラ交易商人の情報に、一定の頻度で接していたと思われます。イブン・バトゥータの旅は、アフリカ内陸部から西アジア、インド、中国にまで及び、当時の世界認識の広さとしては、最高水準でした。エンリケの海洋航海への挑戦は、それらの知見の地を、実地に探索する性格を帯びるようになりました。いわゆる「プレスター・ジョン」探しの冒険です。

エンリケ時代のアフリカ航路開拓は、1460年代までに、シエラレオネ (Sierra Leone) 付近にまで達しました。その間に、産金で栄えたマリ帝国 (Império do Mali 1230 頃—1645) の支配地だったと推測されるセネガル川河口に至り、大量の金を手に入れることに成功しました。その金で、独自の金貨を鑄造しました (1452 年)。

また、西サハラから連れ帰ったアフリカ人が、1441 年にエンリケに献上されたのが、「アフリカ奴隷貿易 (Slavery in Africa)」の始まりとされています。15 世紀のリスボンは、アフリカからの移民の中心地となり、数千人が暮らしていたとされています。ヨーロッパ人による奴隷貿易の慣行は、規模とエリアを拡大しながら、19 世紀まで続きました。

◆教皇のお墨付き

ポルトガルの航路開拓は、イブン・バトゥータの旅やイスラム商人の商隊行動とは、明らかに性格が異なります。そこには、武装した乗員による粗暴な (barbarous) 武力行為があったと考えられ、攻撃を辞さない行動と考えるのが妥当です。

この行為を正当化したのが、ローマ教皇・ニコラウス 5 世 (Pope Nicholas V 1397—1455) とされています。ポルトガル王・アフォンソ 5 世 (Afonso V 1432—1481) は、カスティーリャ王との利権対立の中で、ポルトガル利権の優位を確保するため、ローマ教

黄金伝説

■ヒトは、なぜ金に目が眩むのか

ポルトガルによる「発見」がある以前のアフリカ大西洋岸には、いくつかの国々があったとされています。西サハラを含む地中海岸の北アフリカは、イスラム勢力圏として認識されていましたが、現在のダカール (モーリタニア南部) 付近にあるヴェルデ岬以南は、ほぼ「未知の領域」でした。

イスラム圏の認識として、現在のマリ南部を拠点としたマリ帝国は、皇帝が豪華な訪問団と共にカイロに來たことがあるとされ、現在のセネガル近郊も、その勢力下にあったと考えられています。その主要な経済基盤は産金で、カイロ市民に大量の金を施すほど潤沢だったとする伝説が、当時のヨーロッパにも広まりました。

黄金伝説は、ヨーロッパ人が海洋航海に向かった動機の一つと言えます。憧憬的かつ物欲的な動機ですが、彼らの航海が総じて、「黄金の国」を目指した側面があることは否めません。その意味で、マルコ・ポーロによって「黄金の島」とされたジパング (日本) は、目指すべき対象の一つだったのでしょうか。

ポルトガルは、マリ帝国勢力圏の人々との接触を通じて、金の入手に成功し、いわゆる「ポルトガル海洋帝国」の経済基盤の一步を踏み出したとされています。それを見た他国は、我も我もと身を乗り出し、黄金探し争いを演じて行きます。それが、動物としてのヒトの摂理なののでしょうか。

~~~~~

ギニア湾に面した海岸線は、現在も 4 つの名称で呼ばれることがあります。

1. 穀物海岸 (Grain Coast)  
＝リベリア付近
2. 象牙海岸 (Ivory Coast)  
＝コートジボアール付近
3. 黄金海岸 (Gold Coast)  
＝ガーナ付近
4. 奴隷海岸 (Slave Coast)  
＝ナイジェリア付近

この 4 つの名称は、ポルトガル人が積み出した主要交易品名に由来すると言われています。このうちの半分 (象牙と奴隷) は、現行の国際法で、一切の商取引が禁じられている行為です。

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

皇に調停を仰ぎました。その調停で、次のような認識が示されたとする史料があります。

Praefato Alfonso Regi, quoscumque Sarracenos, et Paganos, aliosque Christi inimicos ubicumque constitutos, ac regna, ducatus, principatus, dominia, possessiones, et mobilia, et immobilia bona quaecumque per eos detenta, ac possessa invadendi, conquerendi, expugnandi, debellandi, et subjugandi, illorumque personas in perpetuam servitutem redigendi, ac... (アルフォンソ国王に、サラセン人と異教徒、並びに、キリストに敵対するいかなる者をも、襲い、攻撃し、敗北させ、屈服させた上で、彼等の王国、公領、公国、主権、支配、動産、不動産を問わず凡ゆる所有物を奪取し、その住民を終身奴隷に貶めるための、完全かつ制約なき権利を授与した)。(1455年1月8日 教皇ニコラウス)

この原語訳の信憑性は、定かではありません。同文書の英語版によると、内容は同じですが、力点がちがう印象を受けます。引用文では、ローマ教皇が異教徒などへの攻撃を、ポルトガル国王に強く奨めている印象です。それに対して英語版では、侵略や略奪の大言壮語を唱えているのはポルトガル国王で、その征服地の支配権や財産権の承認を、ローマ教皇に乞う印象です。征服住民は改宗させる

## 「法王」と「教皇」

ローマ・カトリック教会の“Papa (パパ)”の日本語訳は、日本のカトリック団体が「教皇」で統一するとしています。しかし、駐日「ローマ法王庁大使館」の名称が長く公式登録されているため、日本政府とマスコミ各社は「法王」を用いていました。しかし、「教皇」と改めたため、ここではそれに従います。

としています。ローマ教皇は、その要請への承認を、キリスト教の真理に基づく限りとし、教義にないことは、あずかり知らぬとしています。積極的推奨か、消極的承認かのちがいです。しかし、ニコラウス5世が西サハラへの侵略行為の追認を、1452年から1454年までに3度示したことは確かです。

- ・『Dum Diversas (ドゥム・ディベルサス)』(1452年)
- ・『Divino Amore Communiti (ディヴィーノ・アモーレ・コムニティ)』(1452年)
- ・『Romanus Pontifex (ロマーヌス・ポンティフェックス)』(1455年)

引用した1455年の規でローマ教皇は、積極的か消極的かはともかく、ポルトガルの略奪地や港湾などの権利を、拡大解釈が可能な形で認めています。折しもその間の1453年は、コンスタンティノーブルが、オスマン勢力に包囲されて陥落した年に当たります。

この承認によって、西サハラにおけるポルトガルの優位が、確定的になったと言えるのです。当時のポルトガルとカスティーリャの力関係が、ポルトガル寄りの傾向にあったことが伺えます。

- ① ポルトガルは「レコンキスタ」を完結していたのに対し、カスティーリャは未完結だった。
- ② 西サハラに対する侵攻は、ポルトガルがカスティーリャを上回る状態だった。
- ③ キャラベル船の開発により、造船技術と航海技術の双方で、ポルトガルが優位に立っていた。
- ④ ポルトガルは、アフリカ産金を手に入れたことで、ローマ教皇を買収することが可能だった。

ローマ教皇によるこのお墨付きは、未知の世界への新たな「十字軍 (Crusade)」を推進するという解釈を可能にしました。ヨーロッパと敵対したことのない人々への「十字軍」



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

は、明らかに理不尽です。ポルトガルはこれ以降、アフリカ航路開拓をさらに推し進め、1488年には喜望峰に達します。追い詰められた西ヨーロッパの逆襲が、始まったのです。

ローマ教皇のお墨付きは、布教と軍事的拡張を融合させ、国益による非キリスト教徒からの搾取を可能にしました。そして、「レコンキスタ」を完結したスペインが、ポルトガルとの航路開拓競争に乗り出すと、その海洋展開は過熱し、妄想の世界分割を生みました。アレキサンドル6世（Alexander VI 1431－1503）は、1493年の「インテル・カエテラ（Inter caetera）」で、布教を前提とした「教皇子午線（Demarcation Line）」を設定し、両国王とローマ教皇の3者だけが同意した領土分割を提示したのです。

## ●東アジア海域の秩序崩壊

## 東

アジア海域の航海活動は、黄海を渡る中朝航路、対馬海峡を挟んだ日朝航路、中国沿岸部と琉球と、古くから一定の頻度で行き来がありました。その航海活動を、侵略を伴う軍事行動にしたのはモンゴルが最初で、それへの報復が端緒とされる「倭寇」が現れました。

「倭寇」の活動は、一般的には以下のように区分されています。

- ・ **前期倭寇** 13世紀～14世紀（鎌倉時代末～室町時代前期）。主に対馬や九州北部、瀬戸内などから、朝鮮半島や中国沿岸部を襲った。足利義満（1358－1408）が明との間で勘合貿易を始めたことと、李朝朝鮮が対馬を攻撃した応永の外寇（1419年）で鎮静化した。
- ・ **後期倭寇** 主に16世紀（室町時代後半～安土・桃山時代）。中国、朝鮮、日本などの複合国際海賊団が、主に中国沿岸部を襲った。ポルトガル人やスペイン人が一部に含まれていた。明の海禁策に反

## 海と神

## ■海という霊界、女性という海

ヒトは長い間、海に霊的なものを感じながら生きて来ました。

ギリシャ神話のポセイドン（Poseidon）は、「海神」として海洋現象を司るとされています。ポセイドンの怒りに触れると海は荒れ、航海中の人々を海に飲み込んでしまいます。

日本の神話でも、混沌とした大海の中に島が現れ、「国」を作るための陸地ができたという説話があります。海は、陸地ができる以前から存在する、人為以前の世界を表す対象と認識されていました。

日本の神話のように、海は陸地ができる以前からあったとする説話は、世界各地にあるようです。海のかなたは「異界」であり、「死」と結びつき、「霊が住む」と考えるケースも多いと言われます。琉球列島では、海の向こうにある祖先の霊が眠る場所を「ニライ」と呼び、神女と共にその霊を祀り、海辺で祈願する儀式が、伝統的に行われていました。

また、ミクロネシアのヤップ島では、男が海の仕事に出る前に守るべきタブーがあり、そのタブーを守ると、海の女神・マダイが、男の漁を守ってくれるという言い伝えがあるそうです。

~~~~~

海からの来訪者については、イギリスの航海者クック（James Cook 1728-79）とハワイ島民の逸話が良く知られています。

偶然ハワイの正月祭りに島を訪れたクック一行は、島民から歓迎されます。実りをもたらす「ロノ神」の来訪とみなされました。祭りが終わり、一行は出航しますが、船が破損したため島に引き返します。すると、島民がボートを盗み、乗組員が島民を殺害したこともあって、クックは殺されてしまいます。海からの来訪者は島民にとって、「神」と同時に「悪魔」なのです。

歴史研究

「近代」というシナプス



発する勢力が、「倭人」を偽装して略奪行為をしたとされる。なお、豊臣秀吉の朝鮮出兵も「倭寇」とされている。

この論考が対象としているのは、「後期倭寇」の時代です。東アジア人とヨーロッパ人が、海洋航路を通じて接触し、関係を築いた時代と言えます。

◆16 世紀前半の東アジア

当時の東アジアは、中国の明(1368-1644)が最盛期を過ぎ、いわゆる「北虜南倭」に苦しむ時代を迎えていました。日本では、室町幕府(1338-1573)が弱体化し、大名領国化の時代に入っていました。このため、幕府公認の勘合貿易は形骸化し、西国勢力を中心に非公認(私)交易が幅を利かせていました。朝鮮半島では、高麗(918-1392)を滅ぼした李朝朝鮮(1392-1910)が、建国から100年余りを迎えていました。臣官政治が際立つ時

代に入り、姻戚に絡む派閥抗争が、頻出しました。琉球国(1429-1879)では、王位を尚真王(1465-1527)が継いで、国威の最盛期を迎えていました。

こうした中、朝鮮半島南部で、一つの騒動が、起こりました。入植する「倭人」の居留地と定めていた三浦(さんぽ 釜山浦・齊浦・塩浦)で、李朝官吏を「倭人」が襲撃したのです(1510年)。三浦の乱と

呼ばれています。ここで言う「倭人」とは、主に対馬からの移流民で、「倭館」と呼ばれた建物周辺に定住しながら、「興利倭船」なる商船で交易をしました。この治外法権状態の移流民の増加が、李朝官吏との対立を生みました。対馬の宗氏が「倭人」を支援しましたが、李朝側が鎮圧しました。その後、李朝は、交易の扉を一時的に閉ざしました。

この事件を「後期倭寇」の起点とする説が、今日的には、有力な学説の一つになっています。

◆嘉靖の大倭寇

「後期倭寇」が活発だった時期は、1520年代から60年代と考えられています。明の嘉靖帝時代(1522-66)に当たるため、中国史上で「嘉靖大倭寇」と呼ばれています。特に1548年以降の10年間、その活動は激烈を極めました。

歴史研究

「近代」というシナプス

中国の長い歴史の中で、海洋から船団を組んだ侵入者が、大量に押し寄せるといふ事象は、経験のない領域だったと言えます。歴代王朝の滅亡は、主に反乱か内乱、または北からの侵攻で起こりました。北からの侵攻は古くからあり、明代には、前朝のモンゴル勢力などが脅威でした。明は、その防衛のため、南京から北京に都を移しました（1421年）。

一方、明の海上防衛策は、海禁でした。明当局公認（勘合）以外の船舶の入港を禁じ、いわゆる私交易を締め出すことで、「無法者」の来航阻止を図りました。李朝朝鮮も、それに倣って海禁傾向を強めました。「後期倭寇」が活発化した背景には、反明感情に加えて、海禁策への反発があったとされています。なお、日本は、中央権力が脆弱で、出入航規制が野放しだったことは否めません。

中国側史料によると、嘉靖帝時代の「倭寇」による被害地域は、六省（山東、江蘇、浙江、福建、安徽、広東）に及んだとしています。40年余りの来寇数は、総計で2万人強。10箇所以上の城郭が破壊され、子女や財貨の掠奪が数百万、軍や官吏を含む死者数は、十数万人を下回らなかったとしています。

日本側の構成員は、「亡命（南朝遺民など）」「穢寒困苦者（飢饉による生活困窮者）」のほか、「商率爲奸利（私利目的の商人）」や「無頼」を挙げています。「薩摩肥後長門三州人」が多く、次いで「大隅筑後博多日内（日向）豊前豊後和泉諸島」と九州全域に及びます。また、村上水軍の拠点だった「伊豫能島來島因島」が記されています。しかし、これらの地域から出帆の実態は、現状では不明確です。

一方、「後期倭寇」構成員の大半を占めたとされる華人は、現在の浙江省と福建省の出身者（江南人、漳州人、寧波人、掲陽人など）が多かったとしています。呉語・閩語（びんご）と区分される言語圏の人々です。特に浙江省は中国最大の人口過密地で、反明感情が

倭寇をめぐる「国籍」

■彼らは何人なのか？

「倭寇」と呼ばれた行為に携わった人々の記録は、ほぼ朝鮮側と中国側の史料に依存しています。日本側の史料は極めて少ないのが実情です。

「倭」という呼称は、中国から見た日本列島周辺域、またはその居住民を指す蔑称として、古くから使われていました。「東海上の異界（人）」を意味するのでしょうか。

「後期倭寇」を担った構成員は、中国人が大半を占め、日本人や朝鮮人、ポルトガル人などが混在していたと表記するのが、今日的な慣行です。しかし、そこには、かなりの誤差が含まれると考えます。

「倭寇」の行為には、人身売買や拉致・連行が含まれています。また、「恒居倭／降倭／投化倭（在朝倭人）」「客幫（きやくばん・在華異人）」「唐人／唐房（在日華人／韓人）」「閩人三十六姓（在琉球華人）」「華僑」のような移住者がいたほか、海難漂着者（本国送還か滞留）がいました。その結果、相互の一角にコロニー（Colony）が生まれ、混血を生じました。

今日のような「国籍」の制度が、互いの国で不十分な中、人々の「国」への帰属意識が、どの程度まで自覚的だったかは、不透明です。また、移住地や連行地から反攻や侵攻に加担した／させられた人々を、国別に識別するのは極めて困難です。その識別が逆に、実態からの遊離を招く可能性があるのです。混血者は、ことさら区別が難しいでしょう。「東シナ海人」とでも表記するしかない、不確定要素が多い人々の属性は、国籍で括れないのです。

福建以南の中国沿岸部では、「蛋民（たくみん）」（または蛋家）なる水上生活者が、宋代から知られていました。彼らの出自や被害、当時の「華僑」との関連性、被害者の動向動態など、大陸と日本を含む島々との海を介した「倭」の移動の歴史は、余りにも未解明な部分が多いのです。

歷史研究

「近代」というシナプス

強かったとされ、汚職官吏や無統制軍人、私的騒乱勢力などが加わったとされています。東シナ海に面した中国沿岸は、住民の相互加被害を含めて、渡海流民のるつぼと化し、治安の悪化が著しい状態に陥って行きました。

●ポルトガル人と東アジア人

ポルトガルの航路開拓は、16世紀に入ると、急ピッチで東進を続けました。ヴァスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama 1469-1524）が、喜望峯回りで南インドのカリカット（Kozhikode）に到達（1489年）して以降、北隣のゴア（Goa）に拠点を建設（1510年）、翌11年にマレー半島のマラッカ（Malacca）を占領しました。さらに東進は続き、マルク（モルッカ）諸島のアンボン（Kota Ambon）に至りました。1515年には、火器（大砲、鉄砲）製造のための工廠をゴアに開設しました。

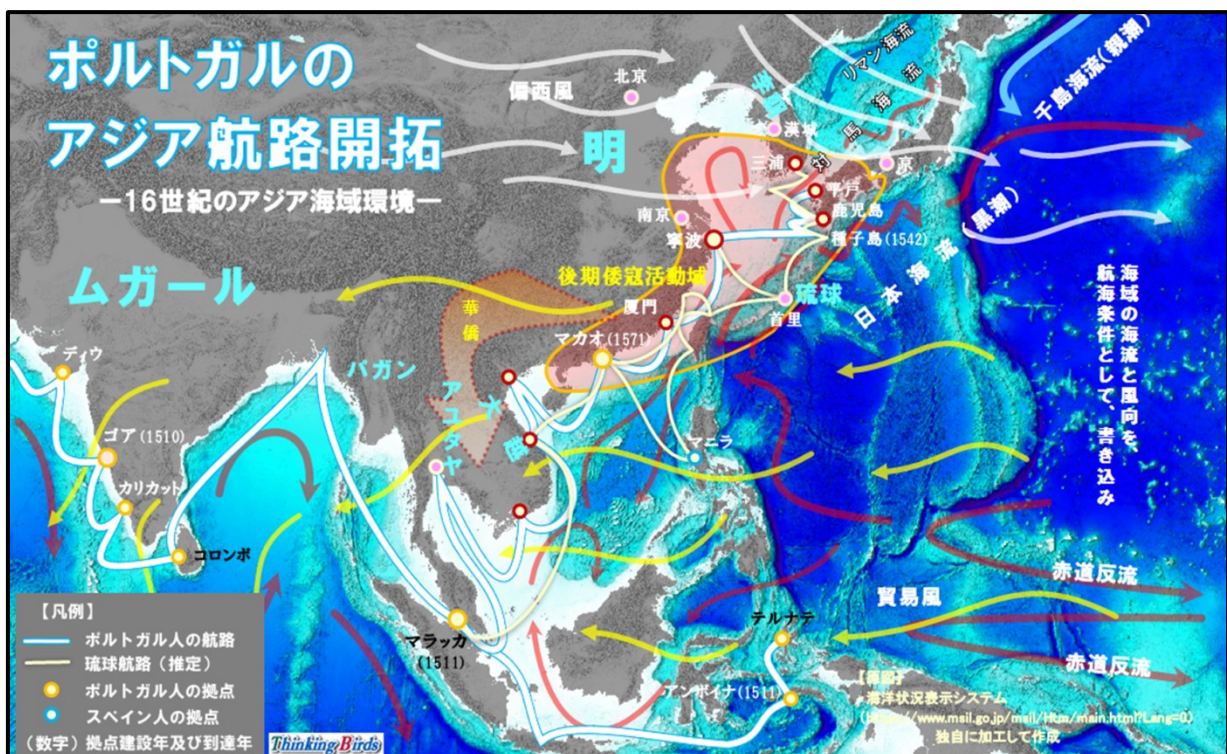
ポルトガルは、インド航路の開拓で「香辛料」を直接入手できるようになりました。ここで言う「香辛料」とは、主に薬効性調味料のことです。ペスト魔に襲われたヨーロッパ

では、以前にも増して、その需要が高まっていた。主な入手品は、胡椒、クローブ（丁子）、シナモン、ナツメグなどで、北海交易拠点のアントウェルペン（Antwerpen）やロンドン（London）に転売されました。

残された航路開拓は、マラッカ以北の東アジア海域でした。

◆マラッカから広東へ

近隣で金が産出するマラッカは、多様な国の船が寄港し、交易が盛んな土地でした。西からアラブ人やインド人、東からジャワ人、華人（中国人）、琉球人など、多くの出航先の人々が入り出していました。1512年にポルトガル商館に赴任したトメ・ピレス (Tomé Pires 1465－1524?) が記した『東方諸国記 (Suma Oriental que Trata do Maabar Roxo ate os Chinas)』によると、華人の伝聞として、「レケオス (Lequeos 琉球)」の先に「ジャンボン (Jampom 日本)」があるとしています。琉球から船で7～8日かかり、中国との取引はまれで、ジャンク船（中国式帆船）を持たず、人々は余り海洋には出ないとしています。相対比較とはいえ、華人や琉球人に



※注)「香辛料」と「香料」 ポルトガルのインド交易は、「香料貿易」とも呼ばれます。「香料(flavors)」は、「香りの良い嗜好品(芳香剤)」をイメージさせる用語で、実態への誤解を生む可能性があります。ここでは、胡椒(pepper)に代表される「香辛料(spices)」とします。

歴史研究

「近代」というシナプス

比べ、遠海に渡航できる能力はなく、海洋性に乏しいと認識されていたようです。

マラッカに渡航する華人は、主に明政府非公認の海洋集団でした。後に在地化して「華僑」になる先駆けとされ、広東方面と往来していたと考えられています。琉球王が公式に派遣した交易団より、身なりが劣っていたというのですから、下層の人々と考えられます。ポルトガル人は、その華人集団の先導で、広東に渡航したと思われます。

ポルトガル人の最初の中国渡航者は、ジョルジュ・アルヴァレス（Jorge Álvares ? -

1521）でした。アルヴァレスは、1513年にジャンク船で広東に向かい、香港沖と比定されるタマン（Tamão）なる場所に、交易拠点を築きました。続いて1516年に、ラファエル・ペレストレリョ（Rafael Perestrelo 生没年不詳）が広東に渡航し、明に交易を求めたとされています。

ポルトガル国王マヌエル1世（Manuel I 1469-1521）の公式使節として、フェルナン・ペレス・デ・アンドラーデ（Fernão Pires de Andrade 生没年不詳）が、トメ・ピレスらの随行で中国入りしたのは、1517年です。

■東アジア海域の国際関係（1510年代～20年代）

西暦	中国元号	主な出来事
1510	正徳 5	(印) ポルトガルがゴア占領 (朝) 朝鮮半島南部で三浦の乱（倭人居留地で反乱）
1511	正徳 6	(マ) ポルトガルがマラッカ占領
1512	正徳 7	(朝) 壬申約条（李朝朝鮮と対馬宗氏との通交規則） (日) 来明商人と遣明僧が日本刀の交易交渉
1513	正徳 8	ジョルジュ・アルヴァレスが広東航行
1514	正徳 9	ポルトガル人が広東のタマンに入植地を建設
1515	正徳 10	(印) ポルトガルがゴアに火器（大砲＝フランキ砲、鉄砲）製造の工場開設
1516	正徳 11	ラファエル・ペレストレリョが広東巡航 (日) 琉球船が薩摩に来航
1517	正徳 12	ポルトガル遣明使節団が広東に到着 朱宸濠（寧王）がフランキ砲を私造（火器技術の移転）
1518	正徳 13	明がポルトガル製フランキ砲を購入か (日) 島津忠隆が琉球の尚真王に書状
1519	正徳 14	寧王の乱（朱宸濠が南昌で挙兵、王陽明が平定） フェルナン・ペレス・デ・シモンが中国渡航（-20） シモンがタマンに要害を建設し明と対立
1520	正徳 15	ポルトガル使節団が南京で正徳帝に会う
1521	正徳 16	ポルトガル使節団が北京駐留 正徳帝が死去、嘉靖帝が即位（ポルトガル使節団は北京退去） 明がポルトガル人居留地のタマンを排除 (琉) 琉球の尚真王が種子島氏との交易を承認 (呂) マゼラン一行がフィリピン諸島に寄港（マゼラン死）
1522	嘉靖 1	明が来留ポルトガル人を処罰
1523	嘉靖 2	寧波の乱（遣明をめぐり、大内氏と細川氏が明官吏を巻き込んで衝突） 日明交易が途絶
1524	嘉靖 3	トメ・ピレスが中国で獄死（1540年説あり）
1525	嘉靖 4	
1526	嘉靖 5	鄧獠が「番夷」を六横島に招聘し、双嶼に私的交易場を建設 (日) 博多商人の神谷寿禎が石見大森銀山を採掘開始 (印) ムガル帝国建国
1527	嘉靖 6	王陽明が広西の反乱を平定
1528	嘉靖 7	
1529	嘉靖 8	(日) 明使が大内義隆に領民による略奪の取り締まりを要請 (欧) オスマン・トルコがウィーン包囲 (欧) サラゴザ条約（太平洋海域のポルトガル・スペインの領有権定める）

歴史研究

「近代」というシナプス

アンドラーデ一行は、明皇帝（正徳帝）に謁見するため、1521 年までに北京へ赴きました。しかし、皇帝の死去に伴い、公式交渉はできなかったとされています。

なお、中国側史料でアンデレーデまたはその一行は、「佛郎機（フランキ）」と表記されました。「フランキ」は、イスラム圏の西ヨーロッパ人への呼称で、その援用が「大砲（フランキ砲）」と混用されました。

◆日本との接触

ポルトガルの航路開拓は、現地人との軋轢を生みました。初期のアフリカ南部航路では、数の上で不利なこともあり、威圧的になることは少なかったとされています。人身売買と言っても、「奴隷」をヒトとして扱うケースが多く、養育人的存在だった模様です。本格的な戦闘に至ったのは、インドのカリカット攻略（1500 年）やマレー半島のマラッカ攻略（1511 年）など、主にアジアでした。それも、面の占領というより点の占拠で、後のスペインに比べると、穏やかだったと言えます。ゴアで生産された火器（大砲、鉄砲）の大半は、交易商品になりました。

「後期倭寇」の活動が活発になった嘉靖年間（1522-66）に、ポルトガル人と思われる「夷人」が混在していたことは、すでに書きました。しかし、ポルトガル人が主導したとは考えにくく、隷属的または成り行き上の加担、と考えるのが妥当です。

日本の大内氏と細川氏が、遣明をめぐって寧波（ニンポー）で対立し、騒動を起こした寧波の乱（1523 年）の頃、現地ではポルトガル人が認知されていた模様です。種子島に鉄砲が伝来したとされる 1542 年より、約 20 年前です。この 20 年間、ポルトガル人に明との公式交易権は、ありませんでした。それは、マカオ租借を許された 1557 年まで続きました。この間が、「倭寇」に「夷人」が混在していたとされる期間です。

ポルトガル人と華人との接触は、この間も続きます。マゼラン（Fernaο de Magalhaes 1480?-1521）一行が、1521 年に西回りでフィリピンを航行して以降は、スペイン人との接触が加わりました。華人を介して、日本を含む多様な地域の人々が、1520 年代からヨーロッパ人と接触を持った可能性は、かなり高いのです。

◆六横島・双嶼

明代の開港地の一つだった寧波は、勘合貿易の中心地でした。杭州湾の突端部にあり、その沖合には、大小 1300 余りの島々からなる舟山（ヂョウシャン）群島があります。その群島の最南部にあるのが、六横（リウオン）島です。福建出身の鄧獠（とうりょう 生没年不詳）なる脱獄囚が、島西部の「雙嶼（双嶼 リャンポー）」港で、私的な市を開いたのが、「浙海私商（私交易）」の始まりとされています。1526 年のことです。

中国側の史料によると、鄧獠が双嶼で私市を開くに際し、「誘引番夷」したとしています。「番（蛮？）夷（ポルトガル人か）」を誘い込んで、私的交易場を開いたというのです。

アンドラーデ一行が、嘉靖帝との謁見不調に終わった要因の一つに、数々の「悪行」通報があったことが挙げられます。ポルトガル側史料でさえ不評のシモン・デ・アンドラーデ（Simão de Andrade 生没年不詳）は、最も嫌悪された一人です。使節長アンデレーデの弟とされるシモンは、1519 年に広東に渡り、翌 20 年まで滞在しました。その間、香港沖のタマンに要害を築いて明当局と対立、華人子女を拉致して奴隷売買し、食することもあったとする噂が広がりました。立証できないとはいえ、妻子同伴の航海が禁じられた時代に、現地女性への暴行を印象づけた人物です。シモンは、厦門（アモイ）や寧波にも赴いたとされ、後年、その配下が現地人への蛮行に及んだとされています。

歴史研究

「近代」というシナプス

明当局は、ポルトガル使節団を北京から退去させた後、その大半を処刑、1521年にはタマン入植民を追い払いました。にもかかわらず、ポルトガル人は、主にマカオに未公認居留（植民）地を築いて行きました。鄧獠が双嶼に招き入れたとされる「番夷」は、これらの人々だった可能性が高いと言えます。

後に双嶼には、ポルトガル人居留区が生まれ、教会が建設されて、黒人奴隷もいた模様です。もちろん明当局未公認の居留です。双嶼は、東アジア海域の私的交易拠点として、約20年間の繁栄を誇るのです。その拠点に明政府が朱紳（しゅがん 1492-1549）を派遣して、壊滅戦を展開したのが1548年（嘉靖27年／以下適宜に中国元号「嘉靖」を補記）です。双嶼が再建されることはなく、この年以降、中国沿岸部での「後期倭寇」は、激烈を極めて行くことになりました。

◆王直という男

中国で「大悪党」と酷評され、日本では「五峰先生」と敬われる一人の中国商人がいます。名を王直（?-1557）と言ひ、「後期倭寇」の立役者の一人とされています。歴史学者だけでなく、いわゆる「海賊物語」愛好家からも熱い視線が注がれる人物です。彼の首謀者としての活動期は、1540年代から57年と推定され、これまでお話しした1520年代からは、一世代後になります。

その生涯を概略すると、以下の通りです。

王直は徽州（現・安徽省）に生まれ、若い頃は塩を商っていました。しかし、商売に失敗し、海洋交易に手を染めるようになりました。その過程で、鄧獠の配下だった許棟（きょとう ?-1548）と知り合い、その下で活動するようになりました。1530年代には、六横島の双嶼に拠点を置いたと考えられます。

王直は、1540年頃に日本に渡航し、福江の宇久盛定（生没年不詳）と関係を持ちました。42年（嘉靖21年）には、平戸の松浦隆信（1529-1599）に厚遇され、唐風屋敷を建てました。配下が2,000人いて、船団を指揮したとされています。このほか、五島列島（福江）と薩摩にも、拠点があったと考えられています。

双嶼では、鄧獠に代わって許棟が頭領になり、王直の地位は向上しました。王直は、九州—双嶼—中国沿岸部と、海洋ルートを行き来し、非公認交易をしていたと考えられています。ある時は明当局に協力し、無頼を引き渡すなど、官憲的



歴史研究

「近代」というシナプス

(明官吏との癒着か) 役割も担ったようです。

しかし、そうした行動が災いし、双嶼一党は逆訴迫され、浙江で騒動が起きました。それを「巡撫」するため、明政府は朱紘を派遣、双嶼を攻撃し、壊滅させました(嘉靖 27 年)。許棟は捕えられました。

王直は、許棟の残党を含む双嶼勢力の頭目になりました。浙閩人は、朱紘の行為を弾劾し、投獄して服毒死させます。王直一党や徐海(?-1556) 一党は 1549 年(嘉靖 28 年)、共に大挙して浙江を襲撃しました。これ以降の「倭寇」は連年連月にわたり、明軍と攻防します。『明史』の 1553 年(嘉靖 32 年) 項には「海賊汪直」の名が記されています。1555 年(嘉靖 34 年) の「倭寇」は、南京で 4,000 人を虐殺、同年の朝鮮半島での乙卯倭変も、王直が首謀したとされています。

王直は、日本に滞留中は温厚な人物として暮らした模様です。しかし、1557 年(嘉靖 36 年) に浙江巡按史・胡宗憲(?-1565) の計略とされる妻子の手紙で帰還、捕えられ、後に処刑されました。

◆日本への鉄砲伝来と王直

王直が、日本史上で研究対象とされる要因の一つに、鉄砲伝来との関わりがあります。

日本への鉄砲の伝来は、「1543 年(天文 12 年) に、ポルトガル船が種子島に漂着し、鉄砲を伝えた(傍点は筆者)」とするのが通説です。南浦文之が著した『鉄砲記』を根拠にしています。百余人が乗船した船が島に現れ、その中に「牟良叔舎」「喜利志多佗孟太」という異邦の「賈買ノ長」がいて、鉄砲を伝えたとしています。その仲立ちをしたのが、島民と漢字で筆談ができる「五峯」と名乗る明人だった、と記されています。

ここで言う鉄砲を含む「火砲」については、技術分野の近代史として後述しますが、鉄砲伝来の通説には、傍点部分やこれ以前の伝來說などで、さまざまな説が唱えられています。

ヨーロッパ側の史料による一般的記述は、概略すると次のようになります。「1542 年、シャムにいたポルトガル人のアントニオ・ダ・モタ (Antonio da mota)、フランシスコ・ゼイモト (Francisco zeimoto)、アントニオ・ペイショト (Antonio pexoto) の 3 人は、脱走し、ジャンク船で中国に向けて出航した。しかし、嵐に見舞われて船は漂流、2 週間後に小さな島に漂着した。これが、ヨーロッパ人の初めての日本上陸になった」。この島が、種子島と同定されるのです。

ここでは、種子島へのヨーロッパ人の渡航年を、ヨーロッパ側の記述に沿い 1542 年(嘉靖 21 年) とします。しかし、『鉄砲記』に「小浦ニ一大船」とあり、「漂流／漂着」の記述がないことから、「渡航／来航」とします。また、ポルトガル人の同定は、「牟良叔舎＝ゼイモト」「佗孟太＝ダ・モタ」への反証ができないため、これに従います。それら以上に重要なのが、「五峯」なる人物です。

『鉄砲記』によると、「大明儒生一人アリ名ヲ五峯ト云フ」とあり、相応の識者として記されています。異邦の二人と会話ができたようです。宗主の種子島時堯(ときたか 1528-79) は、鉄砲の「賈買」をする二人と、「五峯」を介して商談をします。この「五峯」を、王直と同一人物とみなす説が、近年は有力視されるのです。王直が五島列島に来てから 2 年、平戸を拠点とした年です。

双嶼建設(1526 年) から 10 年以上が経過し、ポルトガル人と会話ができる華人が、一定の割合で育っていた可能性は、かなり高いと言えます。仮に「五峯」と王直が同一人物ではなかったとしても、相互に意思伝達ができる言語能力を備えた華人が、1540 年代にはいたと推測できます。

近年の研究では、この渡航は、意図的なものとする説があります。当時の海洋航海は、海難事故率が高く、漂流漂着はあり得ます。

歴史研究

「近代」というシナプス

しかし、王直の意図的な勢力拡大策の一環という解釈は可能です。「フランキ（大砲）」ではなく「鉄砲（火縄銃）」なのは、顧客の財力から見て相応です。少なくとも府内（大分）では、「フランキ（国崩し）」でした。

ポルトガル人にとって、東アジア人との海を介した接触は、「プレスター・ジョン」の実態の「発見」でした。一方、東アジア人に

としては、異文化との遭遇による、東アジア的新時代の幕開けになりました。そして、その活動を推進したのは、「国家」ではなく、「国家外」の人々でした。

◆謎に満ちた「後期倭寇」の時代

「後期倭寇」の実態と本質は、余りにも未解明の要素が多く、断定的なことは何も言えないのが実情なのでしょう。

■東アジア海域の国際関係（1540年代～50年代）

西暦	中国元号	主な出来事
1540	嘉靖 19	嘉靖帝の政治離れが顕著に (日) 王直が五島列島の福江島に來航
1541	嘉靖 20	莫登庸（ヴェトナム）が明に降伏（明の南蛮防衛戦） (日) ポルトガル船が豊後に漂着？
1542	嘉靖 21	壬寅宮変（宮女による嘉靖帝暗殺未遂事件） (日) 王直が平戸の松浦氏の厚遇を受け、拠点とする (日) ポルトガル人が種子島に來て鉄砲を伝える（1543年説あり） (朝) 李朝朝鮮に日本産銀が大量に渡る
1543	嘉靖 22	
1544	嘉靖 23	(朝) 蛇梁の変（蛇梁鎮で倭寇事件）対馬通交の断絶
1545	嘉靖 24	(朝) 乙巳士禍（宮廷内の派閥抗争）
1546	嘉靖 25	モンゴル軍が宣府（北京の北西部）などを攻撃（北慮）
1547	嘉靖 26	浙江巡撫に朱紘を任命 (朝) 朝鮮と対馬宗氏が丁未約条（通交再開） (日) 大内氏が最後の遣明船を派遣 (マ) フランシスコ・ザビエルがマラッカでアンジロー（薩摩人）と会う
1548	嘉靖 27	明軍（朱紘）が六横島・双嶼を攻撃し、破壊
1549	嘉靖 28	王直、徐海らが挙兵して浙江攻撃（以後、連年の倭寇が続く） 朱紘が浙閩人に弾劾され、入獄中に服毒自殺（50年か） (日) フランシスコ・ザビエルが鹿児島に來航（-1551）
1550	嘉靖 29	庚戌の変（モンゴル軍が北京を包囲・北虜） (日) ザビエルがポルトガル商船と共に平戸へ
1551	嘉靖 30	浙江の巡按使が海禁の緩和を上申（一端緩和されるが秩序が乱れる） (日) 大内義隆が陶隆房の挙兵で自害 (日) ポルトガル商船が豊後に來航、大友宗麟がゴア総督に書簡
1552	嘉靖 31	温州への大倭寇（船千隻、万人規模で7日間掠奪） (日) イエズス会バルタザール・ガーゴが豊後府内に來航（-1561）
1553	嘉靖 32	江蘇、浙江などに連月の倭寇（王忬が普陀山で倭寇を破る）
1554	嘉靖 33	江蘇、浙江などに連月の倭寇（普陀山で明軍敗北、官吏など死者多数）
1555	嘉靖 34	連月の倭寇、夏季には南京掠奪（双方に死者多数） (日) 日本初のキリスト教教会・大道寺が山口にできる (朝) 乙卯倭変（全羅道・達梁浦などを70隻余で侵攻）
1556	嘉靖 35	胡宋憲が徐海が率いる倭寇を撃破 (日) 明使の鄭舜功が豊後に來て倭寇鎮圧を幕府に要請 (日) イエズス会ガスパル・ヴィレラが豊後府内に來航（-1571）
1557	嘉靖 36	明がポルトガル人のマカオ居住を許可 連月の倭寇続く、胡宋憲が計誘で王直を捕える（59年に処刑） (日) ルイス・デ・アルメイダが豊後府内に病院開設 (琉) 尚元王が、邦民が拘束した華人を解放し明へ送還
1558	嘉靖 37	連月の倭寇がやや沈静化（明軍が攻勢を強める） (日) 松浦隆信がガスパル・ヴィレラに平戸退去を命じる
1559	嘉靖 38	明軍が各地で倭寇を退ける (日) ガスパル・ヴィレラが京都で布教を始める

歴史研究

「近代」というシナプス

中国史的に見れば、反明感情が強かった浙江・福建などの呉語・閩語圏は、中国で最も人口過密域だったこともあり、階層分化が著しく、いわゆる下層民が私交易に手を染めて、官吏や軍属を巻き込み、海禁を犯して私利に走る傾向を強めたと言えるかもしれません。しかし、明軍が駐屯する城郭域への襲撃は、ある意味で政治的です。無防備な閑漁村への単純な略奪と混同できず、私利私欲と政治的抗争を一律に論じられないと考えます。

また、日本史的に見れば、室町幕府の統制力が弱く、九州を中心とした地域では、ほとんど自由に渡海活動が可能で、朝鮮半島や中国沿岸への「倭寇」を通じて、食糧や財貨の略奪に走ったと言えるかもしれません。しかし、対馬海峡ならともかく、『倭寇図巻』が描く小型手漕ぎ木造船で、東シナ海を海流に逆航して、船団渡海できたとは思えません。

「倭」の実態は恐らく、大半が国籍不明の滞留「墮民」、その中に新渡海民や異人が混在していたと見るのが妥当です。フランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier 1506? -1552）が、1547年（嘉靖26年）にマラッカで出会ったとされるアンジロー（ヤジロー）なる薩摩人は、「倭寇」として渡海し、双嶼あたりに滞留、ポルトガル人と接触後、マラッカまで連行か逃亡という推測はできます。とはいえ、「倭」と「倭寇」の関わりは、未解明部分が余りに多すぎるのです。

さらに、朝鮮史的に見れば、「倭寇」の侵攻は国難の一つで、撃退すべき対象でした。李朝は、武力と海禁でそれに対応し、一定の成果を収めました。しかし、壬辰倭乱（文録・慶長の役）以前の李朝は、倭船の入港を全面的に禁じる政策を継続させず、約条を定めて条件付きの交易を許可しました。李朝朝鮮が、何を必要として交易を再開したのかは、項を改めて検証しますが、モノと人の相互の利害関係は、簡単には断てなかったと考えます。

このような東アジア情勢の中、ポルトガル人の参画の実態は、やはり不透明です。明当局が1557年（嘉靖36年）に、ポルトガル人のマカオへの居住を認めるまで、その活動を公式に承認している政府機関は、東アジアにはありません。特に1530年代～40年代のポルトガル人の活動は、「倭寇」に参画したとされるものの、その実態は闇の中です。しかし、マカオや双嶼の未公認居留地には、買入れ倭人がいたと推測できます（後のマカオには倭人居住区あり）。その状況下で、日本に鉄砲が伝来しました。そして、双嶼攻撃への反攻として、鹿児島に居住していた徐海が報復に出向く政情不安の中、1549年（嘉靖28年）にザビエルは鹿児島に来航したのです。

◆海洋移民をどう捉えるのか

「後期倭寇」の時代を言い表すことばがあるとすれば、人々が海洋を通じて、流動性を高めた時代と言えます。東アジア版「大航海時代」です。しかし、それは、ヨーロッパのような国王主導ではなく、密売利得商人や政治的敗者、災禍を逃れた難民、貧困からの脱出を目論む窮民を含む、国家統治から脱落または疎外された人々が主導した航海でした。

それらの渡海民は、略奪行為に走る一方で、既存国家が未承認の植民活動を進めました。その相互植民（Immigration／Emigration）は、レコンキスタ時のイベリア半島と北アフリカの相互モザイク模様に相似しています。例えば王直は、日本銀の入手と引換えに、豊臣秀吉に先行して、白磁など陶磁器の製作技術を持つ人々を、天草や唐津などに渡らせ、焼物産地の素地を作った可能性があります。だからこそ、「五峰先生」になるのです。しかし、それは明側から見れば、反明集団を束ねる者の顔で、「倭寇」の温床を育てる行為と映って不思議はありません。

王直は、ある意味で「亡命者」です。裏返せば、明の国禁を犯し続けた「反逆者」です。

歴史研究

「近代」というシナプス

後の孫文(1866 - 1925)は、清(1616 - 1912)を滅ぼす立役者となったことで、「革命家」と評価されますが、「反海禁」を唱えた王直は、政治的に敗北しました。日本の領国大名は、たびたび「倭寇」の取締り要請を、明から受けました。その要請が、「倭寇」の実態が「倭」にあるとしての要請なのか、亡命首謀者の取締り要請なのかは分かりません。ここでは、当時の国際情勢の中での王直の評価を、海洋交易商人とするにとどめます。

◆異文化接触と「国家」

ポルトガル人のアジア航路開拓の旅は、中国を経て日本に至ったことで、とりあえず完結します。その旅は、金銀財宝や幻のキリスト教国探検という側面があるにせよ、「香辛料貿易(Spice trade)」と言われるように、「香辛料＝薬剤」の入手が主要な目的になりました。ペストの災厄に見舞われたヨーロッパでは、必然的にその需要が高まりました。

1570年代にロンドンがポルトガルから輸入した商品リストによると、「胡椒(pepper)」の輸入量が、数量、金額共に、最も多くなっています。肉食材の抗菌と防腐のための粒剤です。次に多い「丁子(clove)」は、生薬でもあり、芳香がペスト予防に有効と考えたとされています。また「砂糖(sugar)」の輸入量が多く、希少品だったことが伺えます。この段階ではまだ、中国産「緑茶(green tea)」はリストに載っていませんが、それもまた、病魔への薬効を期待された産品と言えます。これらの「香辛料」を、単なる嗜好品として求めた印象を与える歴史記述は、改めることが望ましいと考えます。

その背景を背負い、戦国時代の日本にたどり着いたポルトガル人は、鉄砲とキリスト教をもたらしました。当時の日本が、「香辛料(茶葉など)」の生産供給体制を整えていたかは疑問ですが、ザビエルの来航以降、ポルトガル商船と宣教師が、矢継ぎ早に渡来しま

した。領国レベルの地方分権社会だった日本は、その異文化との出会いによって、それを受容した地域が生まれ、通商の在り方が変わり、武装の在り方が変わりました。そして、その領国レベルの変化(近代)によって、「天下統一」の体裁を整える時代を迎えるのです。

16世紀の東アジアの海洋航海時代は、日中朝のそれぞれの「国家(Union)」に捉われない人々が牽引しました。「国家」統制を強めようとした結果にせよ、「国家」統制が脆弱なためだったにせよ、「国家」に帰属しない人々の活躍は、「国家」の在り方を問うたと言えます。

① 出入国管理の在り方

⇒鎖国と開国の海洋政策の是非

② 海洋性経済の在り方

⇒自由貿易と密輸出入の統制

③ 海洋防衛の在り方

⇒来寇防衛と武力行使の在り方

④ 異文化交流の表裏

⇒進歩と対立

なお、ここで述べた「後期倭寇」と日本史との関りは、日本史上では西国的位相の歴史(Japanese east asia's history)です。東海地方以東の東国的位相の歴史(Japanese west asia's history)は、これとは異なる展開を見せたことを追記しておきます。

また、ここで取り上げなかった1530年代の東アジア海域は、前後の時代に比べて「倭寇」の活動が少ない時代でした。ポルトガル人の活動が表面化した事例も、わずかです。しかし、明当局は、その活動を公認しておらず、平穏な時代というより、暗躍が進行した時代と推測しています。その一つが、博多商人による日本産銀の流出の始まりです。これについては、スペインの中南米産銀の増産を契機とした「価格革命(Price revolution)」の項で、検証します。また、硫黄交易については、「火薬の歴史」の項で取り上げます。

歴史研究

「近代」というシナプス

【出典及び参考文献】

- ・歴史学研究会編『世界史年表 第2版』(2001年12月、岩波書店)
- ・日比野健夫編『世界史年表 増補新版』(1984年10月、河出書房新社)
- ・日本歴史大辞典編集委員会編『日本史年表 増補新版第1刷』(1984年10月、河出書房新社)
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』(1972年、山川出版社)
- ・村川堅太郎ほか著『世界史地図』(1983年3月、第23刷、山川出版社)
- ・野村正七ほか編著『世界地図帳』(1985年1月、第7刷、昭文社)
- ・新村出編『広辞苑 第二版補訂版』(1982年10月、岩波書店)
- ・桑名一博編『西和中辞典』(1987年2月、小学館)
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』(1989年、旺文社)
- ・国松孝二編『独和大辞典』(1990年1月、小学館)
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』(1977年、研究社)
- ・ジョーゼフT・シンプリー著、梅田修ほか訳『シンプリー英語語源辞典 2刷』(2011年3月、大修館書店)
- ・水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』(2009年3月、研究社)
- ・フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 日常性の構造2「第6章 技術革命と技術の遅れ 三大技術革新」』(1986年3月、第2刷、みすず書房)
- ・ボイス・ペンローズ著、荒尾克己訳『大航海時代 旅と発見の二世紀』(1985年9月、筑摩書房)

◆海洋の教徒たちと東アジアの海賊たち

◎「ヒト」と「動物」

- ・ダーウィン著、八杉竜一訳『種の起源(上)』(岩波文庫、1985年10月、岩波書店)
- ・ピーター・J・ボウラー著、鈴木善次ほか訳『進化思想の歴史(上)(下)』(朝日選書、1987年8月、朝日新聞社)
- ・アドルフ・ボルトマン著、高木正孝訳『人間はどこまで動物か—新しい人間像のために—』(岩波新書、1982年9月、岩波書店)
- ・G. L. ステピンス／F. J. アヤラ著、八杉貞雄訳「ダーウィニズムの進化」(『サイエンス 第15巻第9号』、1985年9月、日本経済新聞社)
- ・クロード・レヴィ=ストロース著、大橋保夫訳『野生の思考』(1982年12月、みすず書房)
- ・池上俊一著「ヨーロッパ中世の動物園と動物裁判」(歴史学研究会編『歴史学研究 NO.595』、1989年6月、青木書店)

◎ポルトガルのアフリカ航路開拓

- ・ウィキペディア／ハンノ <https://commons.wikimedia.org/wiki/ハンノ>
- ・片山一道著『海のモンゴロイド ポリネシア人の祖先を求めて』(歴史文化ライブラリー139、2002年4月、吉川弘文堂)
- ・高崎通浩著『改訂版 世界の民族地図 8章 宗教と民族』(1998年3月、作品社)
- ・ウィキペディア／エンリケ航海王子 <https://commons.wikimedia.org/wiki/エンリケ航海王子>
- ・ギ・リシャール監修、藤野邦夫訳『移民の一万年史 人口移動・遙かなる民族の旅』(2002年7月、新評論)
- ・海老沢有道・大内三郎共著『日本キリスト教史(前編 日本カトリック教史 第一章 キリシタン宗門の伝来 II キリシタン伝来の外的前提)』(1990年6月、日本基督教団出版局)
- ・西山俊彦著「近代資本主義の成立と奴隷貿易 ② 教皇文書と新大陸での実態の吟味」(『福音と社会』211号、2003年12月、カトリック社会問題研究所)
- ・“The Bull Romanus Pontifex (Nicholas V), January 8, 1455” (Indigenous People-Global Issues) <http://www.nativeweb.org/pages/legal/indig-romanus-pontifex.html>
- ・倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫、1982年6月、岩波書店)
- ・外間守善著『沖縄の歴史と文化 第二章 沖縄の言語と文化』(中公新書、1997年4月、中央公論社)
- ・ウィキペディア／ジェームズ・クック <https://commons.wikimedia.org/wiki/ジェームズ・クック>

◎東アジア海域の秩序崩壊

- ・関周一著「明帝国と日本」(榎原雅治編『日本の時代 11 一揆の時代』、2003年4月、吉川弘文堂)

歴史研究

「近代」というシナプス

- ・浅尾直弘著「十六世紀後半の日本—統合された社会へ」(『岩波講座 日本通史 第11巻』、1993年12月、岩波書店)
- ・豊見山和行著「琉球・沖縄史の世界」(豊見山和行編『日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界』、2003年11月、吉川弘文堂)
- ・外間守善著『沖縄の歴史と文化 第一章 沖縄歴史のあゆみ』(中公新書、1997年4月、中央公論社)
- ・金達寿著『朝鮮—民族・歴史・文化』(岩波新書、1984年7月、岩波書店)
- ・斯波義信著「中国と華僑(華人)」(第2回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『アジア その多様な世界』、1988年7月、朝日出版社)
- ・何格恩著「明代倭寇侵擾沿海各地年表」(『嶺南學報 第二卷第四期』、1931年1月、嶺南大学ライブラリ) http://commons.ln.edu.hk/ljcs_1929
- ・呉征濤著「嘉靖年間の温州における倭寇」(『文化交渉 東アジア文化研究科院生論集 第4号』、2015年2月、関西大学学術リポジトリ) <http://hdl.handle.net/10112/9939>
- ・刘国华著「明“嘉靖大倭寇”成因探析」(『乐山师范学院学报 第19卷第7期』、2004年7月、浙江工商大学东亚研究院) <http://dyyjy.zjgsu.edu.cn/uploadfiles/2012-1-6/20121610574671578.pdf>
- ・張荷著、劉剛・草野美保訳「元、明時期の中国が遭遇した海禁と倭寇」(『吳越文化 第6章』、2005年6月、沖縄地域学リポジトリ) <http://hdl.handle.net/20.500.12001/5509>
- ・佐伯弘次著「14-15世紀東アジアの海域世界と日韓関係」(『第2期日韓歴史共同研究報告書(第2分科会篇)』、2010年3月、日韓歴史共同研究委員会編集発行、財団法人日韓文化交流基金)
- ・孫承喆著「14-15世紀東アジア海域世界と韓日関係—倭寇の構成要素を含む」(『第2期日韓歴史共同研究報告書(第2分科会篇)』、2010年3月、日韓歴史共同研究委員会編集発行、財団法人日韓文化交流基金)
- ・洪琬伸著「『日韓関係史』の辺境—朝鮮と琉球、『地図上』に描かれる関係史—」(『アジア太平洋討究 No. 20』、2013年2月、早稲田大学アジア太平洋研究センター、早稲田大学リポジトリ) <http://hdl.handle.net/2065/39129>
- ・中島幹起著「アジアの諸言語の類型」(第2回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『アジア その多様な世界』、1988年7月、朝日出版社)
- ・稲澤努著「消え去る差異、生み出される差異 —中国水上居民のエスニシティ」(2012年1月、東北大学機関リポジトリ) <http://hdl.handle.net/10097/54807>

◎ポルトガル人と東アジア人

- ・ルイス・デ・アルブケルケ著、山田義裕訳「発見史への導入 Introdução à História dos Descobrimentos」(2012年1月) <http://yamada-maritime.com/>
- ・山田義裕著「16世紀のポルトガルのインド交易とその船隊—奇書：“船隊備忘録”」(2002年4月、日本海事史学会例会資料) <http://yamada-maritime.com/>
- ・山田義裕著「ポルトガルのアジア進出における女性」(1995年4月)
- ・中島楽章著「マラッカの琉球人—ポルトガル史料にみる—」(2017年3月、『九州大学学術情報リポジトリ』) <https://doi.org/10.15017/1804161>
- ・中島愼二郎著「〈批評・紹介〉トメ・ピレス 東方諸國記(大航海時代叢書V)」(『東洋史研究』、1967年6月、京都大学学術情報リポジトリ) <https://doi.org/10.14989/139057>
- ・気象庁「海流に関する診断表、予報、データ」
https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/shindan/index_curr.html
- ・ウィキペディア「世界の海流図 (Ocean currents 1943.jpg)」(United States Army Service Forces) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ocean_currents_1943.jpg
- ・ウィキペディア「貿易風 (Map prevailing winds on earth.png)」
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Map_prevaling_winds_on_earth.png
- ・『文獻卷・明代部分 53. 日本一鑑 (鄭舜功著)』
<https://www.macaudata.com/macabook/book256/html/015101.htm>
- ・東京大学史料編纂所『倭寇図巻』
<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/conference-seminar/science/ez01.html>
- ・須田牧子著「『倭寇図巻』再考」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第22号』、2012年)
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0022.html>

歴史研究

「近代」というシナプス

- ・山崎岳著「巡撫朱紉の見た海—明代嘉靖年間の沿海衛所と「大倭寇」前夜の人々」(『東洋史研究 第62巻第1号』、2003年6月、京都大学学術情報リポジトリ)
<https://doi.org/10.14989/155512>
- ・鹿毛敏夫著「『抗倭図巻』『倭寇図巻』と大内義長・大友義鎮」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第23号』、2013年) <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0023.html>
- ・山崎岳著「「乍浦・沈荘の役」再考—中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』の虚実にせまる」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第24号』、2014年)
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0024.html>
- ・須田牧子著「『蔣洲咨文』について」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第23号』、2013年)
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0023.html>
- ・須田牧子著「特定共同研究倭寇プロジェクト、三年間の成果」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第25号』、2015年) <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0025.html>
- ・朱敏著「「明人抗倭図巻」を解説する「倭寇図巻」—との関連をかねて」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第22号』、2012年)
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0022.html>
- ・陳履生著「「標題」から『平番得勝図巻』を読む」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第24号』、2014年) <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0024.html>
- ・吳大昕著「嘉靖大倭寇時期的地方官員—以松江府上海縣官員的活動為例」(『全球化下明史研究之新視野』學術研討會會議論文、國立台灣師範大學)
<https://project.nctu.edu.tw/jms/wp-content/uploads/2007/10/Pt19.pdf>
- ・三宅亨著「倭寇と王直」(『桃山学院大学総合研究所紀要』第37巻第3号、2012年3月、桃山学院大学学術機関リポジトリ) <https://stars.repo.nii.ac.jp/>
- ・任偉著「嘉靖年間における倭寇の研究—王直の評価を中心に—」(2012年3月、兵庫教育大学学術レポジトリ) <http://hdl.handle.net/10132/3833>
- ・金沢陽著「後期倭寇研究の成果から見た、16世紀東シナ海の政治・経済情勢と貿易陶磁」(立教大学公開シンポジウム「貿易陶磁と文献史料から東アジア・東南アジアの歴史を考える—16世紀・17世紀を中心とした海域におけるヒト・モノの流れ」資料、2015年11月)
<https://www.rikkyo.ac.jp/events/2015/11/16814.html>
- ・柄内曾次郎編『増修洋人日本探検年表 付録第九 鐵炮記(南浦文集)』(昭和4年刊、岩波書店、国立国会図書館デジタルコレクション) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1243125/86>
- ・宇田川武久編『日本銃砲の歴史と技術』(2013年9月、雄山閣)
- ・村井章介著「鉄砲伝来と倭寇勢力 宇田川武久氏との討論」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第201集、2016年3月、国立民俗博物館)
- ・村井章介著「日本史と世界史のはざま」(『学術の動向』、2011年10月、日本学術協力財団)
- ・ウィキペディア／種子島時堯 <https://commons.wikimedia.org/wiki/種子島時堯>
- ・木村英雄著「浙東“墮民”考」(阿部謹也など編『社会史研究 4』、1984年4月、日本エディタースクール出版部)
- ・海老沢有道・大内三郎共著『日本キリスト教史 (前編 日本カトリック教史 第一章 キリシタン宗門の伝来 II キリシタン伝来の外的前提、第二章 布教の停滞と展開)』(1990年6月、日本基督教団出版局)
- ・五野井隆史著「『イエズス会日本書翰集』とポルトガル文書翰集について」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第2号』、1992年)
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0002.html>
- ・五野井隆史著「フランシスコ・ザビエルの東アジア布教構想」(『東京大学史料編纂所研究紀要 第11号』、2003年) <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0013.html>
- ・ルシオ・デ・ソウザ著、岡美穂子訳『大航海時代の日本人奴隷—アジア・新大陸・ヨーロッパ』(中公叢書、2017年4月、中央公論新社)

歴史研究

「近代」というシナプス

海洋を渡る技術と

モノたちのミッション

●大航海を支えた造船技術

ポ

ルトガルとスペインによる海洋進出が近代史に与えた影響は、さまざまな視点から、数多くの研究がなされています。日本史との関係という視点では、①鉄砲、②キリスト教、③銀が重要な要素として挙げられたりします。

しかし、ここでは視点をヨーロッパに戻し、「技術的領域」へのアプローチを試みます。

海洋航海を可能にした技術は、多項目に及びます。結果的にそれらの技術によって、海洋上の「交通革命 (Traffic Revolution)」が生じ、世界の枠組みは大きく変わりました。その要素には、次のようなものがあります。

① 造船に関わる技術

② 航海に関わる技術

- ・ 羅針盤
- ・ 海図
- ・ 天体観測機器
- ・ 携行型の時計
- ・ 緯度法

③ その他の技術

- ・ 武器
- ・ 保存可能な食糧

その中で最初に取り上げるのは、遠洋航海そのものを可能にした造船技術です。

◆コロンブスの海洋航海と船種

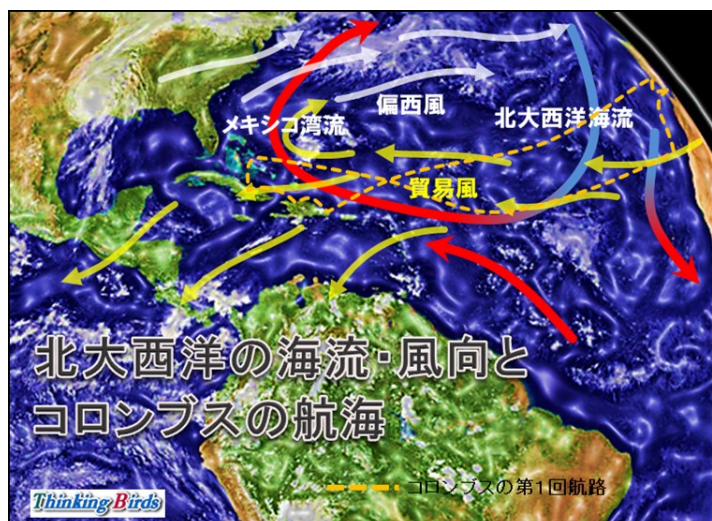
スペインの海洋航海について、ここまでは触れませんでした。その大西洋航路は、ポルトガルが開拓した、陸地を望みながらのアフリカ回りインド航路とは、明らかに次元がちがいます。ある意味では無謀な航路開

拓であり、ある意味では海流と風任せの優雅な旅でした。

1492年8月3日、3隻の帆船に分乗したコロンブス (Cristóbal Colombo 1451? -1506) 一行は、アンダルシアのパロス (Palos de la Frontera) 港を出航します。母船のサンタ・マリア号 (La Santa María)、随伴船のピンタ号 (La Pinta) とニーニャ号 (La Niña) からなる船団でした。航海は2カ月余りに及び、サン・サルバドル (San Salvador) と名づけた島に到着したのは、10月11日です。

一行は、同年中は現在のキューバ島を含む西インド諸島 (West Indies) 付近を航行。途中で母船のサンタ・マリア号が座礁し、航行不能になったため、翌50年1月から帰途に就きました。そして、やはり2カ月がかりで3月15日に、パロス港に帰港しました。その全航海は、約7カ月に及びました。

この航海で使用した3隻の船は、いずれも中古船で、母船のサンタ・マリア号がキャラック船 (Carrack)、随伴船の2隻はキャラベル船 (Caravel) と呼ばれる船種でした。キャラック船は、比較的大型で積載量が多いのに対し、小型のキャラベル船は、小回りが利き、航行速度が速いという特徴を持っています。コロンブス一行の総乗員数は、約90人とされています。中古船とはいえ、食糧などを含めた重量を載せ、長期航海と大西洋の



歴史研究

「近代」というシナプス

荒波に耐え得る技術が、船に注がれたことになります。

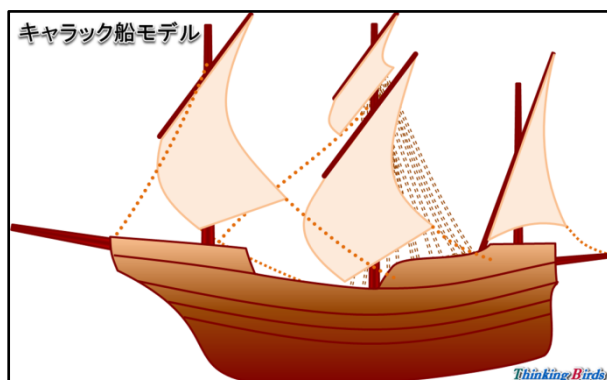
この二種類の船種は、15 世紀中頃にポルトガルで開発されたと考えられます。考案者の特定はできませんが、エンリケ航海王子の時代に対応しています。エンリケは、ポルトガル南部のサグレス (Sagres) 付近に「王子の村 (Vila do Infante)」をつくり、造船をしたとされています。サンタ・マリア号がどこで建造され、どんな構造だったのかは、ほとんど不明です。しかし、キャラック船は、15 世紀後半のポルトガルの造船技術が生んだ、革命的な帆船だったことは確かです。

キャラック船の最も優れた革新性は、オールで漕ぐ労力を必要とせず、順風でも逆風でも、前方航行可能な大型帆船という点です。基本形は、3 本のマストの前 2 本に順風航行用の横帆、後ろの 1 本に角度をつけた縦帆のラテンセイル (lateen sail) と呼ばれる三角帆を張り、逆風航行を可能にしています。全長 30m から 60m 程度の船が多かったとされています。ラテンセイルは、地中海で小型船に活用されていましたが、北ヨーロッパ型大型船への導入は、キャラック船が最初でした。

この船の出現によって、大量の人員と資器材の運搬が可能になり、海洋交易が加速したと言えます。また、攻撃と防御のため、一定量の火砲の積み込みが可能になり、後のヨーロッパ艦船の原型になりました。

◆ポルトガル船と木材

造船は、その性能が高度化すればするほど、



コロンブスの評価

■英雄 (Hero) か、侵略者 (Invader) か

コロンブスの歴史上の評価は、まさに「コロンブスの卵」のように二分しています。それは、ヨーロッパを基準にした視点と、アメリカ先住民から見た視点とに大別でき、「アラブから見た十字軍」を連想します。

私たち日本人は、いずれの歴史も、当事者の末裔という立場にはない以上、第三者的にコロンブスの事跡を評価し、子供たちに伝える必要があります。

コロンブスを「新大陸の発見の英雄」とする評価は、すでに通用しなくなっています。先行者がいることが確実な上、ヨーロッパ中心の歴史観との批判が浸透しています。

一方、侵略者とする評価は、4 回の航海で先住民の大量虐殺が報告され、一定の説得力を持っています。晩年のコロンブスに対するスペイン国内の評価の急落も、彼の「人間性 (Humanity)」を問う材料です。

■どう総合評価するのか

この論考は、「近代」の二面性を浮き彫りにすることを目的にしています。

コロンブスの行動は、15 世紀末段階でのヨーロッパからの、大西洋航路の開拓行為だったことは確かです。それが、金鉱目的の航海だったとしても、海洋航路を切り開いた業績は否定できません。

しかし、先住民に対する虐殺 (Genocide) は、異常と言えます。論理的にも、一方的に漂着したコロンブス一行の植民者が、再訪したら殺されていたため、先住民を皆殺しにしたという論理は、成り立ちません。それが、ローマ教皇のお墨付きの範疇とするなら、そこも異常です。また、スペイン国庫を浪費した面があります。

~~~~~

## 【設問】

あなたは、コロンブスの業績を、後世への影響を考えて、どう総合評価しますか？

- ☐ 全面的に高く評価する
- ☐ 悪影響もあるが評価できる点が多い
- ☐ 評価できる点もあるが悪影響が大きい
- ☐ 全面的に悪影響しかない



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

裾野の広い技術の組み合わせが必要です。今日の船舶、あるいは列車や自動車のように、基本設計の精度、部品一つひとつの原材料品質、加工技術、組み立て技術など、異分野技術の複合体が船になります。

キャラック船は木造船ですが、主要材料の木材のほか、防水・防腐の塗料、帆に使う織物、ロープ、釘や金具のような金属など、15世紀段階では、かなり高度な技術の複合体と言えます。その一つひとつに、耐久性や柔軟性が求められます。その中で木材は、最も重要な役割を担っています。

キャラック船は基本的に、船体の骨組みを作る骨格材（リアーメ liame）と船側や甲板などに使用する板材（タボアード tauoado）で建造されます。骨格材は、マストを含めて丸太材を使うことが多いのに対し、板材は、曲面加工を含めて板状加工をした木材です。用途が異なるため、それぞれに適性樹木がありました。

ポルトガル製キャラック船は、骨格材にコルク樫（ソヴァロ souaro）、板材にはイタリア笠松（ピニェイロ・マンソ pinheiro manso）を使用するのが通例でした。他の樹種を使用した船もありましたが、海水温が高い水域の航海で、「船食い虫」なる害虫被害が多く、船体が腐りやすかったようです。そのため、コルク樫とイタリア笠松は、造船のための理

想的な樹木とされました。

この2種類の樹木は、リスボン（Lisboa）付近以南のポルトガル南部から、スペイン南西部にかけての森林地帯に、数多く自生していました。そのため、ポルトガル製キャラック船は、一部の北ヨーロッパ産材を除いて、ほぼ国産材で賄われました。木材資源でポルトガルは、最も恵まれていたと言えます

## ◆帆づくりを担った女性たち

ポルトガル船の造船は、川の河口付近や浜辺などを作業場にして、部品の加工場や資機材の商取引場、全体の管理施設などを、その周辺に設けていたとみられます。船大工などの親方（メストレ mestre）がそれを統括し、建造スピードは、リスボンで年間2～3隻程度とされています。

ドックを備えた造船所が、本格的に稼働するようになるのは、オランダが海洋覇権を握った17世紀以降のことです。それ以前は、造船エリアと言って良い水辺全体が、造船場でした。川を使った木材運搬や海へのアクセスの利便性から、河口付近が適地とされていたようです。

ポルトガル船は、木材をほぼ国産材で賄っていた一方、帆は、輸入と国産が競合していました。輸入帆布の主要な産地は、フランス北部のブルターニュ（Brutagne）でした。

## 木材で栄え、木材で衰退する

## ■ポルトガル海洋帝国の悲哀

ヴァスコ・ダ・ガマがアフリカ回りのインド航路を開拓して以降、ポルトガル船の需要は急増しました。造船の適正材とされたコルク樫とイタリア笠松は、木炭などの燃料材としても活用されていました。そのため、ポルトガル国王・ジョアン3世は1546年、造船事業を優先し、それらの木の根元からの伐採と木炭への活用を禁止しました。また、アルコバーサに造船用木材の保護区を設け、自然保護ならぬ資源保護を図りました。

しかし、都市部に人が集まるにつれて燃料材の消費需要が高まったこともあり、造船材の不足は徐々に顕著になって行きました。それに対して国王は、1550年代に燃料木材が不可欠な製糖業を禁止、1562年にはガラス工房を禁止して木材消費の抑制を図りました。さらに、造船業を維持するため、1573年には松かさや松材の一般販売を禁止したのです。

これによってポルトガルは、市民生活を直撃する燃料エネルギー危機を招いただけでなく、造船材資源が枯渇して粗造船が増え、海洋帝国は足元から崩壊して行くのです。

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

北方型帆船の帆布産地の一つで、スペイン船の大半は、フランス帆を活用していました。それに対してポルトガルは、国内に主要産地を創り出す政策を打ち出したのです。王立製帆とでもいうべき政策で、一寒村に過ぎなかった北部内陸のラメーゴ（Lamego）が、造船産業の一翼を担う地区になりました。そこで作られた帆布は、ラテン布の系譜にあったとされています。

帆の大半は麻布です。亜麻から作った糸を束ね、それを織り込んで布状にして、帆布にする複数の工程が介在している製品です。帆の製作には、女性に関わる割合が高かったと考えられています。織物を織るという作業は、女性が得意として来た分野で、それがどのように活用されるかに関わらず、女性特性が表れた製品のひとつと言えます。

帆の製造を担った女性たちは、専門性の高い織工、紡糸工として働いたとされています。男性たちが、農作業などの合間を縫う片手間仕事になるのに対し、女性たちは、専門職として、数十人単位で仕事に当たったと記録されています。仕事量は多く、「いつも多忙」な状態だったようです。

帆布づくりを担った女性たちが、今日的な意味での職業意識を持ち、相応の労働環境の下で働いていたとは思えません。しかし、特定の専門性を身につけ、地域の産業を支えるまでの役割を果たしていたという点では、歴史を先取りしていました。このような地域産業振興の手法は、後のイギリスで、毛織を中心とした農村企業に引き継がれるのです。

## ◆「交通革命」の最初の立役者

キャラック船は、マゼラン一行の世界一周の航行でも使用され、母船・ヴィクトリア号（La Victoria）は、見事にその大役を果たしました。世界史を塗り替える役割を果たしたと言えます。

ポルトガル船は基本的に、北欧型大型帆船

と地中海型小型帆船の造船技術を、融合して誕生したと言われています。そのため、木材などの主要部材を除く多くの部材は、輸入に依存していました。ポルトガルは、できる限り国内生産で賄えるよう努めたとはいえ、金属製部材など、賄い切れない要素が数多くありました。それは、今日の製品づくりでも言えることです。すべての要素を国産で賄おうとすることは、基本的に無理なのです。

キャラック船は、大量輸送が可能というメリットの半面、航行速度が遅いという欠点がありました。また、横風に弱く、横転しやすいのも欠点でした。そのため、コロンブスは、母船のサンタ・マリア号よりキャラベル船のニーニャ号を好んだ、と言われています。

キャラベル船は、ラテンセイルの三角帆を主体にした小型船で、小回りが利き、浅瀬の航行が可能で、操舵性に優れているというメリットがありました。運搬機能より航行性能を重視しているため、海洋探検船として好まれたと言われています。

キャラック船とキャラベル船は、ヨーロッパ型帆船の革新的モデルとして、エンリケ航海王子時代のポルトガルで誕生しました。その登場によって航海は、遠洋にまで及んだだけでなく、大量の人員や物資を輸送できる時代を迎えました。二つの船種は、「交通革命」の最初の一步を踏み出す立役者なのです。

## ◆海洋航海のリスク

ポルトガルによるインド航路への航海は、16世紀を通じて活発に行われました。リスボンからの出港数は、年平均で70隻前後と考えられます。単純計算で1カ月平均5.8隻、1週間に1隻以上が出港したことになります。

当時の航海事情は、ポルトガルの造船技術がいかに優れていたとはいえ、今日に比べれば、かなり危険を伴うものでした。天候悪化による海の荒れや暴風雨に加え、脆弱な造りの船もあったと考えられ、10隻に1隻程度は、

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

海難事故などに遭った可能性があります。

16世紀中に、リスボンからインドに向かった出港数とアジアへの到着数、アジアからリスボンに向かった船数のデータが下表です。リスボン出港のデータが、一定の正確性を備えているのに対し、アジア出港データは、正確性という点では信頼性に欠けます。しかし、傾向分析を試みるデータとしては、十分すぎる有効性を持っています。

データによると、出港地に対する目的地への到達率は、往路復路共に平均で約88%です。しかし、喪失船数は、往路の7.5%に対して、復路では約13%~14%と高くなっています。これは、中途帰還や越冬の割合が往路では高く、復路が低いのが大きな要因です。船が多少壊れていても、荷積みで帰還を急いだ結果、惨事になった。数値上は、復路ほど危険性が

高い航海になったことが伺えます。

私たちは、ポルトガルの海洋航海を、ともすれば、勇敢な男たちの英雄伝説のように捉えがちです。しかし、その航海は、死と隣り合わせだったことを、歴史の事実として認識する必要があります。

## ◆ガレオン船以降

16世紀後半入ると、ヨーロッパ船の造船技術はさらに発達しました。キャラック船の進化系と言えるガレオン船（Galleon）が登場し、船体がさらに大型化しました。

ガレオン船は、多層構造の船室を備え、特大船では、500人~600人の搭乗が可能だったと言われます。大量の物資を積み込めるだけでなく、複数の大砲の搭載も可能でした。スペインが誇った「無敵艦隊（Invincible Armada）」の主力艦は、ガレオン船を主体

## ■リスボンからインド洋へ向かった船数（16世紀）

| 期間        | 出港船数 |         | 喪失船数 |       | 東洋への到着船数 |       |         |
|-----------|------|---------|------|-------|----------|-------|---------|
|           | 10年計 | 年平均     | 10年計 | 喪失率   | 10年計     | 到着率   | 年平均     |
| 1500-1509 | 138  | 13-14   | 9    | 6.5%  | 128      | 92.8% | 12-13   |
| 1510-1519 | 96   | 9-10    | 4    | 4.2%  | 90       | 93.8% | 9       |
| 1520-1529 | 76   | 7-8     | 14   | 18.4% | 61       | 80.3% | 6       |
| 1530-1539 | 80   | 8       | 6    | 7.5%  | 69       | 86.3% | 7       |
| 1540-1549 | 61   | 6       | 4    | 6.6%  | 55       | 90.2% | 5-6     |
| 1550-1559 | 51   | 5       | 4    | 7.8%  | 40       | 78.4% | 4       |
| 1560-1569 | 49   | 5       | 3    | 6.1%  | 42       | 85.7% | 4       |
| 1570-1579 | 54   | 5       | 3    | 5.6%  | 51       | 94.4% | 5       |
| 1580-1589 | 56   | 5-6     | 3    | 5.4%  | 47       | 83.9% | 4-5     |
| 1590-1599 | 44   | 4       | 3    | 6.8%  | 37       | 84.1% | 3-4     |
| 合 計       | 705  | 67 - 71 | 53   | 7.5%  | 620      | 87.9% | 47 - 50 |

## ■インドとマラッカからリスボンへ向かった船数（16世紀）

| 期間          | 出港船数 |       | 喪失船数  |               | リスボンへの到着船数 |              |       |
|-------------|------|-------|-------|---------------|------------|--------------|-------|
|             | 10年計 | 年平均   | 10年計  | 喪失率           | 10年計       | 帰着率          | 年平均   |
| 1501-1510*1 | >64  | 7     | 7-8   | <10.9 - 12.5% | >56        | >87.5%       | >6    |
| 1511-1520*2 | >56  | 6     | 1     | <1.8%         | >55        | >98.2%       | >6    |
| 1521-1530*1 | 37   | 4     | 1     | 2.70%         | >36        | >97.3%       | >4    |
| 1531-1540   | ?    | —     | 2     | —             | —          | —            | —     |
| 1541-1550*1 | >46  | 5     | 5     | <10.9%        | 41         | >89.1%       | 4     |
| 1551-1560   | 45   | 4-5   | 12-14 | 26.7 - 31.1%  | 30-32      | 66.7 - 71.1% | 3-3.2 |
| 1561-1570   | >37  | 4     | 3-4   | <8.1 - 10.8%  | >32        | >86.5%       | >3    |
| 1571-1580   | 44   | 4     | 1     | 2.3%          | 43         | 97.7%        | 4     |
| 1581-1590   | 47   | 4-5   | 5     | 10.6%         | 41         | 87.2%        | 4     |
| 1591-1600   | 39   | 4     | 16    | 41.0%         | 23         | 59.0%        | 2     |
| 合 計         | 415  | 42-44 | 53-58 | <12.8 - 14%   | >365       | >88.0%       | >36   |

※注）\*1 は 1 年分のデータ欠損、\*2 は 2 年分のデータ欠損。「>」は「以上」、「<」は「以下」を示す。率計算は独自に行った。

【出典】山田義裕著「16 世紀のポルトガルのインド交易とその船隊 一奇書：「船隊備忘録」」



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

にしていました。物資輸送では、メキシコのアカプルコ（Acapulco）とフィリピンのマニラ（Manila）を結ぶ、太平洋航路で活躍し、「ガレオン貿易（Galleon trade）」と呼ばれました。アフリカから中南米への大量の奴隷輸送は、ガレオン船が担いました。

その後、ガレオン船を改良し、多くの砲門を装備した軍船が、戦列艦（Ship of the Line）です。産業革命以降、蒸気機関の発明に伴う蒸気船は、船体構造自体はガレオン船を基礎にしています。やがて木製船は、木材供給や船体強度の問題から、金属船に変わりました。また、石油を利用したエンジン、スクリューの発明で、今日の大型船が誕生に至るのです。

一方、南北アメリカ大陸との往来が活発になるにつれ、航海術が物を言うようになりました。特にカリブ海では、「海賊（Pirates）」が横行し、攻撃側と防御側の双方に「操船術（Sailing）」が求められました。操船に優れた者が名誉に浴する風習は、海を制することと深く関わっているのです。

## ◆ガレオン船と日本

日本では、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、南蛮貿易を担った「御朱印船」が登場しました。その構造は、中国のジャンク船が基本だったとされています。しかし、設計図面等が現存しないため、実態は不明です（日本史の基礎史料は、ここぞという時に一事が万事、実態を証明する記録が残っていないことが多いのは、極めて残念なことです）。

その中で、伊達政宗（1567-1636）がスペイン人探検家・セバスティアン・ビスカイノ（Sebastián Vizcaíno 1548-1624）らの要請で建造したサン・ファン・バウティスタ号（San Juan Bautista）は、日本初のガレオン船でした。当時の日本は、造船に関して一定の理解力を備えていたことになります。この船は、1613年に政宗がヨーロッパに派遣した「慶長使節団」の航海で使用され、支倉

常長（1571-1622）一行を乗せ、メキシコのアカプルコ（Acapulco）まで赴きました。航行技術と海洋知識のない日本人には、操船の指揮はできませんでした。船は、その帰途にも使用されましたが、マニラで売却されてしまったため、以後の消息は不明です。

また、徳川家康（1543-1616）が、ウィリアム・アダムス（William Adams 三浦按針 1564-1620）に命じて建造したサン・ブエナ・ベントウーラ号（San Buena Ventura）は、日本初のヨーロッパ型帆船ですが、ガレオン船に分類できるかどうかは不明です。

なお、「慶長使節団」の日本側の史料は、皆無に等しいのが実態です。日本の禁教を知った支倉常長は、渡航記録をマニラで焼却、帰国後の文書や持ち帰り品も、散逸していると言われます。ここにも、貴重な歴史記録を残すという意識の欠如と、隠蔽と偽装で事実改変してはばからない、歴史に対する日本の態度が表れています。海外史料が残っていなければ、「慶長使節団」は、なかったことにされかねなかったのです。

日本の大型船建造は、いわゆる「鎖国」以降、諸大名の戦力増強を危惧する江戸幕府によって禁止されました。以来、大型船の建造技術が日本で発展することはなく、幕末を迎えることになります。海洋覇権をめぐる絶えず戦争を繰り返した近代ヨーロッパと、日中朝の相互海禁体制下で、安寧に浸った東アジアは、造船技術と航海技術に歴然とした差を生じることになりました。

技術の発展と戦争の応酬は、歴史の表裏をなしています。仮に江戸幕府が、諸藩の大型船建造と航海を野放しにしていたら、戦乱の世が続いたかもしれません。それは、対外戦争に明け暮れた16世紀以降の近代ヨーロッパが、結果的に技術の発展を競い合い、人類に恩恵と災厄をもたらしたことと、表裏の関係にある歴史と言えるのです。

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## ●地球上の経度と「教皇子午線」

**自** 動車で真西に向かって時速 60Km で走行し、1 時間後に到達した地点は、出発地点から 60km 離れていることになります。その到達地点が、出発地点から西に何度傾いているかは、60Km と地球の半径から、三角関数を使って計算できます。出発地点を経度 0 度とすると、到達地点は西経  $\alpha$  度になります。

理論上は正しいこの計算は、実際には成り立ちません。自動車が向かう「真西」が、本当に「真西」なのかは分からないし、1 時間走っても「真西」に向かうような直線道路は、少なくとも日本には、実在しません。また、自動車を常に時速 60km で走らせることは不可能ですし、地形の起伏もあるため、到達地点が出発地点から正確に 60km になる確率は、ほぼゼロです。そこに、実際には誰も計測したことがない、地球の半径を持ち出して求めた角度が、正しくなるはずがないのです。

ポルトガルとスペインは、ローマ教皇・アレキサンドル 6 世による「教皇子午線」なるものの設定を受け、地球上の陸地を 2 分して領有するとされました。この領土分割を定めた 1493 年のトルデシリャス条約 (Tratado de Tordesillas) は、キリスト教史上最大の汚点の一つです。後に廃止されたとはいえ、政治史上の「教皇子午線」なるものは、決して容認できるものではありません。

しかし、科学史上の「教皇子午線」は、地球上に経度 (Longitude) を設定する原点を提示しました。

## ◆緯度と経度

地球上の緯度 (Latitude) は、洋の東西を問わず古くから算出されていました。北半球の場合、北極星を定点として、比較的容易に緯度の算出はできるのです。

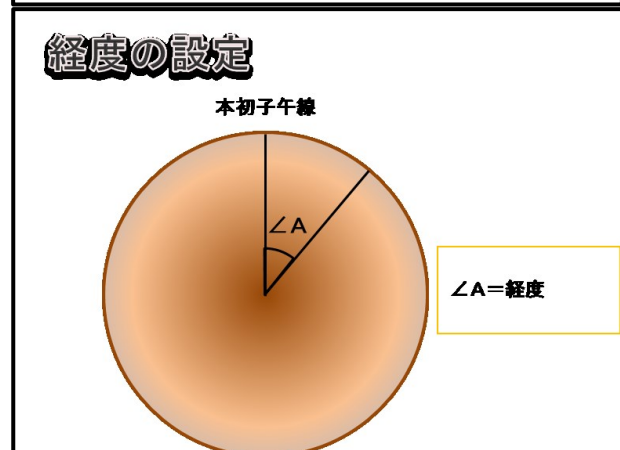
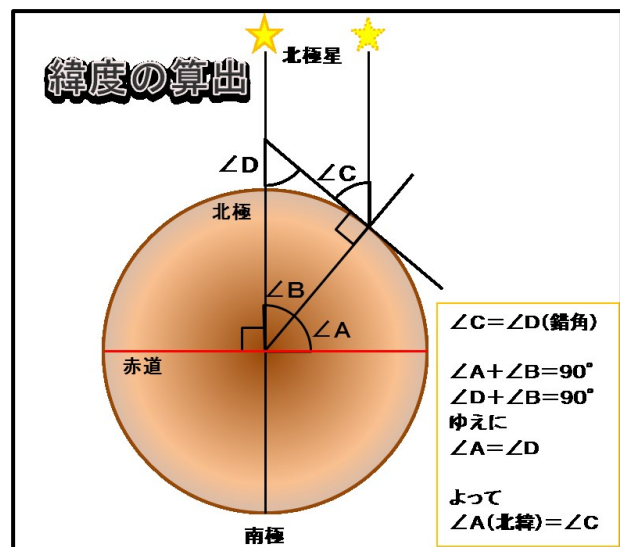
しかし、経度は、北極星のような客体的な定点がないため、任意に設定した机上の地点

間と実際の地理上の地点間は、大きくズレて、信頼性は乏しいものでした。現実問題、大西洋中央に設定つものの「教皇子午線」は、ブラジル東部を通る大きな誤差を生みました。

経緯度の発想は、古くからあったと言われています。中国にもその発想があり、「緯線 (縦軸)」と経線 (横軸)」が、現行の日本語の「緯度と経度」になっています。

経緯度の設定が必要なのは、球体面上の 2 地点の距離を導き出すためです。それによって、2 地点間の移動時間や複数点間の距離を元にした面積が算出でき、地図が作れるのです。しかし、海洋航海時代を迎えると、それだけでは済まない必要性が生じました。

- ① 海洋上で、自船の位置を正確に知る必要がある。
- ② 海洋を東西に移動すると、時間設定の基点がズレて、その補正が不可欠になる。



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

加えて消息不明を含む海難事故が多発し、海洋制覇を目指す国々は、懸賞金まで出して経度測定の精度向上を求めました。

## ◆経度設定の難しさ

ポルトガルとスペインによる「大航海時代」の経度設定は、残念ながらズレ幅が大きいもののばかりでした。にもかかわらず、海洋航海が可能だったのは、天体を活用した緯度計測から自位置を割り出す天測航法（または天文航法 celestial navigation, astronavigation）が古代からあり、航海用機器の発達（羅針盤や角度測定器など）が、一定程度の位置推測が可能にしていたからと言えます。少なくとも当時の日本には、そのような知見と技術はありませんでした。

しかし、海洋航海の頻度が増えるに従い、正確な経度設定は、大きな課題になりました。

自動車の例でも示したように、理論上は移動時間と速度を元に、定点からの距離を算出することで、角度が求められます。ところが、航行時間による距離計測は、気象条件や海流の状態、船の性能などでバラツキが大きく、正確な距離計測とはほど遠いものでした。時計の性能にも、問題がありました。

また、太陽の正中（太陽が真南に来ること）時刻を2地点で同時に観測し、例えば時間差が1時間であれば、傾き  $15^\circ$  が算出できます（ $360^\circ \times 1/24\text{h} = 15^\circ$ ）。しかし、太陽の正中時刻の2地点同時観測など、現実的にほぼ不可能でした。天体を利用する方法は、地点間と天体を結ぶ三角形をつくり、その底辺を求めて距離とする手法もあります。これも、北極星のような定点がないため、計算式が複雑になり、基点設定のちがいで数値は異なりました。海上からの天体観測値は、船が揺れるため、当然あてになりませんでした。

その結果、16世紀段階での世界地図は、大陸の一定の外観は示せたものの、精度に大きな課題を残したままになりました。

## ◆経度設定のいくつかの手法

経度設定の精度を挙げる試行錯誤は、ポルトガルとスペインから、オランダとイギリスなどに引き継がれ、2世紀に及ぶ模索が続きました。ここでは、その過程で生まれたいくつかの手法を列記します。

## ① ガリレオの手法

「近代科学の父」とされるガリレオ・ガリレイ（Galileo Galilei 1564-1642）は1610年、木星の衛星（ガリレオ衛星）を発見しました。これらの衛星では、たびたび衛星食（木星の影をつくる）が起こることが分かり、経度設定に利用できると考案しました。衛星食が起こるサイクルを、綿密な観測を通して割り出し、基準点と観測点の時間差を求めるという理論でした。

この理論は、ガリレオの存命中は実践されませんでした。しかし、1671年に完成したパリ天文台（Observatoire de Paris）で、初代台長ジョヴァンニ・カッシーニ（Giovanni Domenico Cassini 1625-1712）が、木星の運行表を作成、天文学者に呼びかけ、測量結果から経度を求めることに成功しました。

この方法は、木星の観測データが集まるにつれて精度が上がり、パリ天文台を本初子午線（Prime Meridian 経度の基準線）とした経度設定にも貢献しました。

しかし、この方法には欠点がありました。

- ・木星の衛星観測は一般的ではない
- ・夜間しか観測値が得られない
- ・海上ではほぼ観測不能になる

地図の精度向上に貢献したとはいえ、海上で自位置を知るという実用性では、まだまだ不十分だったのです。

なお、デンマークのオーレ・レーマー（Ole Christensen Rømer 1644-1710）は1676年、木星の衛星観測を通じて、光の届く時間に誤差があることから、光の速度の算出を初めて成し遂げました。



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## ② 月距法 (Lunar distance method)

ドイツの天文学者ヨハネス・ヴェルナーが、1514年に唱えた理論で、ある星に対する月の移動速度から時刻を算出する手法でした。

$$\begin{aligned} (\text{月の角速度}) &= 360^\circ / (27.32 \times 24\text{h}) \\ &= 0.5490^\circ / \text{h} \end{aligned}$$

月は地球から見て、1時間に $0.549^\circ$ ずつ動いて見えるということです。月とある恒星との位置関係が、正確に観測できれば、ここから $1^\circ$ に対する時間が算出でき、基準点との時間差から角度が導けるため、経度が出て来るというものです。

この方法は、星の位置の精度、観測機器の精度、月の動きの正確な見取図に依存しているため、その課題を解決することが不可欠でした。しかし、その課題は、次々に解決の方向に向かいました。

・**星の位置** ロンドン郊外のグリニッジ天文台 (Royal Observatory, Greenwich 1675年設立) のジョン・フラムスティード (John Flamsteed 1646 - 1719) が、生前にまとめた星図『天球図譜 (Atlas Coelestis)』が、1729年に出版され、星の天空上の位置がより正確に把握できるようになりました。

・**観測機器** 2つの物体間の角距離 (angular distance 角度と長さ) を計測するための六分儀 (sextant) などが、1730年代に開発され、固定点がなくても、天体間の位置関係を高い精度で計測できるようになりました。

・**月の動き** 月の正確な動きを数値化したのは、ドイツの地図専門家トビアス・マイヤー (Johann Tobias Mayer 1723-1762) でした。数学者のレオンハルト・オイラー (Leonhard Euler 1707-1783) の支援を受けて制作した月の運行表は、イギリスの学会で高い評価を受けました。

月距法は、18世紀前半段階の経度算出の主流をなすに至りました。今日でも、その有効性は否定しがたい要素を備えています。

## ③ クロノメーター (Chronometer)

一介の大工職人が成し遂げた「革命」の物語は、愛好家ならば誰もが知っています。それは、ガリレオの木星や月距法の月のように、天体を利用した計測法とは真逆の発想で、達成されたからです。

天体を利用した計測法は、基本的には角度を基軸にしています。角度差から時間差を割り出すというベクトルのため、角度差の精密な観測が、経度算出の決め手になります。それに対して、精密な時間を測定できる装置によって角度を割り出すという手法は、空を眺めることに腐心して来た者たちの眼差しを、根本から変えてしまいました。

この項の冒頭で示したように、移動時間から角度を求めることは、理論的には可能です。しかし、観測条件のちがいで、必然的に誤差が生じます。時計の性能も、その条件の一つです。海上で砂時計を使っていたのでは、お話になりません。振り子時計も、移動体の中では信頼ができませんでした。

イギリス生まれの大工職人ジョン・ハリソン (John Harrison 1693-1776) は、幼い頃から時計づくりに興味を示し、独学で学んだ物理学や機械工学の知識を基に、精度の高いゼンマイ式時計 (H-1) を、1735年に完成させました。この時計の精度は、航海試験でも実証されました。しかし、この時計には改良の余地があるとしたハリソンは、2号 (H-2)、3号 (H-3)、4号 (H-4) と、更新を重ねて行きました。

ここで起こったのが、経度評議員会のネヴィル・マスケリン (Nevil Maskelyne 1732-1811) らとの確執でした。天文学者のマスケリンは、月距法による経度設定を推奨し、ニュートン (Isaac Newton 1642 - 1727) らも同調して、ハリソンに圧力をかけ続けました。

ハリソンは、1770年に存命中で最後の5号 (H-5) を完成させました。この時計が国

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

王ジョージ3世（George III 1738-1820）に献上され、精度の高さが実証されたため、月距法を退けて行くことになったのです。

クロノメーターはその後、各地の時計職人などが模倣と改良を重ね、より高性能、より安価を実現して行きました。19世紀には、航海者の必携品になって行きました。また、経過時間を表示する計測時計（クロノグラフ）が生まれました。

## ◆本初子午線をめぐる駆け引き

経度の確定には、基準となる子午線の設定が不可欠です。経度0度をどこにするかは、誰でも任意に設定できます。その基準経度線を「本初子午線（Prime Meridian）」と言います。ポルトガルとスペインの領土分割を定めたトルデシリャス条約では、西アフリカのヴェルデ岬（Cabo Verde）に設定されました。そこから西に370リーグ（約1,770km）の地点の経線が、「教皇子午線」です。

しかし、西ヨーロッパ各国は、その「本初子午線」に対して、独自の経度0度地点を設け、「本初子午線」とするようになりました。

## 時計の精度

## ■「時間との闘い」の時間

時計の精度は、基準となる時計との誤差が、どれくらい生じるかで計測できます。

航海に出る場合、例えばロンドンのビッグベンの正午と手持ち時計の正午を、出航時に合わせておき、数カ月後の帰港時の正午が、基準時計（補正が正しく行われていることが前提）とどれくらいズレているかで、手持ち時計の精度が分かります。

時計は、どんなに精度が高いものでも「狂い」がつきものです。今日の市販品でさえ、気温変化や湿度変化などが原因で、金属収縮、部品の劣化、摩耗などが起こり、時刻を狂わせてしまいます。

「時間との闘い」ということばを、良く耳にします。経度の歴史をひも解いて行くと、それは結局、長い時間をかけた「時間計測との闘い」だったことに気づきます。

各国の主な「本初子午線」は、次の通りです。

## 【フランス】

・フェロ子午線 西アフリカ沖のカナリア諸島にあるエル・イエロ島（El Hierro）に基準点がある。宰相リシュリュー（Armand Jean du Plessis de Richelieu 1585 -1642）が、1634年に設定した。

・パリ子午線 パリ天文台の建設に伴い設定された基準点。天文台内の床に、現在も子午線が残されている。

## 【ベルギー】

・アントウェルペン子午線 基準点をアントウェルペン（Antwerpen）に設定した子午線。ベルギーで発行された地図の基準になった。

## 【イギリス】

・グリニッジ子午線 基準点をグリニッジ天文台に設定した子午線。1851年に設定され、後の国際基準子午線になった。

## 【アメリカ】

・ワシントン子午線 独立を成し遂げたアメリカが、1791年に議会議事堂を基準点としたのが始まり。その後、ホワイトハウス、旧海軍天文台、新海軍天文台と位置が変更した。

## 【日本】

・中度 伊能忠敬（1745-1818）が、江戸時代後期に日本地図を作成するにあたり、現在の京都府中京区に設定した基準点。実効性は、ほとんどなかった。

このような各国まちまちの「本初子午線」は、各国間を行き来する航海者にとっては、不便極まりないものでした。必然的に国際基準が求められ、1884年の国際会議で、イギリスのグリニッジが、国際的な「本初子午線」になりました。しかし、フランスは、パリ子午線を1911年まで継続しました。なお、グリニッジ子午線は、その後変更され、2019年現在の「国際基準子午線（International Reference Meridian）」は、旧天文台跡地からずれた地点に設定されています。

※注）私たちが一般的に「時計」と呼んでいるのは、今が何時何分かを知らせてくれる「クロノメーター」です。それに対して、ストップウォッチのような経過時間を測ってくれる装置のことを、「クロノグラフ」と言います。

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## ◆経度から見える「近代」の二面性

経度は今日、人工衛星を利用したGPS (Global Positioning System) の電波で計測されています。その精度は、クロノメーターよりさらに高まり、宇宙から地上の機械操作を可能にするまでになっています。しかし、誤差が完全に解消された訳ではありません。電波の歪みなどにより、一定の誤差が生じると言われています。また、プレートテクニクスに伴う大陸移動が、わずかずつとはいえ起こっているため、確定した経度が恒久的とは言えないのです。

経度はあくまで、任意に定めた基準子午線からの目視できないままの角度です。この角度をより厳密にしようとすれば、北極点と南極点を結ぶ自転軸の延長線上の「真北」か「真南」に、見かけ上の静止衛星（地球は公転し、自転軸もブレるので、常に動いている）を置き、赤道面との直行観測データから導き出すことです。それが技術的に可能になる日は、果たして来るのでしょうか。

「教皇子午線」は、政治史的には言語道断な領土分割線です。しかし、科学史的には、その設定があったからこそ、現在の経度に繋がる歴史が生まれました。功罪ということばがあるように、経度の歴史にも、「近代」の二面性が潜んでいます。

## ●火薬の時代への序章

# 唐

代の中国で発明された黒色火薬が、モンゴル勢力の西進でイスラム圏とヨーロッパに伝わり、火砲は発達したと言われています。オスマン軍のコンスタンティノープル包囲戦では、大砲（ウルバン砲）が使われ、威力を発揮しました。また、15世紀後半から16世紀にかけてのイタリア戦争では、組織的戦闘に銃が使われました。フランス王軍とスイス傭兵軍にナポリ東部で対峙したスペイン軍が、1503

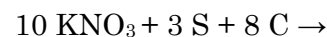
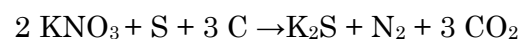
年のチェリニョーラの戦い（Battaglia di Cerignola）で、後にテルシオ（Tercio）と呼ばれる部隊編成による銃撃戦を展開し、大勝したとされています。ヨーロッパにおける戦争で、銃火砲の使用が常態化するようになった一つの事例です。

そのヨーロッパ式火砲が、東アジアに持ち込まれたのは、16世紀初頭のことです。ポルトガル人が中国に持ち込んだ大砲は、「佛郎機（フランキ）」と呼ばれました。インドのゴアで、1515年頃から製造が始まったと推測されます。明臣だった朱宸濠（寧王？-1521）は、それを模して1517年に「佛郎機」を私蔵したと伝えられています。

日本への火砲の伝来は、先にも述べたように、1542年（1543年説あり）に、ポルトガル人が種子島に伝えた「鉄砲」が、最初とされています。定説では、その「鉄砲」は「火縄銃」です。中国で生まれた火薬は、ヨーロッパ経由という遠回りな経路で、「鉄砲」として日本に伝わったことになります。

## ◆黒色火薬の成分と宋代の製造法

火砲を構成する基本的要素の黒色火薬は、自然界（nature）にはない人工物（artifact）です。原料の硝石（ $\text{KNO}_3$ ）と硫黄（S）と木炭（C）を、6～8：0.8～2.5：1～2の割合で調合した粒状または粉状の混合薬です。熱すると、硫黄が木炭の発火温度を下げ、発火した木炭によって、硝石中の硝酸塩（ $\text{NO}_3$ ）が335℃の熱（純度による）で熔融することから、空気がなくても燃焼します。以下のような化学反応が起こるとされています。



その発火現象は、炎を上げる燃焼で、高純度硝石を最適化して配合しない限り、爆発的には発火しにくいとされています。



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

黒色火薬の原料のうち、木炭は、樹木の炭化で生成されるため、適正樹種があるとはいえ、樹生地域ならば、どこでも生成が可能です。硫黄は、火山噴出物に含まれる割合が高く、周辺の温泉地帯を含めて、火山地帯で豊富に採取できます。日本列島には豊富ですが、中国では産地が限定されるため、人工的に抽出したとされています。

一方、硝石（硝酸カリウム）は、有機物が

高温多湿の環境下で分解して生成されます。天然硝石は、生成後に乾燥して岩床化したもので、主産出地は、インド（現在のビハール州付近）などの準乾燥地域です。中国（現在の河南省付近）では、多量の硝石を含んだ土から人工的に硝石を作る技術が、早くから開発されていました。降雨量の多い日本には、天然硝石床はないとされています。

黒色火薬の製造法は、宋代に曾公亮（999 -

1078）らが編纂した『武経總要』に著されています。それによると、主原料を「晋州硫黄 14 両」「焰硝 2 斤半」「松脂 14 両」とし、右図のものを配合するとしています。また、「蒺藜火毬」で「焰出」させる火薬法は、「硫黄 1 斤 4 両」「焰硝 2 斤半」「粗炭末 5 両」を配合するとしています。

唐代から明代の計量法では、以下の式になります。

$$1 \text{ 斤 (約 680g)} = 16 \text{ 両}$$

この基準で試算すると、主原料の重量が、下表のように割り出せます。

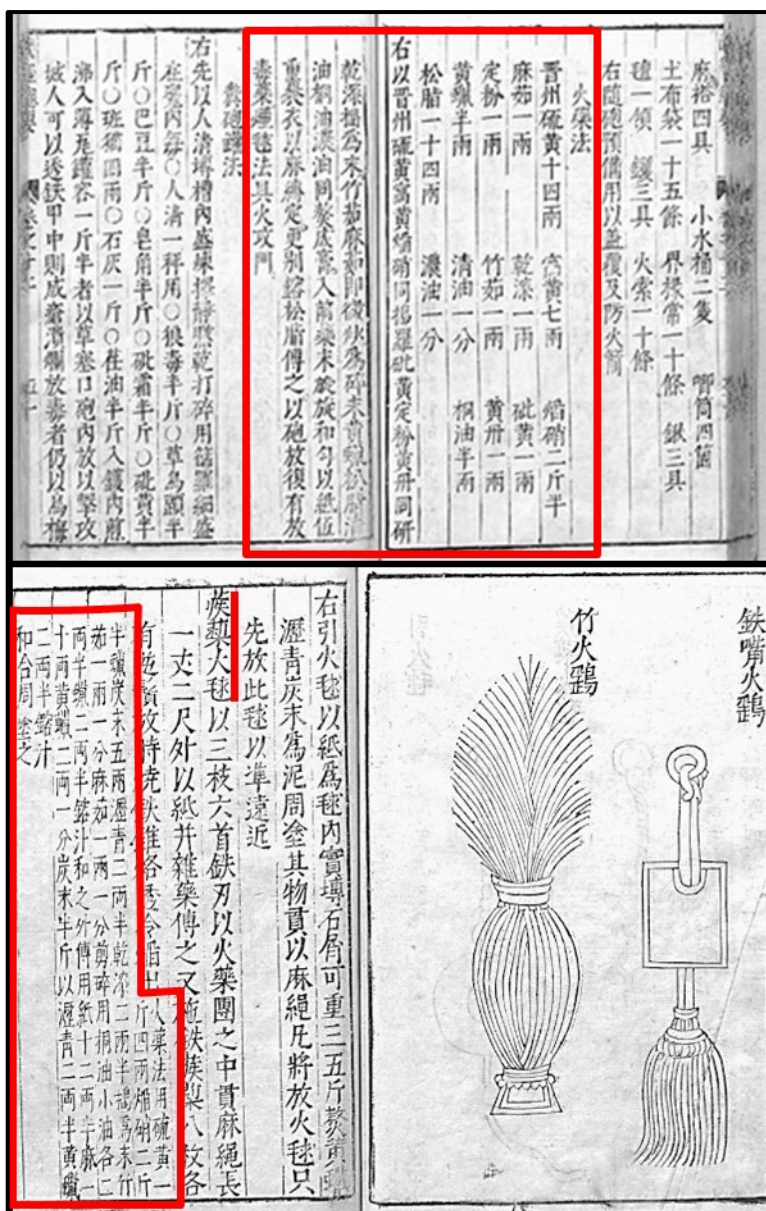
その結果、主要火薬の成分配合比は、以下のようになります。

$$\begin{aligned} \text{焰硝} : \text{晋州硫黄} : \text{松脂} \\ = 1700\text{g} : 595\text{g} : 595\text{g} \\ \div 2.9 : 1 : 1 \end{aligned}$$

## ■宋代の火薬成分量

| 主要成分量 |            | 重量     |
|-------|------------|--------|
| 火薬法   | 晋州硫黄 14 両  | 595g   |
|       | 焰硝 2 斤半    | 1700g  |
|       | 松脂 14 両    | 595g   |
| 蒺藜火毬  | 硫黄 1 斤 4 両 | 850g   |
|       | 焰硝 2 斤半    | 1700g  |
|       | 粗炭末 5 両    | 212.5g |

## ■武経總要（前集卷十二 火薬法）



出典：市立米沢図書館デジタルライブラリー『武経總要 前集 22 卷、増百戰奇法 1 卷 後集 21 卷、増行軍須知 2 卷』（米沢善本 40）

<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA040.html>

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

ほぼ「5.8 : 2.1 : 2.1」の配合比です。硝石の割合が、今日の標準的配合比より低いいため、硝石自体の燃焼力は、弱かったと考えられます。

また、「蒺藜火毬」の火薬の配合比は、以下ようになります。

$$\begin{aligned}\text{焰硝} : \text{硫黄} : \text{粗炭末} &= 1700\text{g} : 850\text{g} : 212.5\text{g} \\ &= 8 : 4 : 1\end{aligned}$$

約「6 : 3 : 1」の配合比です。硝石と硫黄の配合比を増やした分、燃焼力はやや高いと考えられます。硫黄の配合比が高いため、硫化物( $\text{K}_2\text{S}$  等)の排出量が増えると考えられ、「硫黄の匂い(硫化水素など)」が、かなり発生したと思われます。

これらの仕様に基づく火薬が、どの程度の威力を発揮したかは不明ですが、11世紀初頭の製造法を裏付ける証拠になっています。

モンゴルが世界征服に乗り出すのは、それから約100年後のことです。

## ◆火薬伝播とイスラム商人

火薬の製造法の伝播に、イスラム商人が介在したことは、ほぼ確実です。モンゴルの西域征服に際して、イスラム商人は、進軍を誘導するなどの役割を果たし、後の「駅」における商業活動を担いました。イスラム商人の活動範囲は、東の中国から西の地中海沿岸にまで及び、12世紀段階の人類の活動範囲としては、群を抜いていました。

黒色火薬の主原料のうち、硝石は、イスラム圏で「中国の雪(thalj al-Šīn, snow of China)」と呼ばれました。アンダルシア生まれの科学者イブン・アル＝バイタール(Ibn al-Baitar 1197 - 1248)が、13世紀中頃に著した『薬草集』にその名称記述があり、イスラム商人の呼び名だったと思われます。モンゴルが東ヨーロッパに侵攻し、リーグニッツの戦い(Schlacht bei Liegnitz 1241年)に勝利した時期です。

## 人工硝石

## ■3つの方法

人工的に硝石(硝酸カリウム)を作る方法は、3通りあるとされています。

## 1. 古土法

天然硝石を含む古土や糞尿土などを集めて、煮詰めるなどの処理で精製する。

## 2. 培養法

アンモニア( $\text{NH}_3$ )から化学反応で硝酸カリウムを作り、精製する。加賀藩が五箇山で精製した「塩硝」の製造法は、極秘事項だったとされる。

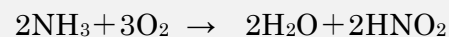
## 3. 硝石丘法(ヨーロッパ式)

主に人尿に含まれるアンモニアから、化学反応で精製する。造成された広大な硝石丘に人尿をまいて土中に浸み込ませ、硝酸カリウム生成後、土を煮詰めるなどの処理で結晶を作る。民営が多かった。

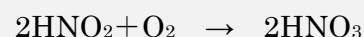
## ■耐え難い悪臭との戦い

アンモニアからの人工硝石の精製は、必然的に耐え難いほどの悪臭を伴います。

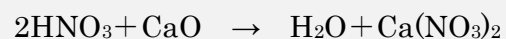
1. アンモニアと空気中の酸素の結合⇒水と亜硝酸の生成



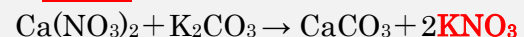
2. 亜硝酸と酸素の結合⇒硝酸の生成



3. 硝酸と草木灰(酸化カルシウム)の反応⇒水と硝酸カルシウムの生成



4. 硝酸カルシウムと腐敗土中の炭酸カリウムの反応⇒炭酸カルシウムと硝酸カリウムの生成



機密機関にせよ、利益目的の民間機関にせよ、戦争目的の軍需品生産に、悪臭に耐えながら携わった人々がいたことは、紛れもない事実です。彼らの労働環境は、お世辞にも良いものだったとは思えません。

彼らが、彼ら自身の生計を支えるためにその労働に携わったとしても、それを容認して良いのかどうかは、極めて今日的な問題です。軍需品製造は重要な生活基盤だから、軍需産業は許される。その論理の究極の到達点が「人類壊滅」ということは、誰もが知っていることです。

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

当時のイスラム圏では、薬としての硝石を知っていても、火薬製造法までは知らなかった模様です。というより、初期モンゴルの火薬兵器は、油脂で燃やす火薬入り弾か、油に火薬を混ぜた火槍などで、火薬は脇役に近かったと考えられます。世祖クビライは1271年（中国歴・至元8年）、マムルーク朝から技術者アラー・ウッディーン（Ala al-Di 阿老瓦丁？ - 1312）とイスマーイール（Ismail 亦思馬因？ - 1274）を北京に迎え入れました。大型投石兵器マンジャニーク（回回砲）の技術を習得するためでした。

火薬が爆発的に炸裂する砲弾（いわゆる爆弾）は、1274年（文永11年）のモンゴル日本襲来で使われた「てつほう」に、初歩的な痕跡があります。海底探査の遺物から、火薬と金属片などを仕込んだ球状の砲（直径・約14cm「震天雷」か）が発見されました。導火線に火を点けて何らかの方法で飛ばし、炸裂させたと考えられています。『八幡愚童記』には、「鉄砲ヲ放セハ 鳴声唱立シク響ケハ 心モ迷ヒ 肝魂モ消忙然トシテ 東西ヲ失フ」とあり、轟音による威嚇兵器だったことが伺えます。投擲兵器（手榴弾）と思われますが、

回回砲で飛ばした可能性もあります

一方、イスラム圏では1300年頃に、「マドファ」と呼ばれる火薬式銃砲が開発されました。砲筒に火薬を詰め、その上から砲弾を入れて密閉し、外部から点火して砲弾を飛ばす兵器です。1310年のイスラム文書に、火薬配合比を「硝石：木炭：硫黄＝10：2：1.5（約7.4：1.5：1.1）」とする記述があるようです。操作に危険を伴うことも、認識されていました。十分な発射力を持ち、危険を伴う黒色火薬の製造法が、14世紀初頭にはイスラム圏に伝わったことを示しています。

## ◆ヨーロッパにおける火薬の「発明」

ヨーロッパでは火薬を、羅針盤と活版印刷術と並ぶ「ルネサンスの三大発明」の一つとして来しました。今日の歴史学では、そのすべてを中国起源とする見方が大勢を占め、かつての伝説は、ほぼ覆っています。

ヨーロッパ伝説による火薬の発明者には、イギリスのカトリック司祭で科学者のロジャー・ベーコン（Roger Bacon 1214 - 1294）、南ドイツのフランシスコ会（Ordo Fratrum Minorum）の修道僧ベルトルト・シュヴァルツ（Berthold Schwarz 生没年不詳）の名が挙げられます。ロジャー・ベーコンの知見は、イスラム書籍に学んだ部分が多いとされています。硝石と硫黄をほとんど産出しないイギリスでは、黒色火薬の製造は、ほぼ不可能だったと思われます。仮に発見していても、『武経総要』より2世紀以上も後です。

ベルトルト・シュヴァルツの伝説は、錬金術師でもあるシュヴァルツが、薬剤の調合中に予期しない発火現象が起こり、火薬を発見したとするものです。1359年のこととされています。イスラム圏ではすでに、火砲の使用が始まっていたため、南ドイツのフライブルク（Freiburg im Breisgau）に、ヴェネツィア（ヨーロッパ市場の火薬の流通をほぼ独占）経由で硝石と硫黄が、流入していた可能

## ■マドファ（ヨーロッパ式の写本）



出典：ウィキペディア／マドファ  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lgehumble\\_1400.jpg#file](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lgehumble_1400.jpg#file)  
 ※ドイツの軍事技術者 Konrad Kyeser による1400年頃の写本



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

性があります。近年、確証性が極めて乏しいことから、シュヴァルツなる人物は存在しなかった、とする見解もあります。しかし、火薬の知識があったかどうかは別として、シュヴァルツ的人物が、火薬の調合を自力で成功させた可能性は残されています。

いずれにしても、ヨーロッパでの黒色火薬の製造は、ドイツで始まったと思われます。1340年代にアウブスブルク（Augsburg）などに火薬製造所が作られました。天然硝石が希少品のため、人工硝石を精製するための大規模な硝石丘が、1378年にドイツのニュルンベルク（Nürnberg）に作られたとされています。しかし、低温多湿なヨーロッパの天候条件と精錬技術の未熟さから、低品質品が多かったようです。硝酸カリウム（ $\text{KNO}_3$ ）に硝酸ナトリウム（ $\text{NaNO}_3$ ）と硝酸マグネシウム（ $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ ）が混入し、水分吸収率が高まるため、使い物にならない火薬の割合が高かったとされています。

にもかかわらず、火薬需要の高まりから、火薬製造所は全ヨーロッパに広がり、15世紀に入ると、兵器の刷新が始まりました。

## ◆火薬伝播の世紀

ここまでの考察から、中国で発明された黒色火薬は、モンゴルを介して、次のように広

まったと考えられます。

## 1. モンゴル ⇒ イスラム圏

硝石（中国の雪）が13世紀中頃に西アジアへ伝わり、火薬の製造法は、13世紀末から14世紀初頭に伝わった。

## 2. イスラム圏 ⇒ ヨーロッパ

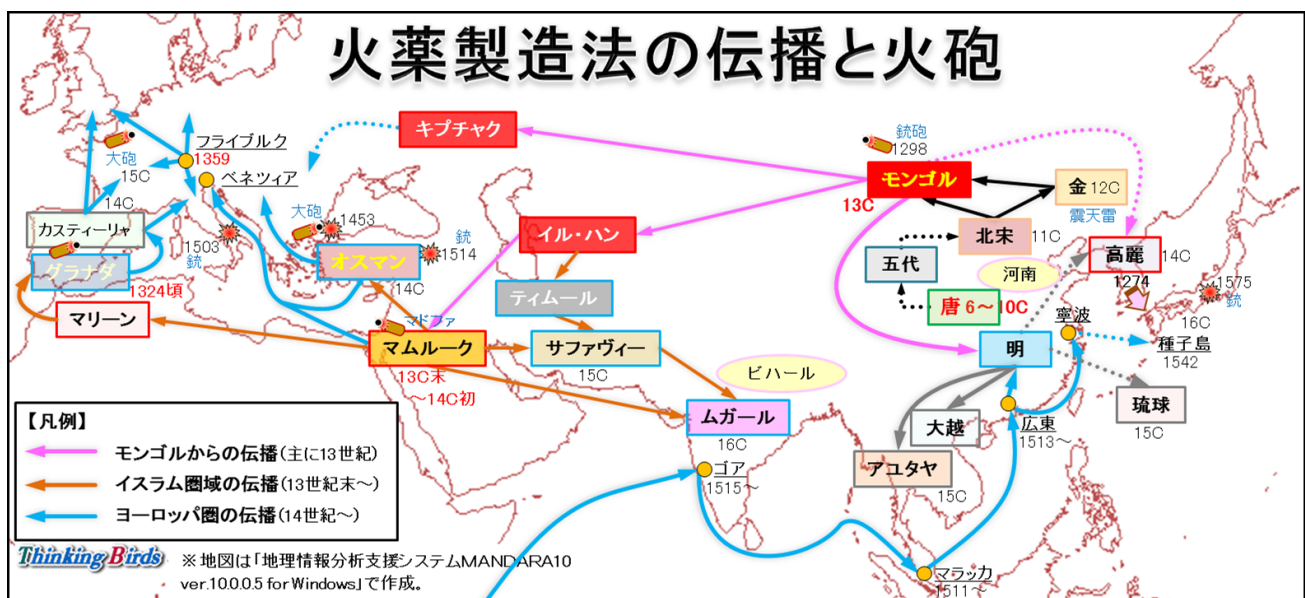
同じ頃から火薬兵器開発があり、戦闘現場（対十字軍戦）で使われ、火薬の存在が知られるようになった。

『アラブから見た十字軍』によると、十字軍勢力が拠点としていたマルカブ（現在のシリア地中海岸。「マルガット城」とも呼ばれる）への1285年の攻城戦で、マムルーク朝（Dawla al-Mamālik 1250 - 1517）のスルタンは、火炎投射管や花火事業者を徴集して、城を取り囲んだとしています。全7基の弩砲（どほう）を配備したとあり、13世紀末のイスラム勢力による火薬使用を伺わせます。

## ●鉄砲が海を渡る

イ

スラム圏で開発された「マドファ」は、基本的に「火縄銃」の構造と相似しています。火薬を詰めた筒に弾丸を入れ、外部から火薬に引火して発砲する。この構造を大型化すれば大砲になり、小型化すれば「火縄銃」になります。



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

その「火縄銃」は、「マドファ」の開発から約 170 年後に原型が現れ、さらに 30 年後の 16 世紀に、本格的に実用化され始めたと考えられています。約 200 年の歳月を要したことになります。そして、16 世紀中に、南北アメリカ大陸や日本を含む地域に、一気に拡散しました。まさに爆発的拡散と言えます。

そこで問題になるのが、「火縄銃」はどこで生まれたのかというお馴染みの課題です。

## ◆イスラム圏の火砲開発

火薬式金属銃砲の最新の物証は、モンゴルで発見された 1298 年（中国歴・大徳 2 年）製の銃砲です。砲弾が火薬入りかどうかは不明（入れていれば砲内で爆発し、かなり危険）ですが、砲の原型は、砲口から火を噴くギリシャ砲（いわゆる火炎放射器）にあると思われます。ギリシャ砲は、イスラム圏では既知の兵器で、その使用法と製造技術は、イスラム勢力を介してモンゴルに伝わった、と考えるのが妥当です。

「マドファ」が登場するのは、その銃砲とほぼ同時期の 1300 年頃です。「マドファ」は、中国製「天震雷」のような、火薬で炸裂する砲弾を発射するには、危険すぎたと思われます。石などの重い固形物を火薬で飛ばし、高速で飛翔する弾丸の威力で、建造物などを破壊する対物兵器と見るのが妥当です。火薬式の投石兵器（マンジャニーク）で、大砲の原型と言えます。

イスラム勢力が、キリスト教勢力に対する戦闘で、大砲に類似する兵器を使った確実な記録は、1320 年代です。イベリア半島南端部のアル＝アンダルス（Al-Ándalus）と呼ばれる一帯を領有していたグラナダ王国／ナスル朝（Reino de Granada/ La dinastía Nazarí 1232 - 1492）が、相互共存からレコンキスタ（旧西ゴート領再征服運動）に転じたカスティーリャ（Castilla）軍に対して使用したとするものです。ジブラルタル海峡に

面したアルヘシラス（Algeciras）攻防戦などで、敵陣破壊兵器として威力を発揮したようです。西サハラ一帯を勢力圏としていたマリーン朝（Sultanato benimerín 1196－1467）が、グラナダ王国支援で送り込んだ兵器とされています。大砲の洗礼をヨーロッパで早い段階で受けたのは、後のスペインでした。

その後、小アジアで勢力を拡大したオスマン・トルコは、火薬兵器を増強し、1453 年のコンスタンティノーブル包囲戦で大砲（ウルバン砲）を使用しました。この兵器は、東ローマ帝国領内の事業者が製造し、帝国が購入を見送ったため、トルコ側に渡ったとされています。その威力は、城壁に甚大な被害を与え、人的被害も大きかったとされています。

また、同時期から「イエニチェリ（Yeniçeri Janissaries 新しい兵隊）」と呼ばれる歩兵鉄砲隊が組織されました。その戦果は、1514 年にサファヴィー朝（Safaviyān 1501-1736 勢力圏は現在のイラン周辺）とアナトリア付近（現在のトルコ東部）で会戦したチャルディランの戦い（Battle of Chaldiran）で、顕著に現れました。鉄砲隊の活躍が勝敗を分けたと言われ、15 世紀後半の鉄砲の世界化を示す事例の一つになっています。ちなみに、織田信長（1534 - 82）の鉄砲隊が勝敗を決した長篠の戦いは、同世紀中の 1575 年（天正 3 年）に起こりました。

なお、火砲兵器を組織的に増強し、「軍事革命（Military Revolution）」を推進したという観点から、オスマン・トルコを「火薬帝国（Gunpowder Empire）」と呼ぶことがあります。私たちは、その呼称には賛同しかねます。

## ◆ヨーロッパの火砲開発

ギリシャ砲の伝統を持つヨーロッパでは、大砲の製造技術は、ローマ時代からあったと言われています。枠組みとしての砲筒に「マドファ」の仕組みを組み込めば、すぐにでも

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

火砲は完成します。手こずったのは火薬製造法の習得で、枠組みとしての大砲ではなかったはずです。

ヨーロッパにおける火砲の開発競争は、基本的には、その大型化を目指す方向で進展しました。城を一撃で破壊するような大砲を製造し、白兵戦はできる限り避ける。確かにそれは、一つの効果的戦法です。しかし、戦場での大砲配備には人手を必要とし、兵器としての価値は不十分でした。中には、運搬できないほどの巨砲があり、移動台車が重量で壊れ、実戦配備できなかったという逸話があるように、現実的な兵器の域を逸脱した代物がありました。要するに「すごい大砲」は、すごいのは見栄えだけで、実戦ではほとんど役立たずだったこともあるのです。

火砲の実戦配備は、百年戦争 (Hundred Years' War 1337 - 1453) の頃からあったと言われています。現在のフランス東部からフランドル (Flandre) 一帯を勢力圏としたブルゴーニュ公国 (État bourguignon 843 - 1477) が、先進的に進めました。百年戦争には、ヴェネツィアとジェノヴァが深く関わり、地中海経由で流入した火砲技術が、フランドル (現在のベルギー) に集積したと考えられます。ブルゴーニュ公国は、ある意味では軍需産業国化して行ったと言えます。ヨーロッ

パで最初の効果的な大砲の使用は、1382年のヘントとブリュージュの都市間戦争で、ヘント軍によるとされています。

その後、百年戦争のいくつかの場面で、大砲は使われ続けました。巨砲の導入は、イギリス軍が積極的に進めますが、同戦争の終結を決定づけたギエンヌ (Guienne) の領有権をめぐる 1453 年のボルドー (Bordeaux) 攻防戦では、フランス軍の大砲が、その勝敗を左右したと言われています。

## ◆「鉄砲」への道のり

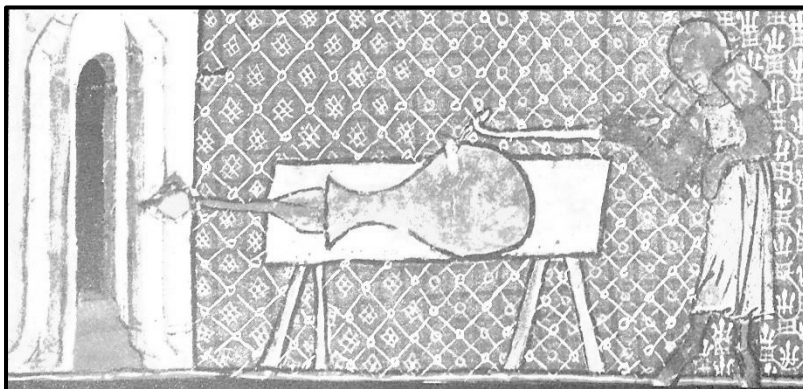
一人で携行可能な銃の原型は、言うまでもなく弓矢です。洋の東西を問わず、弓矢は至る所で発達し、戦争時の主要な兵器になりました。しかし、その弓に引き金を装着し、弓の飛翔速度を高める装置は、あちこちにあったとは言えません。

中国では、強力な弓矢という意味の「弩弓 (どきゅう)」を放つ仕掛けとして、「懸刀 (けんとう)」と呼ばれる引き金が、古くから使われていました。銃身に相当する台座に置いた矢を、留め金式で留めた弦で飛ばす弓で、その留め金を外す引き金が「懸刀」です。一方、ヨーロッパでは、クロスボウ (crossbow) と呼ばれる弓が古くから使われていました。基本的な仕掛けは、「弩弓」と同じです。引き金 (trigger) に相当する装置を、備えて

いました。

「火縄銃」は、弦に代えて黒色火薬を、弓に代えて鉄球を使い、引き金式で火薬に着火して、鉄球を飛ばす対人兵器です。マスケット (Musket) と呼ばれる銃種の一つで、火縄で着火する方式から「マッチロック式」とも呼ばれます。銃開発史的に見ると、15 世紀に試行品が出始め、16 世紀に本格的に実戦配備されて、世

## ■ヨーロッパ最古の大砲の記録図 (1326 年)



出典：ウィキペディア／大砲

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:EarlyCannonDeNobilitatibusSapientiiEtPrudentiisRegumManuscriptWalterdeMilemete1326.jpg>



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

界中に一気に拡散しました。その拡散範囲には、南北アメリカや日本が含まれています。

「火縄銃」は、一品生産で統一規格がないため、厳密に言えば全て別物です。技術融合と改良が、ユーラシア規模で起こったと考えられ、その発祥については、さまざまな説が唱えられています。日本に伝わった銃は、東南アジア起源の「マラッカ式」と呼ばれています。ここでは、「火縄銃」の足取りについて、ヨーロッパ史の視点から考えてみます。

## ◆火薬改良と着火法

「火縄銃」が可能になった背景には、黒色火薬の改良があったとする説があります。初期段階の黒色火薬は、ヨーロッパでは「サーペンタイン (serpentine)」と呼ばれ、粉状に精製するものでした。精製の劣悪さもあって発火力が弱く、火砲は、その火力に対応して設計されたと言われています。しかし、15世紀に入ると、「コーニング (corning)」と呼ばれる粒状黒色火薬が開発され、その威力が格段に増しました。湿気に強く、保存性が高いという特性があり、粒の大きさを変えることで、発火力の調整が可能になったと言われています。扱い方で事故リスクが高かった火薬が、製造段階から威力調整さえ可能になったことで、火薬知識がない歩兵が扱う小型兵器にも、活用できるようになったのです。

新型小型火砲（鉄砲）を、ヨーロッパで最初に導入したのは、ブルゴーニュ公国でした。1470年代初頭には、銃を装備した歩兵隊を編成したと言われています。しかし、この段階での銃は、点火式の携帯型小型砲筒に近いものでした。

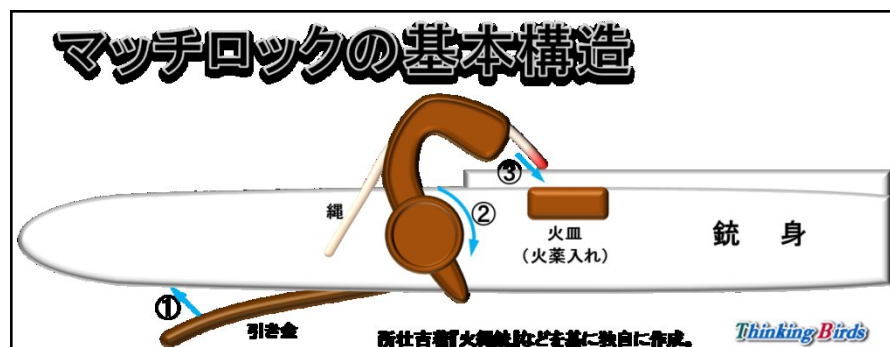
「火縄銃」の着火方式「マッチロック」は、1475年頃に、ドイツの錠前師が生み出したと言われています。幾多の改良を経て実用化さ

れているため、諸説があると思われますが、ヨーロッパ起源とするのが妥当です。この頃から、銃身の長い鉄砲の実用化が始まったと考えられます。ハプスブルク家 (Habsburg) の勢力下に入っていくスペイン、ネーデルラントでは、この技術の移植が起こったと思われます。「コーニング火薬」も改良され、スペインでは、ボール状に丸めた火薬が使われました。火縄で着火する火皿用火薬が「サーペンタイン」、砲弾の発射用火薬が「コーニング」という構造です。

ヨーロッパではその後、火縄を使わない着火方式が開発されました。火打石方式と言えるもので、1505年にニュルンベルクで考案された「ホイールロック式 (wheellock) = 旧式百円ライターのように、金属で石を擦った火花で着火」、その発展形の「フリントロック式 (flintlock) = 火打ち式火花で油性布などに着火し、火薬に引火」が、1550年前後に生まれました。日本に伝来した「火縄銃」は、ヨーロッパ史的には、二世代前の着火方式による銃になります。

## ◆火砲需要が高まる中で

ヨーロッパで開発された「火縄銃」と日本で普及した「火縄銃」のちがいは、火薬への着火速度にあると言われています。ヨーロッパ式は、バネで離れた状態の火縄を引き金でゆっくりと火薬に近づける方式で、「緩発式」と呼ばれています。それに対し、日本で普及したのは、ロック解除に似た方式で、引き金を引くのとほぼ同時に着火できるため、「瞬発式」と呼ばれています。この「瞬発式火縄



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

銃」は、ポルトガル人がアジアへの航路開拓を進める過程で、改良品として生まれた可能性が高いと考えられます。その東西産品の一大接点だったのが、マラッカです。

「マラッカ式火縄銃」が、実際にマラッカで作られたかどうかは不明です。ポルトガル側の日本への鉄砲伝播の記述に従えば、シャムから中国船で漂流したとあり、1542年時点ですでに、中国船に鉄砲が配備されていたか、商材として積み込まれていたことになります。六横島・双嶼を拠点にした、いわゆる密貿易が、最も盛んに行われていた時期と重なっています。

この時期の南西アジアは、オスマン・トルコのスレーマン1世（Süleymân I 1494 - 1566）が最大版図を築いた時代で、軍事強化を図り、積極的に対外遠征をしていました。また、ムガル帝国（Mughal 1526 - 1858）の草創期に当たり、火砲に対する軍事需要は高かったと言えます。ポルトガルは、インドのゴアにある兵器工廠で、この情勢に対応していたと言えます。

私たちの考えでは、ポルトガル人が優先したのは、「佛郎機（フランキ）＝大砲」です。その製造技術は、16世紀初頭の段階で、火砲本家の中国を上回る水準に、高度化していたとみなせます。実際問題、大陸での戦争では、鉄砲隊の編成が進められたとはいえ、攻城戦向きの大砲は、まだまだ重要でした。「火縄銃」は、発砲時の不発、あるいは暴発、命中率の低さ、降雨時に使用不能など、欠点如山ほどありました。発射に成功すればよし、という程度に認識された武器だったと思われます。そのため、独自の火砲を大量に持つ中国（明）は、「火縄銃」の購入を敬遠しがちでした。日本では、大砲より鉄砲を重宝がり、改良と高度化を進めますが、その事態は、ポルトガル人にとっては、想定外だったかもしれません。

## ◆日本史における火薬伝来問題

日本における火薬の初見は、前述のとおり1274年（文永11年）のモンゴル襲来時に使われた「てつほう」です。私たちは、木造艦船で運搬したこの兵器は、航海中に火薬が湿気を含み、不発弾か、燃焼効率が悪い砲弾の割合が高かったと考えています。

日本では、この時点から268年後の1542年（鉄砲伝来）まで、火砲使用の記録は残されていません。中国では、元を滅ぼした明が、大量の火砲を製造して実戦で使用、東南アジア方面にも、明式火砲が伝播したと言われています。朝鮮半島の高麗では、崔茂宣（チェ・ムソン 1325? - 1395）が、1370年代に火薬製造法を習得し、1380年代には火砲装備の水軍が、「前期倭寇」を撃退したとしています。その著書とされる『火薬修練之法』の内容は、私の所では不明です。また、琉球王国にも火薬があり、1466年（文正元年）に足利義政に謁見した使節が、「退出之時於惣門之外辺故放鉄放（門外で祝砲?）」とあります。日本だけが、火薬兵器の攻撃を体験しながら、270年近い「無知の時代」を過ごしました。

日本には、天然硝石がなく、大陸勢力が火薬製造法を極秘としたため、それが伝わらなかった可能性はあります。しかし、朝鮮半島や中国大陆との交易は、室町時代を通して行われ、「倭寇」の活動もありました。特に朝鮮半島では、1392年に高麗から李朝への王朝交代があり、技術流出の機会がなかったとは言えません。また、日本産硫黄は、宋代から交易品の一つで、中国や朝鮮半島に渡り続けました。にもかかわらず、270年間も、火薬の製造法を知らなかったのでしょうか。

東アジア式火砲の一つに、先端が尖った筒砲を飛ばす、いわゆるロケット砲（Rocket artillery）があります。上述の崔茂宣の火砲も、それに準じていたと考えられています。導火線に着火し、発射用火薬に引火すると紙

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

筒砲が飛んで、着地時に本体火薬混合物が燃える仕掛けです。市販打上げ花火のロケット砲と、構造は全く同じです。今日のロケット弾のような爆破力はなく、燃えるのは油だったと思われます。16世紀の渡来ヨーロッパ人が、中国産火薬の品質を「礼砲程度にしか使えない」と評した以上とは考えられません。

その攻撃を、対馬や九州地方の「前期倭寇」が、1380年代に高麗水軍から受けたというのですから、鉄砲伝来の70年ほど前に、火薬の存在を再び認識したことになります。日本史上の1380年代と言え、室町幕府の権威が最も高まった足利義満(1358 - 1408)の時代です。九州では、明の太祖が「日本国王」とした南朝方の懐良親王(1329 - 1383)が没し、南朝勢力がほぼ駆逐された時期です。この結果、北朝方の大内氏が勢力を拡大、モンゴル侵攻に抗した家系の小武氏も、日朝、日明の交易を担いました。この時期に火薬製造法が、日本に伝わった可能性はあります。しかし、劣悪品しか作れなかったと考えます。

## ◆「鉄砲大国」をめぐる火薬事情

日本では、種子島への鉄砲伝来から時を経ずして、怒涛のごとく、国内で量産が始まりました。織田信長(1534 - 82)が1575年(天正3年)の長篠の戦いで、組織的鉄砲戦をして以降、あらゆる戦場で鉄砲が使われました。当時の日本は、世界有数の鉄砲保有国になって行ったとされます。武器商として堺商人は、輸入火薬を取り扱い、戦国大名に売りさばきました。一方、長篠の戦いに先んじた1570年頃から、五箇山(現在の富山県南砺市)などで、人工硝石の製造が始まったとされています。戦国末期の日本の火薬事情は、270年の空白から一転して、めまぐるしく、しかも、加速度的に動き出したことになります。

鉄砲保有量が一気に増えた日本で、硝石をどのように入手していたかは、未解明の領域です。堺商人が関わっていたことは確かです

が、ポルトガル人やスペイン人が介在する東アジア市場で、希少品の硝石を十分に入手できる力を、堺商人が持っていたのか。堺の没落後、加賀の五箇山などで生産された人工硝石は、果たして国内需要を満たす生産力があったのか。豊臣秀吉の朝鮮半島出兵時に使った鉄砲(鳥銃)の大量の火薬は、どこから入手したのか。不明な点は多いのです。

黒色火薬は、殺傷力などない爆竹程度のものであれば、簡単に作れるように思えます。糞尿(肥溜め)から硝石を採取して精製し、硫黄と木炭を適切に配合すれば、黒色火薬になります。忍者が「火遁(かんとん)の術」と称した煙幕を張る「煙玉」は、口承秘伝だったとしても、さほど難しい技術ではないと思われます。汚物から硝石を採るという発想があれば、十分に可能で、当時の日本でその発想を持てたのは、忍者くらいだったでしょう。

黒色火薬の日本伝来は、中国や朝鮮半島からの流入民や連行者が、その境遇に甘んじながら、自衛のためにせよ、領主からの強制にせよ、陰ながら作っていた可能性はあります。その時期は、早くも1380年代。しかし、その品質は悪く、湿気を運びやすい日本の気象条件から、せいぜい「シューッ」と音を立てながら、煙を出す程度の代物だったでしょう。東福寺の『碧山日録』によると、1468年(応仁2年)の細川方の装備に、「飛砲火槍」があったとされています。その効力は、小型花火に毛が生えた程度か、湿気って使い物にならなかったと思われます。品質向上と防湿対策の知見が、どうしても必要だったはずですが、

それでも、その下地があつてこそ、銃という兵器と出会って以降の火薬製造が、可能になったと思えます。日本の火薬製造法記述は、足利義輝(1546 - 1565)が1558年(永禄元年)に、長尾景虎(上杉謙信)に宛てた書状が現存最古とされています。1550年代頃から日本の火薬製造は、実用化に動き出し、そ



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

の後「日本の硝石は品質が良い」となります。硝石未産出の日本で、下地もなしに、その実現は困難だったと思われます。

## ◆火薬を「三大発明」にした者たち

私たちは、応仁の乱から桶狭間の戦いまでの約 100 年間を、「空白の 100 年」と呼んでいます。その 100 年間の日本史は、記録の空白が著しく、未解明の領域が多いのが実情です。鉄砲の伝来しかり、火薬製造法の伝来についてもしかりです。

安土・桃山期 (1573 - 1603) に「鉄砲大国」になった日本は、火薬製造について、各大名が極秘裡に進めたと考えられます。前述の加賀・前田家の五箇山は、江戸時代を通した硝石産地で、その実態について研究されています。前項で引用した市立米沢図書館蔵の『武経總要』の重刻本は、1599 年 (中国暦・万暦 27 年 慶長 4 年) の発刊本です。上杉氏の所蔵本で、いつ、どこから入手したかは不明です。江戸時代初期と考えるのが妥当ですが、上杉氏は 1550 年代頃 (謙信時代) から、火薬の自家製造を試みた可能性があるのです。

豊臣秀吉 (1537 - 1598) が朝鮮を侵略した「文禄・慶長の役＝壬辰倭乱 (1592 - 1598)」で、豊臣兵が使った鉄砲 (鳥銃) は、李朝方の火炮を圧倒したと言われています。瞬発性に優れた鳥銃の威力に、東アジア伝来の火炮は、太刀打ちできませんでした。ここで言わ

れるのが、日本人の技術力の素晴らしさのような手前味噌の言説です。しかし、私たちは、そのような立場には立ちません。「火縄銃」の原点はヨーロッパにあり、そのヨーロッパの技術を取り入れ、改良することで、東アジア伝来に勝ったにすぎません。逆に言えば、中国発祥の黒色火薬と火炮は、ヨーロッパへの伝播から 2 世紀の間に、本家に勝る品質と性能を持つに至ったことを意味するのです。

私たちがこの項の主眼としたのは、火薬の軍事転用がもたらした「軍事革命」の歴史ではありません。また、火薬と鉄砲の歴史をマニア的に記述することでも、新たな鉄砲伝来説を唱えることでもありません。

火薬は、「世界三大発明」の一つとされます。薬として開発された火薬を、単なる威嚇の範囲を超えて、殺傷兵器の一部としたヒトの技術が、「三大発明」にしたのです。

火薬の軍事転用は、それを集約的に導入した権力が、集権国家⇒近代国家を生んで行ったとする「軍事革命論」に繋がります。私たちは、近代国家と軍備の関係を軽視するつもりはありませんが、過大視はしません。江戸時代を通して「火縄銃レベル」の軍備だった日本には、「近代の要素」がなかったことになるからです。火薬の歴史は、ある意味では極秘軍事技術の歴史です。それは、火薬という薬物の悪用の歴史にほかならないのです。

## ■明代に描かれた鉄砲の図 (文禄・慶長の役＝壬辰倭乱の後)



出典：趙士禎 (明) 撰、英平吉郎ら (江戸) 版『神器譜』5 卷 (文化 5 年・1808 年) 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2567964>

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## ●メディカル・ミステリー・ツアー

ポ

ルトガルのアジア交易品は、用途として二つに大別できます。

①ヨーロッパ向け産品、②アジア域内の金融産品。アジア域内の金融産品は、火砲などの売買で得た金銀が挙げられます。それを元手（Capital）に転売を含めた取引をし、「香辛料（Spices, Especiaria）」などのヨーロッパ向け産品を入手しました。後述のスペインによる中南米産銀と異なり、大量の銀をヨーロッパに持ち込んで「価格革命」を引き起こすような金融産品はなく、補完的流通が多かったと考えられます。

ここで取り上げるのは、ポルトガルがアジアからヨーロッパに送った「香辛料」についてです。イエズス会（Societas Iesu）の関与があったとされますが、キリスト教の布教活動とは切り離し、モノとしての「香辛料」について考えてみます。

なお、ここでいう「香辛料」とは、現行（2006年10月3日改正）の厚生労働省が定義した「スパイス」と「ハーブ」とし、主に「スパ

イス」について取り上げます。また、「香辛料」の薬効等についての記述は、歴史記述のための補完的記述で、その効能や毒性を実証的に解説したものではありません。私たちは、薬理学的な専門知識を有していないことを、あらかじめお断りしておきます。

## ◆サーザン・ペッパーズ

「香辛料」の歴史は古く、ヨーロッパでも古代から知られていました。アジア産のものは、地中海交易の主要産品の一つで、中世期にはヴェネツィアとジェノヴァが、イスラム圏を介して入手した歴史がありました。希少品だったため、ヨーロッパでは、特定の階層の人々しか入手できない高価な品でした。

下表は、16世紀後半のポルトガル交易で、ロンドン市場が購入した「香辛料」とその数量、そして、アジアでのそれぞれの産地を表しています。ヨーロッパでの「香辛料」の輸出先は、ロンドン市場に限りませんが、販売品の傾向が伺える史料です。それに対して、各産品のアジア産地が下表右側です。インドから東南アジアの東端まで及び、その範囲の

## ■ロンドンのポルトガルからの香辛料輸入量

| 品名   | 1574～1575年 | 1575～1577年 |
|------|------------|------------|
| 胡椒   | 1,006 キンタル | 4,500 キンタル |
| 丁子   | 2,400 アローバ | 5,200 アローバ |
| 肉桂   | 1,500 アローバ | 4,500 アローバ |
| ナツメグ | 1,000 アローバ | 1,100 アローバ |
| メース  | 500 アローバ   | 400 アローバ   |
| 砂糖   | 712 キンタル   | 456 キンタル   |
| 糖蜜   | —          | 6 樽        |
| 生姜   | 1,800 アローバ | 6,600 アローバ |
| 石鹼   | 186 キンタル   | 44 キンタル    |

※筆者注）1 キンタル＝4 アローバ（100 ポンド＝約46kg）と推測できる。

【出典】山田義裕著「16世紀のポルトガルのインド交易とその船隊－奇書：“船隊備忘録”」。同論考中の大英博物館史料の記述がある挿入表から香辛料を抽出、品名順を入れ替え、金額を除いて数量のみを記載した。

## ■ポルトガル交易のアジア物産（16世紀末頃）

| 品名   | 産地名             |
|------|-----------------|
| 胡椒   | マレー、交趾シナ（ヴェトナム） |
| 丁子   | マルク（モルッカ）諸島、マレー |
| 肉桂   | セイロン（スリランカ）     |
| ナツメグ | バンダ（諸島）＝インドネシア  |
| メース  | バンダ（諸島）＝インドネシア  |
| 砂糖   | ベンガル            |
| 安息香  | シャム（タイ）         |
| ウコン油 | シャム（タイ）         |
| 沈香   | 交趾シナ、チャンパ（占城）   |
| 白檀   | チモール            |
| 竜脳   | ボルネイ（ブルネイ）      |

【出典】岡美穂子著「近世初期の南蛮貿易の輸出入品について－セビーリャ・インド文書館所蔵史料の分析から－」。同論考の挿入表を産地名別から商品名別に変更、香辛料を抽出し、地名に補足を加えた。

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

広さを知ることができます。すべて直接航海での入手品かどうかは分かりませんが、各産品の産地が認識されていたと言えます。

「香辛料」の中で最も取引量が多かったのは、言うまでもなく「胡椒 (peppers)」です。インド南西部のマラバル (Malabar) 地方が原産で、16 世紀段階では、東南アジアを含めて栽培が進み、地場のほかイスラム圏や中国でも消費されました。調味料であると同時に健康妙薬で、下表のような科学的分析に基づく効能があります。これらの科学的知見は現代の認識ですが、健康リスクがまれにあるとはいえ、ほとんど無害なため、スパイスの主様として、大量に売買されました。

明末に李時珍 (1518 - 1593) が著した『本草綱目』には、次のような記述があります。

「(恭曰) 胡椒生西戎」

⇒ 恭によると、胡椒は西戎が原産

「(氣味) 辛大温無毒」

⇒ かなり辛い香り、火照るが毒なし

「(主治) 下氣温中去痰除臟腑中風冷

・ ・ (唐本) ・ ・ 去胃口虚冷氣宿食不消

・ ・ (李珣) ・ ・ 殺一切魚肉鼈单毒」

⇒ 効能は痰を取り内臓の冷えを除く

唐本によると、口から胃の冷氣を除き、食が進む

李珣によると、魚肉等の毒封じ

「(珣曰) 多食損肺令人吐血」

⇒ 珣によると、多食は肺に悪く、吐血する人がある

(『本草綱目 果部 第三十二巻 果之四』より)

この認識とヨーロッパの認識との乖離が、どの程度あったかは分かりません。しかし、

## ■ 「胡椒」の概要と 16 世紀の主産地

| 品 名             | 胡椒 (コショウ)<br>(英 : Pepper)<br>(葡 : Pimenta)                                                                                       |                     |              |  |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
|                 | 黒胡椒 (Black Peppers)                                                                                                              | 白胡椒 (White Peppers) |              |                                                                                       |
| 植物分類            | コショウ科コショウ属の蔓性植物                                                                                                                  |                     |              |                                                                                       |
| 製 法             | 果実を天日乾燥                                                                                                                          | 果実を塩水漬けし皮むき乾燥       |              |                                                                                       |
| 原 産 地           | インド南西部 (マラバル地方)<br>＝ポルトガルがゴアに拠点建設 (1510)                                                                                         |                     |              |                                                                                       |
| 主な用途            | 薬味調味料                                                                                                                            |                     |              |                                                                                       |
| 効 能             | 辛味成分の「ピペリン」が、唾液と胃液の分泌を促し、消化促進や殺菌効果を持つ (抗がん作用、抗酸化作用、止瀉作用等がある)。保存食の防臭・防腐効果。                                                        |                     |              |                                                                                       |
| 効能リスク           | 「ピペリン」含有量の多い健康食品などの多量摂取は、服薬剤との相互作用などにより、健康被害をもたらす可能性がある。                                                                         |                     |              |                                                                                       |
| 16 世紀の<br>主要生産地 | マラバル ⇒ 生産量は最多 (ポルトガル購入先の大半を占める)<br>スマトラ (ペディル、パセ) ⇒ 生産量はインドにやや劣り、品質は劣る<br>マレー半島 (ケダ、パタニ) ⇒ 生産量は少ない<br>ジャワ (スンダ) ⇒ 生産量は少ないが、品質が良い |                     |              |                                                                                       |
| 主要交易地           | カリカット／ゴア                                                                                                                         | マラッカ＝P 占領 (1511)    | 交趾 (ヴェトナム北部) |                                                                                       |
| 主な現地購入者         | イスラム商人                                                                                                                           | 華人船                 |              |                                                                                       |
| 備 考             | ヴェネツィア商人が、インド産コショウを「graines du paradis (天国の粒・種子)」と呼んだとする見解がある。“graines du paradis” はアフリカ・ギニア産香辛料を指すとも言われ、当時の混同呼称なのか、実態は定かではない。   |                     |              |                                                                                       |



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

理屈づけの差異があるにせよ、「胡椒」の効能が認識され、それを求めていたことは事実です。李時珍は、「胡椒」利用の当時の現状について、次のように付け加えています。

「胡椒今南番諸國及交趾滇南海南諸地皆有之・・・中國食品為日用之物也」

⇒ 胡椒は今、南蛮諸国やコーチン（ヴェトナム）、南海の地におしなべてある。

中国食でも日用の品にするのが望ましい。

（『本草綱目』同前項）

ポルトガルがインド航路から入手した「胡椒」は、ヨーロッパ市場での希少品という位置づけを、やや緩和したと考えられます。ヨーロッパでの「胡椒」年間消費量は、15世紀末の約1,600トンから、16世紀末までに倍増（約3,000トン）したとする試算があります。特に北ヨーロッパ市場に出回ることによって、後のオランダやイギリスの香辛料争奪戦に、火を点ける要因をなしたことは否めません。裏返せば、当時のヨーロッパは、それほどまでして薬効が期待できる産品を、求める状況にあったと言えるのです。

なお、日本への「胡椒」の伝来は、奈良時代とされています。16世紀以降、ポルトガル人などの来航で、再び伝来しますが、限られた肉料理しかなかった日本では、江戸時代までは普及が限定的でした。一部の地域では「唐辛子＝胡椒」となるように、辛味を「唐辛子」や「ワサビ」から得る風習が、現在まで続いています。

## ◆デイ・トリッパーズ

病魔との戦いや健康に対する意識は、いわゆる悪魔祓いや長寿祈願のような、神仏に願う慣行とは別に、薬効のあるモノで治癒を図る試みが、古くから行われて来ました。「香辛料」もその一つで、地中海沿岸の南ヨーロッパ原産品には、「フェンネル（茴香 Fennel）」

や「マスタード（芥子 Mastered）」がありました。「フェンネル」の精油は、「エッセンシャルオイル（Essential Oil）」の一つです。その効能は多岐に及ぶとされ、ほぼ薬剤と同等でした。「近代医学（Modern medicine）」の発展は、ポルトガルの海洋航海時代からもう少し先（18世紀頃）になりますが、薬効産品としての「香辛料」は、ヨーロッパではある種の渴望品でした。

ポルトガルが取り扱った四大香辛料は、「胡椒」「クローブ」「シナモン」「ナツメグ」とされています。「胡椒」と「シナモン」は、南インドやスリランカ（セイロン島）など南アジアが原産地、「クローブ」と「ナツメグ」は、現在のインドネシア領のマルク（Maluku）諸島が原産地です。

南インドではイスラム商人の力が強く、ポルトガルが取引できたのは、全取引量の5%程度とする見方があります。東南アジアでは、中国商人（密売人）がこれに加わり、アジア全体のポルトガルの取引量は、16%程度とされています。「胡椒」以外は、原産地で活用されない原生植物で、ほぼ全収量が交易されたと考えられています。

マルク諸島原産の「クローブ」は、中国でも生薬の一つに数えられています。独特の香りが腐臭などを和らげることから、固形香味料のほか、「丁子油」として使われました。歯医者さんの香りとも呼ばれ、現在の歯科治療でも、麻酔薬などに利用されています。主な効能は、次頁表の通りです。

『本草綱目』には、「丁香（丁子香）」として、次のような記述があります。

「（恭曰）・・・出崑崙及交州愛州以南」

⇒ 恭によると、崑崙及びヴェトナム近郊以南で産出

「（氣味）辛温無毒」

⇒ 辛く、温感があり、無害

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

(主治) 温脾胃止霍乳・・諸腫齒疳虫  
 (「虫」は、「匿」の脚に「虫」二つ)  
 ⇒効能は、内臓を温め、母乳漏れ防  
 止・・諸々の腫れ、歯痛を止める  
 (附方) 暴心氣痛／小兒吐瀉／朝食暮  
 吐／婦人産難／唇舌生瘡／等  
 ⇒但し、気が荒れる、子供の嘔吐、  
 朝食を吐く、難産、唇や舌荒れ等  
 (『本草綱目 木部 第三十四卷  
 木之一』より)

マルク諸島は、ヨーロッパ人にとって極めて遠く、「クローブ」の希少性は、「胡椒」の比ではありませんでした。1518年のカリカットでの取引記録によると、取引価格は、同量当たりで、胡椒の2.6倍だったとされています。これは、原産地価格の30倍に相当し、マラッカに行っても10倍の値でした。原産地(アンボン Ambon)への航路開拓の旅は、この価格差の解消を目指し、現地取引するためだったと言えます。

しかし、「胡椒」と「クローブ」のちがいは、原産地のちがいだけではなく、「胡椒」が栽培作物なのに対し、「クローブ」は原生植物で、現地ではほとんど有用とされず、総生産量は「胡椒」の1/10程度、中国での需要もそれほど多くはありませんでした。当時のヨーロッパでは、ペストの原因は悪臭にある、と考えられています。強い香りの「クローブ」は、悪臭を退治するペスト予防薬としてもはやされたようです。

ポルトガル人は、それを求めて、リスクのある南海の旅をし、入手品を高価な希少品として、ヨーロッパに届けました。そして、後にはオランダが、その香辛料利権を独占したことで、世界史的な一時代を築きました。

「クローブ」がペスト菌に有効という医学的認識は、現代医学では無効です。その香りと麻酔効果に価値を見出し、病魔に効能があると信じ込まれたことは、多量摂取による副作用というリスクを伴いました。大きな利潤の裏で、ペスト予防効果などない薬の過剰摂

## ■「クローブ」の概要と16世紀の主産地

| 丁子・丁香（チョウジ・チョウコウ）<br>（英：Clove）<br>（葡：Cravo） |                                                                                                  |                              |
|---------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|
| 品 名                                         | 丁子（Clove）                                                                                        | 丁子油（Clove Oil）               |
| 植物分類                                        | フトモモ科チョウジ属のチョウジノキ                                                                                |                              |
| 製 法                                         | 開花直前の蕾を摘み乾燥                                                                                      | 花枝を蒸留して採取する油<br>（主成分はオイゲノール） |
| 原 産 地                                       | マルク諸島（インドネシア）                                                                                    |                              |
| 主な用途                                        | 香味料、口内殺菌剤、麻酔剤、芳香防臭剤、染色料（黄）                                                                       |                              |
| 効 能                                         | 強い芳香があり、口臭防止のほか、漢方生薬として古くから使われた。胃を温めることから、食欲増進、女性の月経不順などに有効とされる。口内殺菌や麻酔効果を持ち、医療用としても使われる。        |                              |
| 効能リスク                                       | 含有成分「オイゲノール」は、麻酔効果があり、魚などの水生生物には有害とされている。多量に摂取すると、体調不良やアレルギー反応を起こす可能性がある。妊娠中の女性や乳幼児の摂取は注意が必要という。 |                              |
| 16 世紀の<br>主要生産地                             | マルク諸島                                                                                            |                              |
| 主要交易地                                       | マラッカ＝占領（1511）／アンボン（マルク諸島）＝到達（1511）                                                               |                              |
| 主な現地購入者                                     | 華人船（ジャワ商人が介在か）                                                                                   |                              |



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

取が神話化したとすれば、恐らく健康には良くなかったと思われます。

なお、日本への「丁子」の伝来は、奈良時代頃とされています。しかし、ほとんど手に入らない希少品でした。江戸時代に「丁子油」の製造が始まり、食用よりも、香りを利用した刀剣の錆止め油や鬘（びん）付油として活用されました。

## ◆ハッピーネス・イズ・ア・ワームテイスト

ヒトの基本的な味覚（Basic tastes）は、「五味」とも呼ばれ、「甘味（Sweetness）」「酸味（Sourness）」「塩味（Saltiness）」「苦味（Bitterness）」「うま味（Umami）」で構成されています。ヨーロッパの伝統的な味覚は、「うま味」を除く四味が基本で、日本の池田菊苗（1864 - 1936）が発見したグルタミン酸によって、「うま味」が加わりました。しかし、アジア的味覚の歴史は古く、中国の五行説では「うま味」の代わりに、「辛味」を挙げています。また、インド医学のアーユルヴェーダでは、「辛味」「渋味」を入れた六味としています。いずれにしても、アジア的味覚の知見は、ヨーロッパより優れていまし

た。しかし、「香味（Flavor）」については、味覚として識別していませんでした。

味覚の問題は、ヒトの感覚表現だけに、感じ方に個人差があるほか、実際には多様な味を表す言語問題という側面があります。日本語には、ここまで挙げた味覚以外でも、「えぐ味」「雑味」「濃味」「薄味」「油味」「甘辛」「甘塩」「薬味」などがあります。しかし、「雑味」を「雑味」と感じるかどうかは、個人差があります。「シナモン」や「ナツメグ」の香りをどう表現し、それが好きかどうかは、まさに個人的な嗜好の問題と言えるのです。

スリランカ（セイロン島）原産とされる「シナモン」は、香味の高い「香辛料」として、今も世界中で愛されています。日本名の「ニッキ」は、下表のように利用部位のちがいがありますが、同じ植物種とされています。「シナモン」は、樹皮を利用するという特殊な「香辛料」で、好みによるとはいえ、煎じて飲料とする活用法があります。主な活用法は、菓子類への香味料です。

「シナモン」が四大香辛料の一つとされる要因は、薬効もさることながら、「香味」が

## ■「シナモン」の概要と16世紀の主産地

|                                            |                                                                              |                  |                |
|--------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|------------------|----------------|
| 肉桂（ニッケイ・ニッキ）<br>（英：Cinnamon）<br>（葡：Canela） |                                                                              |                  |                |
| 品 名                                        | ニッキ                                                                          | カシア（Cassia）      | シナモン（Cinnamon） |
| 植物分類                                       | クスノキ科ニッケイ属の常緑樹                                                               |                  |                |
| 製 法                                        | 根を乾燥                                                                         | 樹皮を剥ぎ、コルク層を除いて乾燥 |                |
| 原 産 地                                      | 中国南部、台湾                                                                      | インド北部            | スリランカ（セイロン島）   |
| 主な用途                                       | 薬味添加料、茶飲料、芳香料                                                                |                  |                |
| 効 能                                        | 抗菌性があるため、食材の防腐効果のほか、精油は、病原菌などの増殖を抑制する作用がある。消化促進の効能があり、漢方生薬として、整腸や解熱などの処方がある。 |                  |                |
| 効能リスク                                      | 含有成分「クマリン」の長期多量摂取が、肝臓障害を起こす可能性がある。妊娠中や授乳中の多量摂取、他の薬剤との相互作用による健康障害の可能性はある。     |                  |                |
| 16 世紀の<br>主要生産地                            | スリランカ（セイロン島）                                                                 |                  |                |
| 主要交易地                                      | カリカット／ゴア（インド）                                                                |                  |                |
| 主な現地購入者                                    | イスラム商人                                                                       |                  |                |





## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

かなりのウェイトを占めています。いわゆる「香料 (Flavor)」です。一般的な「香料」の概念は、食用以外の香り（お香、香水等）を含んでいます。飲食用が多い「シナモン」は、ここでは「香辛料」とします。

「シナモン」の最も重要なポイントは、薬効よりも香味が醸す「雅」を、ヨーロッパ人が重視したことです。その意識差は明白で、一方は、薬理的に病根を治癒したいという欲求、一方は、病魔への恐怖心を和らげ、幸福感を得たいという欲求です。ヒトにはどちらの欲求もあり、一方を善悪で断じることではできません。

「シナモン」が担った役割は、精神活動を和ませる効能に力点が置かれたことです。いわゆる「麻薬 (Drug)」的な効能です。「シナモン」に、幻覚などの精神障害を起こす麻薬性は確認されていませんが、薬理的に心を落ち着かせる効能は、近代薬理療法に通じます。「雅」を感じさせながら、現実認識を一時的に切り替える妙薬、ということです。

一方、ニューギニアに近いバンダ (Banda) 諸島原産の「ナツメグ」は、種子の中にある

仁を乾燥させた「香辛料」です。「シナモン」と同様に「香味」が強く、食材の「くさ味」を紛らせるために用いられったりします。食欲不振や腸内不調に、効能があるとされています。また、種子を包む種皮を乾燥させた「メース」は、抗菌作用があるとされています。しかし、含有成分の「ミリスチシン」と「エレミシン」は、多量摂取すると、めまいや幻覚など、精神障害を起こす可能性があります。いわゆる「中毒 (Poisoning)」症状です。

「ナツメグ」のカリカットでの 1518 年の取引価格は、対胡椒比で「クローブ」と同程度、現産地価格の 20~25 倍程度だったとされています。ポルトガル人は、「クローブ」と同様に、現地取引を求めて、バンダ海への航海に出ました。

「香料」という概念は、一般的には「良い香り」と認識されています。香りによって好き嫌いがあり、すべての人が「良い香り」と感じるかどうかは、個人の嗜好の問題です。ただ、一定の薬理効果がある香りの良い「香辛料」は多く、味覚の歴史を考える上で、ある種の役割を担ったことは確かです。

## ■「ナツメグ」の概要と 16 世紀の主産地

| 【ニクズク】「肉豆蔻」と「メース」の生産地 |                                                                         |             |                                                                                       |
|-----------------------|-------------------------------------------------------------------------|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 品 名                   | 肉豆蔻（ニクズク）<br>（英：Nutmeg）<br>（葡：Noz muscada）                              |             |                                                                                       |
|                       | ナツメグ（Nutmeg）                                                            | メース（Mace）   |  |
| 植物分類                  | ニクズク科ニクズク属の常緑樹                                                          |             |                                                                                       |
| 製 法                   | 乾燥種子の仁を加工処理                                                             | 種子を包む仮種皮を乾燥 |                                                                                       |
| 原 産 地                 | バンダ諸島（インドネシア・バンダ海東部）                                                    |             |                                                                                       |
| 主な用途                  | 消臭調味料、香味料                                                               |             |                                                                                       |
| 効 能                   | 少量の服用で、食欲不振を改善する効能がある。お腹の張り、腹痛、下痢、結腸炎などの改善にも効能があるとされる。                  |             |                                                                                       |
| 効能リスク                 | 多量摂取すると、含有成分「ミリスチシン」「エレミシン」が、めまい、興奮、幻覚などの精神症状態（中毒）を起こすことがある。年少者の死亡例がある。 |             |                                                                                       |
| 16 世紀の<br>主要生産地       | バンダ諸島、中国沿岸南部                                                            |             |                                                                                       |
| 主要交易地                 | マラッカ／バンダ諸島                                                              |             |                                                                                       |
| 主な現地購入者               | 華人船（ジャワ商人が介在か）                                                          |             |                                                                                       |

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## ◆サムシング・エニシング&amp;エブリシング

世界には、100 種類以上の「香辛料」があると言われています。日本では、厚生労働省が定義した「香辛料」として 2006 年現在、「スパイス」が 51 種 69 品目、「ハーブ」が 59 種 69 品目、合わせて 110 種 138 品目が指定されています。同植物の利用部位のちがい（果実、茎、根、葉など）によっても、品目の区分がなされています。

「香辛料」の分布は、世界各地に及び、下表が示すように、ヨーロッパ原産品も少なくありません。歴史的に見て地中海文化圏は、「香辛料」を多用する食文化が、育っていたと言えます。「香辛料」の主な役割は、①料理に風味を添える、②料理に辛味を加える、③料理に彩りを添える—とされています。薬効は、その役割から外れているように見えま

すが、現実的には防臭や防腐などの役割を、負っていたと思われます。

ヨーロッパ中世の医学には、体内に宿った悪魔（病根）を、体外に出すのが医術とする考え方があったとされています。後の外科治療法の基底となる考え方かもしれません。その考え方に従うと、吐瀉（嘔吐と下痢）、瀉血（血を抜き取ること）、排泄（排尿と排便）、発汗、吐血などは、悪魔が体外に出て行ったことを意味することになります。排泄はともかく、下手をすれば死に至るこれらを促す施術は、現代医療では、実施する場合は慎重を期すと考えられます。

東洋医学は、人体に備わった自然治癒力を重視する傾向が強いと言われています。ヒトは元来、自然の一部として生を受け、その自然の摂理と共にあることで、生命を維持して

## ■世界の主な香辛料

| 名 称     | 生 薬 名         | 原 産 地 | 効 能             | 摘 要      |
|---------|---------------|-------|-----------------|----------|
| オリーブ    | 橄欖（カンラン）      | 地中海沿岸 | （※厳密には香辛料に属さない） |          |
| コリアンダー  | —             | 地中海沿岸 | 健胃効果等           | アレルギー等   |
| フェンネル   | 茴香（ウイキョウ）     | 地中海沿岸 | 多効能あり           | 安全度は高い   |
| ローリエ    | 月桂葉（ゲッケイヨウ）   | 地中海沿岸 | 抗炎症作用等          | 皮膚炎事例    |
| セージ     | —             | 地中海沿岸 | 抗酸化作用等          | 長期大量は危険  |
| タイム     | —             | 地中海沿岸 | 糖尿病予防等          | アレルギー等   |
| クミン     | 馬芹（バキン）       | エジプト  | 抗菌作用等           | —        |
| アロエ     | —             | アフリカ  | 消化器作用           | 苦味大、未解明多 |
| サフラン    | 蕃紅花（バンコウカ）    | 西南アジア | 抗うつ性作用等         | 大量摂取は危険  |
| ウコン     | 鬱金（ウコン）       | インド   | 肝機能強化等          | 過剰摂取は注意  |
| カルダモン   | 小豆蔻（ショウズク）    | 南西インド | 芳香性胃腸薬          | —        |
| バジル     | —             | インドなど | 蚊の殺虫剤           | —        |
| ジャスミン   | オオバナソケイ       | アジア熱帯 | リラックス効果         | —        |
| ガーリック   | 大蒜（タイサン）/ニンニク | 中央アジア | 抗酸化作用等          | 過剰摂取は注意  |
| ミント     | 薄荷（ハッカ）       | ユーラシア | 冷感効果等           | アレルギー    |
| ホアジャオ   | 花椒（ホアジャオ）     | 中国    | 温薬効果等           | —        |
| バニラビーンズ | —             | 中米    | 抗酸化作用等          | —        |
| オールスパイス | 三香子（サンコウシ）    | 中米    | 食欲増進等           | —        |

※出典）丁宗鐵編著『スパイス百科』

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

いるとする考え方でしょう。「医食同源」とは、その自然の生命力との共存を促そうとする考え方と理解しています。それに対してヨーロッパでは、自然を野蛮と考え、自然治癒力なるものを、信じない傾向が強いと言われています。創造主である神は、そのような力など、罪を背負って生まれるヒト（野生状態のヒト）には、与えなかったということでしょう。

ここで述べたいのは、洋の東西の自然に対する考え方のちがいではありません。「香辛料」の薬理的活用は、中国では、古くから生薬に関する記述がありました。明末にまとめられた『本草綱目』には、1892 薬種の効能や副作用が掲載されています。これだけの知見は、当時の世界では例を見ないと言えます。

当時のヨーロッパには、中国並みの知見があったとは言えません。「香辛料」が乱用される傾向が強まった可能性は、否定できないのです。いわゆる「ミックス・スパイス (Mix Spice)」は、今日ではカレー粉が一般化していますが、闇雲に「香辛料」を混合して飲食した時、人体がどんな反応を示すかは、全く未知数です。それが横行し、ヒトが激しい嘔吐や下痢を誘発したことを、悪魔が体外に出た薬効と考えたとすれば、言語道断と言わざるを得ないでしょう。

香辛料は、そういう一面を持っていたと思われます。しかし、16 世紀頃のヨーロッパでは、衛生管理として、繊維品を熱湯で煮て消毒する煮沸や石鹸による洗浄が行われ、芽生え始めた衛生習慣を、一括りでアジアに劣っていたとするのは、適切とは言えないでしょう。

## ◆バック・イン・ザ・ジャパン

日本における「香辛料」の利用は、江戸時代以前は、仏教的伝統もあって、魚介類を除く肉料理を多食しなかったことから、ヨーロッパや中国のように、熱心にそれを消費する「香辛料文化」は育ちませんでした。スパイスの主様と呼ばれる「胡椒」さえ、需要という点では、ほとんどないに等しい産品でした。日本人から見れば、ヨーロッパ人が、健康目的であれ、利益目的であれ、東南アジアまで赴いてそれを求める意図を、理解できないと感じたのが本音かもしれません。

そうした中で、日本に根づいたのは、「生姜」や「ワサビ」などの調味野菜です。いわゆる「薬味」と呼ばれる品々です。

日本の「薬味」の歴史は古く、「ワサビ」の栽培は、奈良時代まで遡るとされています。「薬味」は、ヨーロッパ人が好んだ粉末状の加工品より、「きざみネギ」や「すりおろしダイコン」のように、生の食味を活かす調理

## ■「ショウガ」の概要

| 品 名      | 生姜 (ショウガ)<br>(英: Ginger)                                                  |                                                                                       |
|----------|---------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 植物分類     | ショウガ科ショウガ属の多年草                                                            |  |
| 製 法      | 地下根茎を乾燥、または、すりつぶして粉状にする                                                   |                                                                                       |
| 原 産 地    | 東南アジアとされる                                                                 |                                                                                       |
| 主な用途     | 薬味調味料                                                                     |                                                                                       |
| 効 能      | からだを温め、胃の働きを助ける。辛味成分「ジンゲオール」に、消化促進や殺菌作用があるとされる。加熱生成の「ショウガオール」にも薬効があるとされる。 |                                                                                       |
| 効能リスク    | 多量摂取すると、胃腸が荒れる。妊娠中の女性や幼児の過剰摂取は、悪影響を及ぼす可能性がある。                             |                                                                                       |
| 16 世紀の交易 | ヨーロッパ種もあるが、リスボンからロンドンに転売された記録がある。                                         |                                                                                       |



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

法が多いのが特徴です。中国伝来の「五味／五性（熱・温・平・涼・寒）」の考え方が影響していて、まさに「薬」としての効能に力点が置かれたたていたと言えます。アジア原産の伝来種が大半で、自家栽培種として根づきました。下表の中で、16世紀以降にヨーロッパ人がもたらしたのは、南米チリ原産の「唐辛子」に限られます。スペインから中国経由でもたらされたパプリカの一種です。これも輸入交易品にはならず、自家栽培種として広がりました。

日本は、「香辛料文化」が貧困と良く言われます。しかし、私たちは、そのようには考えません。確かに日本の伝統的な食文化は、仏教的戒律による「不殺生」の定理から、植物性食品に偏る傾向がありました。食肉摂取量が低く、乳製品の伝統もなかったため、明治時代以前は、輸入香辛料の需要は限定的でした。結果として、タンパク質摂取量に劣り、日本人の体格は、他国より貧弱な傾向がありました。しかし、高タンパク高カロリー食品を、長期的に摂取し続けることから生じるリスクを、低くするメリットがありました。「薬味」に、過剰摂取による健康への影響やアレ

ルギーのリスクがないとは言えません。しかし、日本固有の食文化を彩る食品になっていることは確かです。

## ◆ロング・アンド・ワインディング・ルート

私たちは、16世紀に始まる世界規模の「香辛料」の歴史を垣間見ながら、「香辛料」にヒトは何を求めたのかを考えました。もちろん、その答えはわかりません。食の安全を図ること、体調を整えること、味覚を楽しむこと、あるいは、心に火を点けること、心を穏やかにすること。または、莫大な利益を得ることだったかもしれません。

しかし、その「香辛料」を求めるヒトの姿そのものが、病的だったという側面が、どうしても心の片隅に残ります。ヒトはどうして、それに何を求めて、荒波に揉まれる長い船旅を続けたのか。食習慣が招いた弊害の解消法を、まだ見ぬ世界に赴いてまで求めたということなのか。「香辛料」は、そのことをヒトに問うている気がして、仕方がないのです。

なお、ここで取り上げなかった「茶 (tea)」の歴史は、イギリス貿易の項で取り上げたいと思います。また、中南米原産野菜については、スペイン貿易の項で取り上げます。

## ■主な日本の「薬味」と五味五性

| 名 称   | 別 名            | 原産地    | 薬味  | 薬性 | 薬効      |
|-------|----------------|--------|-----|----|---------|
| ワサビ   | 山葵（ヤマアオイ）      | 日本     | 辛   | —  | 抗菌作用など  |
| ネギ    | ウェルシュオニオン      | 中央アジア  | 辛   | 温  | 利尿作用など  |
| ダイコン  | ラディシュ／夢ト       | 諸説     | 辛・甘 | 涼  | 消化促進など  |
| シソ    | 大葉（オオバ）        | 中国     | 辛   | 温  | 抗菌作用など  |
| ミツバ   | —              | 東アジア   | —   | —  | 鎮静作用など  |
| ミョウガ  | ジャパニーズ・ジンジャー   | 東アジア   | —   | 寒  | 鎮静作用など  |
| サンショウ | 椒（ハジカミ）        | アジア    | 辛   | 熱  | 代謝を高める  |
| 胡麻    | セサミ            | アジアか？  | —   | 平  | 抗酸化作用など |
| 梅     | 烏梅（ウバイ）        | 中国     | 酸   | 温  | 抗菌作用など  |
| カラシ   | 芥子（ガイシ）／マスタード  | 西アジア以西 | 辛   | 熱  | 抗菌作用など  |
| 唐辛子   | パプリカ／辛椒（チンジャオ） | チリ     | 辛   | 熱  | 抗菌作用など  |

※引用）丁宗鐵編著『スパイス百科』、難波恒雄著「薬膳原理と食・薬材の効用（１）（２）」など

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## 【出典及び参考文献】

- ・歴史学研究会編『世界史年表 第2版』（2001年12月、岩波書店）
- ・日本歴史大辞典編集委員会編『日本史年表 増補新版第1刷』（1984年10月、河出書房新社）
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』（1972年、山川出版社）
- ・村川堅太郎ほか著『世界史地図』（1983年3月、第23刷、山川出版社）
- ・野村正七ほか編著『世界地図帳』（1985年1月、第7刷、昭文社）
- ・桑名一博編『西和中辞典』（1987年2月、小学館）
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』（1989年、旺文社）
- ・国松孝二編『独和大辞典』（1990年1月、小学館）
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』（1977年、研究社）
- ・フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 日常性の構造 2「第6章 技術革命と技術の遅れ 三大技術革新」』（1986年3月、第2刷、みすず書房）
- ・ボイス・ペンローズ著、荒尾克己訳『大航海時代 旅と発見の二世紀』（1985年、筑摩書房）

## ◆海洋が求めた技術開発と能力向上

## ◎大航海を支えた造船技術

- ・アティリオ・クカーリ／エンツォ・アンジェリッチ共著、堀元美訳『船の歴史事典 コンパクト版』（2002年6月、原書房）
- ・ウィキペディア／キャラック船 <https://ja.wikipedia.org/wiki/キャラック船>
- ・ウィキペディア／キャラベル船 <https://ja.wikipedia.org/wiki/キャラベル船>
- ・ウィキペディア／コロンブス <https://ja.wikipedia.org/wiki/クリストファー・コロンブス>
- ・ウィキペディア／サンタ・マリア号 <https://ja.wikipedia.org/wiki/サンタ・マリア号>
- ・レオノール・フレイレ・コスタ著、山田義裕訳「リスボン河畔造船所のナウ船とガレオン船 喜望峯航路のための 16世紀における造船」（1997年版、2013年訳出）
- ・ホセ・ルイス・ルビオ・セラーノ著、山田義裕訳「インディアス船隊のナオ船とガレオン船の造船（1492年～1590年）」（1991年6月版、2015年4月訳出）
- ・山田義裕著「16世紀のポルトガルのインド交易とその船隊 一奇書：“船隊備忘録”」（2002年4月、日本海事史学会例会資料）
- ・山田義裕著「16世紀末のスペイン船の設計基準とトネラーダ、そしてポルトガル」（2013年7月、日本海事史学会例会資料）
- ・山田義裕著「マニラ・ガレオン」（2011年9月、日本海事史学会例会資料）
- ・山田義裕著「スペインのアメリカ植民地における二つの艦隊 一海賊との戦いー」（2018年3月、日本海事学会例会資料）
- ・ウィキペディア／支倉常長 <https://ja.wikipedia.org/wiki/支倉常長>
- ・ウィキペディア／サン・ファン・パウティスタ号 <https://ja.wikipedia.org/wiki/サン・ファン・パウティスタ号>

## ◎地球上の経度と「教皇子午線」

- ・国立天文台／暦 Wiki「天文航法／緯度の決定」<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/>
- ・国立天文台／暦 Wiki「天文航法／経度の決定」<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/>
- ・深畑幸俊著「世紀の難問「経度問題」とのアナロジーから地震予知の将来について考える」（『京都大学防災研究所年報 55号B』、2014年9月、京都大学防災研究所）  
<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/nenpo/no55/ronbunB/B55.pdf>
- ・デーヴァ・ソベル著、藤井留美訳『経度への挑戦』（角川文庫、2010年6月、角川書店）
- ・和氣博嗣著「ジョン・ハリソンとクロノメータ」（『海事資料館研究年報 21巻』、1993年、神戸大学学術成果リポジトリ）[http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/bresult](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/bresult)
- ・山内庄司著「航海術とクロノメーター」（国立香川高等専門学校 特別講義資料、2017年7月）
- ・藤井春三著「月距法の計算」（『航海 26巻』、1967年9月、日本航海学会、J-STAGE）  
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>
- ・箱岩英一著「伊能忠敬の全国測量と至時」（『天文月報 2005年6月号』、2005年6月、日本天文学会、J-STAGE）<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>
- ・ルイス・デ・アルブケルケ著、山田義裕訳「発見史への導入 第三章 天文学の知識と航海術」（1962年版、2012年1月訳出）
- ・シチズン「クロノグラフの長～い歴史」<https://citizen.jp/support/useful/chronograph02.html>
- ・ウィキペディア／世界各地の本初子午線 <https://ja.wikipedia.org/wiki/本初子午線>

## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

## ◎火薬の世紀への序章

- ・クライブ・ボンディング著、伊藤綺訳『世界を変えた火薬の歴史』(2013年4月、原書房)
- ・東京大学駒場図書館・情報基盤センター蔵『八幡愚童記』(大日本海志編纂資料 第四部門「外交・海防」) <http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/kaishi/pages/4-1-03.html>
- ・市立米沢図書館デジタルライブラリー『武経総要 前集 22 巻、埒百戦奇砲 1 巻、後集 21 巻、埒行軍須知 2 巻』(米沢善本 40) <http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA040.html>
- ・久保田浪之介著『火薬学の基礎』(2013年7月、日刊工業新聞社)
- ・瀧本真徳著「硫黄と私たちの生活」(『化学と教育』62巻1号、2014年、日本化学会)
- ・岡田登著「本草硝石より黒色火薬への発展」(『薬史学雑誌』Vol. 13 No. 2、1978年、日本薬史学会)
- ・板垣英治著「五箇山の塩硝」(『大学教育開放センター紀要』第18号、1998年10月、金沢大学大学教育開放センター) <https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/>
- ・山内晋次著「硫黄からみた日本史と世界史」(2011年10月、帝国書院) [https://www.teikokushoin.co.jp/journals/history\\_world/pdf/201110/05\\_hswb1\\_2011\\_10\\_p05.pdf](https://www.teikokushoin.co.jp/journals/history_world/pdf/201110/05_hswb1_2011_10_p05.pdf)
- ・佐藤圭四郎著「ムスリム商人の活動」(『岩波講座 世界歴史 8 西アジア世界』、1974年2月、岩波書店)
- ・本田実信著「イスラムとモンゴル」(『岩波講座 世界歴史 8 西アジア世界』、1974年2月、岩波書店)
- ・ジクリト・フンケ著、高尾利数訳『アラビア文化の遺産』(1990年10月、みすず書房)
- ・ウィキペディア／イブン・アル＝バイタル  
<https://commons.wikimedia.org/wiki/イブン・アル＝バイタル>
- ・ウィキペディア／マドファ  
<https://commons.wikimedia.org/wiki/マドファ>
- ・向正樹著「モンゴル帝国と火薬兵器—明治と現代の「元寇」イメージ—」(2017年、「第57回 SGRA フォーラム 第2回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」資料)
- ・アミン・アマルーフ著、牟田口善郎・新川雅子訳『アラブから見た十字軍』(1994年10月、リブレポート)

## ◎鉄砲が海を渡る

- ・クライブ・ボンディング著、伊藤綺訳『世界を変えた火薬の歴史』(2013年4月、原書房)
- ・宇田川武久編『日本銃砲の歴史と技術』(2013年9月、雄山閣)
- ・所壮吉著『火縄銃』(1994年12月、雄山閣出版)
- ・中島楽章著「銃筒から仏郎機銃へ—十四～十六世紀の東アジア海域と火器—」(九州大学学術情報リポジトリ、2011年3月) <https://doi.org/10.15017/19793>
- ・孫来臣著、中島楽章訳「東部アジアにおける火器の時代 1390-1683」(『九州大学東洋史論集』、2006年4月、九州大学文学部東洋史研究会) <https://doi.org/10.15017/25835>
- ・村井章介著「鉄砲伝来と倭寇勢力 宇田川武久氏との討論」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第201集、2016年3月、国立民俗博物館)
- ・村井章介著「日本史と世界史のはざま」(『学術の動向』、2011年10月、日本学術協力財団)
- ・橋本雄著「朝鮮国王使と室町幕府」(日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書 第二分科(中近世)』、2005年6月)
- ・新井宏著「鑄鉄砲の歴史と技術問題」(『鑄造工学』第76巻第7号、2004年、日本鑄造工学会)
- ・宇田川武久著「戦いを支えた技術 砲術師と鉄砲鍛冶の活動」(有光友學編『日本の時代史 12 戦国の地域国家』、2003年5月、吉川弘文堂)
- ・鈴木康久著『西ゴート王国の遺産 近代スペイン成立への歴史』(中公新書 1283、1996年1月、中央公論社)
- ・渋谷聡著「近世ヨーロッパにおける戦争と国家形成—ヨーロッパ諸国家体系・宗派化・戦争—」(『西洋史学』、2010年、日本西洋史学会、島根大学学術情報リポジトリ) <http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/36744>
- ・趙士楨(明)撰、英平吉郎ら(江戸)版『神器譜 5 巻(文化5年・1808年)』(国立国会図書館デジタルコレクション) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2567964>

## ◎メディカル・ミステリー・ツアー

- ・丁宗鐵編著『スパイス百科』(2018年1月、丸善出版)
- ・榎田千佳子／エスビー食品監修『贅沢時間 スパイス&ハーブ事典』(2015年3月、学研パブリッシング)
- ・山田憲太郎著『香薬東西』(2011年7月、法政大学出版局)
- ・フレッド・ツァラ著、武田円訳『スパイスの歴史』(2014年4月、原書房)
- ・厚生労働省「『食品衛生法等の一部を改正する法律による改正後の食品衛生法第11条第3項の施行に伴う関係法令の整備について』の一部改正について」(2006年10月、厚生労働省医薬食品局食品安全部)



## 歴史研究

## 「近代」というシナプス

- ・李時珍撰／李建中図『本草綱目』（万暦 18 年、胡承竜刊、榊原家蔵函碕文庫、国立国会図書館デジタルコレクション）<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1287025?tocOpened=1>
- ・李時珍編輯／武林銭蔚起鏡石父軟訂『重訂本草綱目』（承応 2 年、野田弥次右衛門刊、武林銭衛蔵版、東邦大学「額田文庫デジタルコレクション」）  
[https://www.toho-u.ac.jp/archives/nukada\\_bunko/kaidai/kaidai-35.html](https://www.toho-u.ac.jp/archives/nukada_bunko/kaidai/kaidai-35.html)
- ・李利／江原絢子著『『本草綱目』と『本朝食鑑』の分類にみる食文化的な特徴』（『日本調理科学会誌 第 40 巻第 3 号』、2007 年 6 月、日本調理科学会）  
[https://www.jstage.jst.go.jp/browse/cookeryscience/40/3/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/cookeryscience/40/3/_contents/-char/ja)
- ・上馬場和夫著「伝統医学の可能性—最も古いものに最も新しいものがある—」（『日本補完代替医療学会誌 第 1 巻第 1 号』、2004 年 2 月、日本補完代替医療学会）  
<http://www.jcam-net.jp/shoseki/kaishi.html>
- ・中谷延二著「香辛料に含まれる機能成分の食品化学的研究」（『日本栄養・食糧学会誌 第 56 巻第 6 号』、社団法人日本栄養・食糧学会）  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsnfs1983/56/6/56\\_6\\_389/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsnfs1983/56/6/56_6_389/_article/-char/ja/)
- ・中谷延二著「香辛料の機能性成分」（大阪市立大学大学院編集委員会編『生活科学研究誌 第 1 巻』、2002 年、大阪市立大学大学院生活科学研究科・生活科学部同誌編集委員会）
- ・長谷川貴志、高橋市長、西條雅明、吹譚友秀、小倉誠、元木裕二著「黒コショウを含有したいわゆる健康食品におけるピペリン含有量について」（『千葉県衛研年報 第 59 号』、2010 年 1 月、千葉県衛生研究所）  
<https://www.pref.chiba.lg.jp/eiken/eiseikenkyuu/shuppanbutsu/nenpou/index.html>
- ・千葉栄一／新谷明喜著「クローブ（ユーヅノール）の歴史」（『日本歯科医史学会会誌 第 27 巻第 11 号』、2007 年 3 月、日本歯科医史学会）<https://ci.nii.ac.jp/naid/110007158636>
- ・内閣府食品安全委員会「ドイツ連邦リスク評価研究所(BfR)、健康影響評価「シナモンを多く摂取する消費者は、現今、クマリンに高度に暴露されている」を公表」（2006 年 9 月、食品安全総合情報システム）  
<http://www.fsc.go.jp/fsciis/foodSafetyMaterial/show/syu01610030314>
- ・大学病院医療情報ネットワークセンター「中毒時の対応に関する情報（中毒情報）について ナツメグ」<https://www.umin.ac.jp/chudoku/chudokuinfo/i/i041.txt>
- ・難波恒雄著「薬膳原理と食・薬材の効用（1）」（『日本調理科学会誌 第 32 巻第 4 号』、1999 年 11 月、日本調理科学会）  
[https://www.jstage.jst.go.jp/browse/cookeryscience/32/0/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/cookeryscience/32/0/_contents/-char/ja)
- ・難波恒雄著「薬膳原理と食・薬材の効用（2）—薬膳に用いる身近な食物」（『日本調理科学会誌 第 33 巻第 1 号』、2000 年 2 月、日本調理科学会）  
[https://www.jstage.jst.go.jp/browse/cookeryscience/33/1/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/cookeryscience/33/1/_contents/-char/ja)
- ・三成由美／徳井教孝／福本あずさ／朱根勝／郭折／菅原龍幸著「中国薬膳調理のための食材分類」（『日本食生活学会誌 第 11 巻第 3 号』、2000 年 12 月、日本食生活学会）  
[https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jisdh/11/3/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jisdh/11/3/_contents/-char/ja)
- ・厚生労働省「第十七改正日本薬局方 電子版 医薬品各条（生薬等）」（2016 年 3 月）  
<http://jpdh.nihs.go.jp/jp17/>
- ・岡美穂子著「近世初期の南蛮貿易の輸出入品について—セビーリヤ・インド文書館所蔵史料の分析から—」（『東京大学史料編纂所研究紀要 第 18 号』、2008 年 3 月）  
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/kiyo0018.html>
- ・山田義裕著「16 世紀のポルトガルのインド交易とその船隊—奇書：“船隊備忘録”」（2002 年 4 月、日本海事史学会例会資料）<http://yamada-maritime.com/>
- ・ウィキペディア「コショウ (Piper nigrum drawing 1832.jpg)」  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Piper\\_nigrum\\_drawing\\_1832.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Piper_nigrum_drawing_1832.jpg)
- ・ウィキペディア「クローブ (Syzygium aromaticum—Köhler-s Medizinal-Pflanzen-030.jpg)」  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Syzygium\\_aromaticum-Köhler-sMedizinal-Pflanzen-030.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Syzygium_aromaticum-Köhler-sMedizinal-Pflanzen-030.jpg)
- ・ウィキペディア「ニッケイ属 (Cinnamomum camphora —Köhler-s Medizinal-Pflanzen-181.jpg)」  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Cinnamomum\\_camphora\\_-\\_Köhler-\\_Medizinal-Pflanzen-181.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Cinnamomum_camphora_-_Köhler-_Medizinal-Pflanzen-181.jpg)
- ・ウィキペディア「ナツメグ (Myristica fragrans —Köhler-s Medizinal-Pflanzen-097.jpg)」  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Myristica\\_fragrans\\_-\\_Köhler-s\\_Medizinal-Pflanzen-097.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Myristica_fragrans_-_Köhler-s_Medizinal-Pflanzen-097.jpg)
- ・ウィキペディア「ショウガ (Koeh-146-no text.jpg)」  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koeh-146-no\\_text.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koeh-146-no_text.jpg)
- ・内田久美子訳『ビートルズ全詩集』（1990 年 12 月、シンコー・ミュージック）

# 「近代」というシナプス ～連鎖する「近代革命」～

## 次 章 予 告

### 第4章 マリンブルーからシルバークレーへ

#### ◆スペイン誕生とヨーロッパの地政変化

幾重にも上書きの地域で

王族をめぐる女性継承者

内から外への「コンキスタ」

泥沼のイタリア戦争

#### ◆銀の波紋が世界を揺るがす

「銀の世紀」の幕開け

東アジアの銀事情

「価格革命」の構造（予定）

スペイン王室の財政構造（予定）

#### ◆海を渡った食べ物たち

救世主はポテト（予定）

トマト&ストロベリー（予定）

パプリカン・ドリーム（予定）

ほか

**シンキング・バーズ新書**

「近代」というシナプス  
～連鎖する「近代革命」～ 第3章

2019年7月1日（初版）発行

著 者：シンキング・バーズ  
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バーズ**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表、グラフを含めてシンキング・バーズ及び当該著作権者に帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。